
家庭教師ヒットマンREBORN! 自由な風、来る！～改～

難波 壱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンREBORN！ 自由な風、来る！〜改〜

【Nコード】

N6945Y

【作者名】

難波 壱

【あらすじ】

※『家庭教師ヒットマンREBORN！ 自由な風、来る！』の改版です。

風間南は交通事故に巻き込まれ、死んでしまった。しかし神の手違いだったため『転生』することになった！転生先は『家庭教師ヒットマンREBORN！』の世界！！面倒くさがりや&自由過ぎる性格の南はどうするか！？

南の第二の人生が幕を開ける…

S t r a o r d i n a r i a m e n t e 1 登場人物! 1

カザマ ミナミ
風間 南

性別 女

年齢 12

身長 165cm

体重 45kg

一人称 オレ

誕生日 9月7日

性格 自由、冷静、興味ないと全然反応を示さない、面倒事が大嫌
い、仲間は人一倍大事にする

髪の色 茜色

目の色 黒

髪型 ショートカットで、毛先が外側にハネている

目の形 フランと同じだが、目の下の▼は無い

ファッション 黒、白、青、緑、赤、などの男モノ系

アクセサリー 金属（銀色のみ）、黒や白っぽい色のモノ
（シンプルなモノ）

ピアスを両耳3つ付けてる

必需品 ケータイ、財布、iPod touch、リングペンダント、小型ノートパソコン（電子辞書サイズ）

十雅^{トオガ}（神）

性別 男

年齢 不明（本人は『3万年以上は生きてると思うんだけどなー』
と言う）

身長 175cm位（南の予想）

体重 不明

一人称 オレ

誕生日 不明

性格 前向き、好奇心旺盛で思ったことはすぐに行う、余計なことを言うことが多い

髪の色 金と銀が混ざったような色

目の色 空色

髪型 南と同じ位のショートカットだが、天パ

ファッション ラフな服装

アクセサリー 特にない

必需品 特にない

ヤマシタ サキ
山下 咲

性別 女

年齢 12

身長 148 cm

体重 44 kg

一人称 私

誕生日 12月15日

性格 明るい、誰にでも優しい、無邪気、自分では気づいていない
が自分第一で自分勝手

髪の色 茶色

目の色 茶混じりの黒

髪型 ロング（腰あたりまでである）だが、いつもはお団子にしている

ファッション 清楚系（特に白、薄ピンク）

アクセサリ かわいいものが好き

必需品 ケータイ、ポーチ（くし、鏡など）etc

S t r a o r d i n a r i a m e n t e l 登場人物! 1 (後書き)

名前の由来を話しておきます。

まず、主人公の『風間南』。

『南』は男でもありそうな名前にしたかったからです。

『風間』は…。

三文字がいい、と思って、そこからは何となく…。

『十雅』は…。

『神』＝『G O D』（逆から読む）『ゴッド』↓（何かがあった）

『十雅』です。

何があったのかは…。

私の気まぐれでこうなりました。

そして『山下咲』。

これも何となくですね。

あるとしたら、名前順とかいなる時に後ろの方にさせたかったんです。

『や』だと南の苗字、『風間』と離れるので。

こんな理由があつてこのような名前にしました！

これからも新キャラ出す時に由来を話していこうと思います♪

Episode 1 むかつく神と会う！

オレの名前は風間南。

性別：女。

なったばかりの中学1年：とはいっても私立の小学校から中学になっただけだからあんま変わんねエかな。

今は、ズボンの制服着て、カバン持って信号待ち中。

あ？なんで女なのにズボンの制服かって？

ンなモン、スカートなんて着たくねエからに決まってんだろ！

あ、信号が青になった。

「ふう…」

オレはゆつくりと信号を渡り始める。

メンドクサイ。何もかもが。

学校行って何になる？

オレには何にもならない。

…もう、アイツはいないから……。

「…つまんねーの」

そう、眩いた時だ。

キキイイイイッッッ！！！！！

ドカアアンッッッ！！

「！！！！？？！！？！！」

オレのすぐそばでトラックと軽自動車の交通事故発生。

あ…。

オレのほうに来る！！？！！？？

ドンッッッッッ！！！！！！

オレは見事に巻き添えをくらい、どれだけのスピードをだしていたのか、数メートル先まで飛ばされた。

「キャアアアツツ！！！」

「おいっ！ 意識はあるか！？」

「き、救急車を呼べ！！」

オレの近くでうるさい声がする。

あー、意識はあるよ…。

?? この赤い血みみたいな液体は？

あ、オレの血？

そうだよな、巻き添え食らったもんな…。

死ぬのかな…。

ま、いつか。

悲しむ親はとっくの昔に死んだし…。

それに、親はオレが死んでも喜ぶだろうし…。

ああ…これでアイツのところに逝ける…？

思い出す…今までの人生を…。

…懐かしいな……。

「おい!! 死ぬなよ!」

「大至急来てください!!」

ああ、救急車、呼んだのか…。

でも…。

オレは眠いから…。

「…ろ…きろ…起きろ、風間南!!」

「……」

起きたけど、知らない声なので寝たふりだな。

「起きてくださいよ——」。

じゃないと、オレはず——つとオマエを呼ばなきゃいけないんだよ——」

…それはうざいな。

「…なんだよ」

「おっ　ようやく起きたか」

目を開けるが、やはり知らない男。

髪の色は金と銀が混ざったような綺麗な色で、目は空色。

外人か…？

「で？　誰だよテメエは」

「ん？　神だ！」

「冗談はいいから誰だよ」

「だーかーらー！！　か・み・さ・まー！！！！」

.....は？

「…信じてねエって顔してんな…」

「アタリマエ。」

どこにいきなり『神』つつわれて信じる奴がいるんだよ」

「え——？ 案外いるぞ？」

「…本当にそんな奴いたら見てみたいな」

「まっその話はおいといて。」

なんでここにいるか分かるか？」

ここつつわれても……。

なんもない、あたり一面真っ白。

来たことが無ければ、見たことすら無い。

真っ白過ぎて天井があるのかも分からない。

あ……。

「死んだ…からか？」

「おお——！オマエは優秀だな——！正解だ」

「やっぱりなあ…。

んで、オレになんか用？つかここドコ？」

一番疑問に思っていることを聞いてみた。

「ここは……まあ、狭間みたいな場所だ。

神と、神が許可した者した入れねーんだぜ！」

あー、こーやって『自分は本物の神様です』と伝えようとしてんのか…。

残念、オレにその手は効かねーよ。

「反応薄いな…まあいいけどよ」

「で、どうして死んだからって狭間なんかにいるんだ？

天国なり、地獄なりに早く連れてけよ」

オレとしては、アイツがいる場所希望だな。

「ああ、じゃあ説明しないとな……悪イ」

…いきなり頭を下げて謝られた。

「何が？」

するとこの男はバツの悪そうな顔をし、こう言った。

「オマエが死んだの、オレの手違いなんだわ」

……………。

「さ、殺気を収めてください…」

今度はビクビクしながら言ってきた。

「あのさー、そんなの無理に決まってるよな？」

勝手に殺されたのに、さらに謝罪の気持ちが入ってない謝り方。

…ケンカ売ってんのか、このクソ野郎？」

オレは満面の笑みで言ってやった。

目は笑ってないけどな。

「ごっごめんなさいィィ」

男はとっさに土下座した。

うん、正しい判断だな。

「それでいい。ずっとそのままでもいいろ」

「ハイ…」

「で？オレはこのままよく分かんねエこの真っ白な世界で生きていくのか？」

「いえ…転生してもらいたいのですが…」

は…？

転生？

よく小説とかである、あの転生か？

「なんでだよ」

「普通喜ぶ場所だと思いますが…」。

理由は、あなたは本来まだ生きているので、天国にも地獄にも逝けないんです」

逝くって…。

「なので、ほかの…つまり、さっきまで居た世界とは別の、元から“風間南”という人間が存在しない世界にいても構いません」

「オレが…元からいない世界？」

「ハイ…そうすればあなたは生きられますし、オレも面倒なことしなくて済みますしね★」

てへっ、と右手を頭に当てながら話す男。

ピキィイツ！

あ…オレの中の何かが切れた。

「それで、行く世界なのですが…って、え!?

やめてくださ…。

ぎゃああああああっつつつ!…!!…!!」

「んで？どの世界に行くんだ？」

オレは、全身ボッコボコになった男に向かって聞いた。

なんでこんなにボッコボコになってんだろぅな。

笑えてくる。

「か…『家庭教師ヒットマン^{かてきよー}REBORN^{リボーン}！』の世界です…」

「！？リボーン！？あれはマンガの世界だぜ！？？」

「はい……ダメですか……？」

男はビクビクしながら聞いてくる。

「…メンドクせーけど、いいぜ…原作も知ってるしな」

知ってる、つってもせいぜいジャンプで読んで、小説はレンタルで読んだ程度だけだな。

だから正確にはあんま覚えてない。

確か…アレだろ？

戦い嫌いなダメ人間の沢田綱吉がリボーンと会って、マフィアに連れていくっていう…。

ま、テキトーに過ごそう。

オレが言うとなんは花が咲いたような笑顔になり…。

「じゃあ、すぐに行きましょう!!」

立ち上がってオレに手を向けた。

「は? ちょい待て…ってホントにすぐかよ!!」

オレの全身が白く光り始めた。

絶対今すぐ行くことになんだろ!!

まだ聞きてーことあんのによ!

「それじゃあ、第二の人生楽しんでくださいっ!!」

「このッッ!!」

次会った時覚悟してろよ——!!!!」

——ここでオレは意識を失った。

真っ白な世界…狭間に1人残った神。

「や、やっぱもうちょい時間かけてからにすればよかった…」

今更後悔している。

だが、もう遅い。

南はこの男、神に次会った時にどうするかを決めているのだ。

「あ、オレの名前教えるの忘れた…」

また後悔が増えた神だった。

Episodio 2 神からの贈り物！

…ここは？

オレは確か…。

ああ、そうだった。

勝手に神に殺され、さらに勝手にリボーンの世界に転生させられた
んだっとな…。

でもここはどこだ？

オレはベッドで寝ていた。

辺りを見渡すと、なんだか見慣れた風景。

なんだ、オレの家じゃん。

起き上がると、紙が一枚。

こんなモノ、オレは置いてなかったな。

…誰からか、想像できたので読んでみた。

『どうも！神です！』

これは、言い忘れたことを伝えるために書きました！

まず、オレの名前を教える。オレは十雅^{トオガ}！！

いくら神だって、名前くらいあるんだぜ？

今度会ったときは、十雅って呼んでくれよな！

次に、オマエが今いる場所は、この世界でオマエの家となる場所だ！

かなり高級マンションだからな。

もちろん一人暮らしだ。

冷蔵庫に一週間分くらいの食いもんは入ってる。

贅沢な生活ができるぜ！

次に：この世界でのオマエの設定だ。

両親はすでに他界。

理由は、前世の両親と同じだ。

今は中学生だ 沢田綱吉と同じ学年だからな。

まあ、オマエ自身の情報は前世からの続き、といった感じだな。

前の学校を辞めて、並盛町に引っ越し、並中に通うことになった。

まあ、こんな感じだな。

制服はもちろん男子用。

許可も貰ってあるから安心して登校しろ。

ああ、クローゼットの中に入ってるからな。

学校に持っていくものはベッドの横に置いてあるカバンの中に入ってるからな。

そんなのモノも説明しとくか。

まず、並中の学生証。

次にケータイ。

これはオマエが前世で使っていたモノと全く一緒だ。

三つめは財布。

金は五千円程度だが減ったらオレに言えよ！

生活しやすいくらいに増やしてやるから。

家賃や光熱費もだしてやるよ。

んで、i P o t t o u c h 。

これは、無いと暇つぶしできねエだろ？

最後に、オレからの贈り物だ！

小型ノートパソコンの形をしているが、特殊能力のようなものが

いっぱい入っている。

もちろん、普通にパソコンとしても使えるからな。

かなり軽いから持ち運びも便利だぜ！

家にあるものは前世のオマエが持っていたモノに少し足した程度だ。

…まあ、こんくらいかな。

じゃあ頑張れ！

オレのことを呼べばオレは出てくるし、オレに会いたいって思いながら寝ればさっきの狭間の世界でオレに会えるからさ！

じゃーな！

十雅』

かなり長い手紙を読み終え、ベッドの隣に置いてあったカバンを取る。

革製じゃない、フツのスクールバッグの黒。

なんだ、これも前世と同じかよ。

なんか同じモノばかりで転生したって感じしねーな…。

中身を確認すると、手紙に書いてあったものが入ってた。

並中の学生証。

…ああ、やっぱりオレは転生したんだな…。

この世界には、アイツはいるんだろうか？

前世でのたった1つの悔い。

…もう二度目の人生だ。

この人生で悔いは絶対にしたくない。

そう思い、時間を確認する。

7時10分頃。

転校初日に遅刻はしたくないので朝食を作る。

…とはいっても、パンを焼くだけ。

そして制服に着替え、前世でも常に付けていたリングネックレスをつけ玄関に行く。

鏡を見たところ容姿は前世と変わっていなかったので安心した。

…もし変わってたら鏡見るたびに『誰だ?』になるしな…。

ま、よかったな。

重たいドアを開け、家を出る。

ああ…前世の家を出た風景を随分違う。

……もう、オレが知っている風景は家以外に無いのか…。

後悔や、名残惜しい気はしない。

ここから…今から、オレの人生は始まるのだから。

こうして、オレの第二の人生が幕を開けた。

Episode 3 並中!

「あーあ…疲れた」

オレは今登校中だ。

只今の時刻、 7時40分。

ダルイからゆっくり支度した。

それにオレは朝弱いからな。

ハア、とため息をつき並中へ向かう。

なんで並中の行き方が分かるのかって？

……ホント、何でだろうな。

まあ…迷うよりマシか。

だんだん並中が視界に入ってきた。

ふむふむ。確かに並中だ。

どんなだったかは忘れたが、『並盛中学校』って書いてあるし。

オレはゆっくりと並中に入っていた。

登校時間は約8分か。

良くも悪くもない。

近すぎるのは嫌いだし、遠いのも嫌いだからな。

ちよっとだけ十雅に感謝した南であつた。

同時刻、応接室。

「草壁、今日転校してくるっていう転校生の書類は？」

並盛最強といわれている雲雀恭弥が自分より、はるかに大柄でリーゼントの男に聞いた。

「それが…」

草壁といわれた男は少し戸惑いながら言った。

「名前、住所、電話番号といったものしか分からなかったのですが

…」

「……………」

「い…委員長？」

返事をしない雲雀を不思議に思っ、草壁は雲雀に声をかけた。

雲雀は無言で草壁から、少ししか書かれていない転校生の書類を取る。

「風間南…久しぶりに楽しめそうだよ」

雲雀は楽しそうに南の書類を置いた。

そんなことも全く知らず、南は職員室へ向かう。

自分のクラスが何組かを知るためだ。

「今日、転校生が来るんですって？」

「そうなんですよ。私のクラスになりました」

一人の女性教師と男性教師が話していた。

おそらく今日来る転校生は南のことだ。

「1－Aですか。風間さん…でしたわよね？」

「ああ、風間南というらしいですよ。問題児でないことを祈るばかりですね」

南はそれをしっかり聞いていた。

だが、別に怒っている気配はない。

『教師が新しく来る生徒は問題児ではないことを祈るのなんて普通

じゃね？
』

と思っているからだ。

「1—Aね…」

南は職員室に行かなくてもクラスが分かったため屋上へ行くことにした。

『並中といえ、やっぱり屋上だよな！』という理由からだが…。

「おおー、ここが屋上かあ…」

まだ朝早く（といってももう7時50分は過ぎているが）屋上には誰もいなかった。

ここで南に疑問が一つ。

今、原作開始からどのくらい前、または後なのか。

「…………まあ、教室行ったら分かるか」

考えても無駄だと分かり南はボーっとしていることにした。

キンコーンカーンコーン…。

学校中にチャイムが鳴り響いた。

「8時の予鈴か…ふああ…」

南を睡魔が襲った。

改めていうが、南は朝がとても苦手だ。

もちろん睡魔などに勝てるハズもなく、勝とうともせず――。

南は壁に寄りかかってグッスリと寝てしまった。

キンコーンカーンコーン。

「……んー？ 8時25分の予鈴——？」

仕方ない…そろそろ行くか…」

南は珍しくしっかり目が覚め、ゆっくりと教室に向かって行った。

「席に着けー。転校生を紹介する」

あれから教室に向かい、担任に『よく教室わかったなあ』と言われた。

時間もギリギリではあったが間に合った。

「よし。風間ー、入って来い」

「……」

無言でドアを開け、教室内に入る。

「転校生の風間南だ。風間、自己紹介をしろ」

教師は黒板に『風間 南』と書いた。

「風間南だ…。あー、一応女子だけど、まあ気にしないでいい。

…席ってどこだ？」

『自己紹介か？アレ！？』と言いたそうな奴が何人かいるがドードモいい。

『かっこいい…』とか言ってる奴もいるが、無視だ無視！！

「あ…ああ。そこの、一番窓側の席だ」

見ると、一番窓側で一番後ろの席が空いていた。

そのままその席に歩いて行って座った。

原作はつと…。

教室内を見渡すと、まだ獄寺もない。

原作開始前なのか？

…まあいいか。

オレは眠いので寝ることにした。

「よっ十雅!!」

ただ寝るのもなんだかつまらないと思い、十雅に会いにいったのだ。

「あ、来たか! んで、どこかしたか? ってまた――! ?

ぎいやああああ……!!!!」

「当たり前だあ!! よくも待てと言っているのに勝手に送り込みやがったな!!」

名前で呼んでもらったのを感謝して欲しいくらいだ!!」

「うう…すみません…」

十雅は正座して言った。

「ふん…まあいい。」

それより、今原作開始までどのくらい時間あるんだ？」

「えっと…体育の授業から開始です」

「いつのだよ」

「え…それは…忘れちゃいボブウ!!!!」

十雅が忘れた、と言いきうになった途端、南のアップーがヒットした。

「使えねーな…じゃあオレはもう行く。

じゃーな！」

「あー！！ちよっちよっと待って！

…ってもういね——！！！！

言い忘れたことがあったのにいー！！」

十雅の叫びがこだました。

パチツと目が覚めた南。

「ねえねえ風間さん！」

「どこから来たの？」

ワイワイと知らないうちにオレを囲んで群れができていた。

イラッときたのは言うまでもないだろう。

「風間さあーん！」

「…うるせえ。こっから去れ。」

目障りだ」

「かっこい——！！！」

「キャ——！！！！！」

本当にウルセエの、わかんねーのかよ…。

ああ、なんかもうメンドイ。

サボってかーえろっ！！

「いいから散れ」

オレが殺気混じりに言うと、皆が散った。

ふう…これで帰れる。

今は休み時間。

教師が来る前に、と思いカバンを取る。

そして、のんびりと帰った。

帰り際に南は思った。

『転校初日からサボって大丈夫なのか』

しかしそんなことを気にする南ではないのだった。

Episode 4 雲に会う!

並中に通うことになって、2日目。

1日目はかったるくなって帰った。

「あー、教師に何か言われそーだな…。

ま、無視すりゃいいか」

南は前世で、学校に毎日行くような人間では無かった。

しかし、それで教師に怒られたことは無かった。

だから今、南はのんびりと学校に向かっている。

それも既に遅刻している。

今は9時。

それなのに南は決して焦らない。

そして学校に着いた。

ガララッ。

教室のドアを開けると、教師も生徒も皆、南を見る。

「キサマは転校生の風間だな!？」

教師が聞いてくる。

「…だったら？」

「遅刻だ! 転校初日は無断早退。二日目は遅刻。

全く…とんでもない問題児が来てしまったようだな…」

ワザとらしく、声を大きくして言うてくる。

「学校来て何になるんだよ? オレにとってこの学校のレベルは低すぎる。だからタイクツ。

それに、問題児だと言いたければ言えればいいじゃねえか。オレは何だっていい」

ドカツ、と椅子に座る。

周りが『あの根津が押されてる!!』『すんげーいい気分♪』とか言っている。

根津、というのはこの教師のことだろう。

「…いいだろう。このことは校長にも話しておくがな。

では、風間を無視して授業を進める!!」

根津は授業を再開した。

だが南には、タイクツで仕方ない。

そして何を思ったのか、ふと席を立った。

「……今度は何だ!!」

ため息交じりに聞いてくる。

「……………オレを無視すんじゃないかったのか?」

「ぐっ……………」

南はそのまま、教室を出た。

向かったのは、屋上。

誰もいない、静かな場所に行きたかったのだ。

ギィィ…。

屋上へと続く、ドアを開ける。

「…あり？先客がいたか…」

屋上には、学ランを着て眠る男子生徒がいた。

そしてその男子生徒は南に気付き、目を開ける。

「君…誰？今は授業中のはずだけど」

「授業なんかつまんねーから抜けたんだよ」

「…その赤い髪…1—Aに転入した、風間南だね」

男子生徒は立ち上がりながら聞いてきた。

「おっ、正解」

「君は昨日、無断早退をしていて、今日も遅刻している…」。

「僕が今、ここで咬み殺してあげるよ」

「楽しそうだが、断る。ここで並盛最強の男、雲雀恭弥と戦いたくはないからな」

すると、ピクリ、と反応した。

「…やっぱり、僕のことを知っているのか」

「ああ。武器は仕込みトンファー。並中大好きな風紀委員長だろ？」

「……君、一体何者？」

男：雲雀はトンファーを構えながら聞いた。

「そんなに警戒しなくてもな…。オレは風間南、それ以上でも、それ以下でもない、ただの一般人」

「一般人なわけないよね。現に君の情報をあまり得られなかった」

「（あーそりゃそうだろうな…）それは残念だったなー。

じゃあオレは学校嫌いな自由を好む者、とでも考えておいてくれよ。

そして秘密主義者、とでも」

ケラケラ笑いながら南は言う。

何を思ったのか、雲雀はトンファーを下げた。

「…どーしたんだ？」

「今、君を相手にしてもつまらなそうだからね。殺^やる気がある時じゃないと戦わないタイプだろ？」

「おっ正解♪情報に追加しておけ。『気分屋』とな」

「どーでもいいよ」

キンコンカンコンコン。

チャイムが鳴り響いた。

「あー、次は体育だったな…」

「次の授業には出なよ」

「えー…（あ、まてよ…確かにボーンの始まりって沢田がボールに顔面直撃するところだ…）」

「はあ、わかったよ」

「じゃあね」

「おう、またな」

こうして南は屋上を出て行った。

そして教室には戻らず、そのまま体育館に向かう。

つまり、制服のままで。

雲雀に『授業に出ろ』と言われて『わかった』と答えたのに、早速約束を破っているが…。

「ん…ここか…」

体育館の目の前に立ち、呟く。

もう授業開始のチャイムは鳴っていて、中では授業中だろう。

再び怒られるのもメンドクサイので、南はこっそりと見ることにした。

もちろん、主人公である沢田綱吉を。

「ぶっ」

ベチャッ、と沢田の顔面にボールが直撃した。

「……アイツが運動神経無いのは知っていた……だけどまさか……ここまでとは……」

南はりボーンの最初の頃の話を知らない。

読んでいたが、黒曜編に入るまでは何となく流し読みしてた程度だった。

第一話はしっかりと読んでいたのだが…。

なので知らないに等しい状況だ。

「……アレがりボンと会って、あんなに変わるのか……」

沢田のダメダメっぷりを見ながら、南は呟いた。

それから数分経った。

沢田のダメダメっぷりに呆れ、南は帰り始めた。

「さて…これから楽しませてくれよ…？」

遠くから誰にも聞こえないほど小さな声で、そう、言い残して。

Episode 5 霧に会う！

「いよっしゃー！！学校休みイー！！！」

今日は学校休みでテンションMAXなんだ♪

え？学校あってもサボってて休みみたいなモンだろって？

気分が違うよ、気分が。

休みみたいなことに否定はしないけどな！

だってさ——。

学校サボったらあの風紀委員長サンがオレを咬み殺しに来るんだもん…。

ああ、球技大会の日もサボって、商店街ウロウロしてた時に会ったのは大変だったな…。

「どーしよっかなー」。

アイスでも買って食うか!!」

そう言い、オレは家を出た。

並盛商店街。

オレは今、手にアイスが二個入ったビニール袋を持って歩いている。

なんで二個もかって？

チョコと抹茶と悩んだんだよ。

どうせ十雅の金だしいや!! ってな。

でも持って帰るとアイス溶けちまうからな——。

お!! ベンチ発見!

ベンチに座って食うか♪

オレはベンチのある公園に向かった。

「誰もいね——。まあ、よかったな……」

公園には誰もいなかった。

オレ的には超嬉しいぜ？

うるさいガキ共がいなくて。

オレはベンチに座り、抹茶アイスを食べ始めた。

数十秒経ったら、公園に一人の女の子が来た。

オレと同じ年齢ぐらいだと思う。

…なんか見覚えあるんだよね。

藍色っぽい肩下まである髪、同じく藍色っぽい大きな瞳、そして真っ白のワンピース。

誰だっけな？

クラスの奴ではないと思うんだけど…。

悩むのもイヤだし、声をかけてみるか!!!

「おい!! オマエ一人? 一人ならオレとアイス食わねエ?」

少女は突然声をかけられたことに驚いた様子。

「オレ今もう一個アイス持ってんだ。つい買っちゃまったんだけど、溶けちまうからさ!!」

食ってくんねエ?」

「いいの...? 私が食べて...も...」

「いいのってか食ってくれ!!」

「...ありがとう」

少女は顔を少し赤くして、オレからチョコアイスを受け取り、隣に座った。

「どういたしまして。オレは風間南」

「私は…風…」

「ああ、よろしくな！風！」

そして軽く挨拶をして、黙々とアイスを食べる。

「なあ、風とオレって前にどこかで会ったっけ？」

「え…無いと思う…」

「だよなー…」

でもなんか知った声なんだよ…。

リボーンの主要キャラ？

でも女キャラで……。

………ん？

クロームってキャラがいたな…。

確か骸の代わり、とか…。

んん？

…クロームはもう一つの名前があつて……。

「あ……そうだ。だから見覚えあんのか」

「？」

声に出したから、風が不思議がつている。

クロームⅡ風だったんだよな…。

原作に出たのは少しだったし、小説はうろ覚えだしな…。

「あ、いや…なんでもねえよ！」

「うん…」

気づけばもうアイスは無くなっていた。

「…なあ、風はまだ時間あるか？」

「えっ…う、うん!!」

「じゃあ、一緒に遊ばねえ？」

「い…いいの…?」

「モチロン!!」

つかオレ的には遊んでほしいしな♪

「…ありがとう。でも、どこ行くの?」

「んーと、ちょっとついてきてくれるか？」

「うん…」

そう言い、オレ達は公園を出た。

「ここだ!!」

オレは風に言う。

「ここ…?」

「ああ。『ラ・ナミモリーヌ』つつつて、ケーキがかなりウマいらしいぜ!!」

来てみたかったんだよ!! ココ!!

「ケーキ屋さん？」

「そうらしいぜ！オレも来たことないんだけど…。とにかく中入ろう！」

店の中に入った。

「いらっしやいませー」

おお、ケーキのいい匂いだ。

「呬、どれが食べたい？」

「あ…私、お金持っていないから…」

あー、散歩してたような感じだったしな。

「いって！オレがおごる。ついてきてもらったんだし！」

「でも…」

「いって、いって！ほら、ウマそうだぜ？」

「…ありがとう」

「どういたしまして。」

オレはチーズケーキにしょっかな…風は？」

「あ…同じの…」

あー、こりゃ遠慮してんな…。

「分かった。ちょっと待っててくれよ！買ってくる」

「…うん」

そして、ケーキを買い、凧と二人で食べた。

「ウマかった——！！！！噂は本当だったな！！！」

「あの…ありがとう…風間…君…」

「南でいいって。ちなみにオレ、女だぜ？」

「え……」

凧は足を止めた。

「あ……ご、ごめんなさい……!!」

「い、いや……しょっちゅうあることだし、気にすんな？」

「でも……」

ま、性別間違えるなんてしちゃったら気にするよな……。

オレは別にいいけど。

「んじゃあさ、一つ約束してくんね？」

「約束……？」

「ああ。また遊んでくれるか？」

すると風は満面の笑みを見せた。

「うん!!」

「んじゃ、それでチャラっつーことで♪」

「でも…そんなのでいいの？」

「オレは全く気にしてないからいいんだって! あ、あとメアド教えてくれ」

「あ、うん…」

赤外線通信をして、登録する。

あー、そういや登録一人目だな。

前世ではアイツだけだったし…。

ふっ、と笑みが零^{こぼ}れた。

「?どうしたの?」

「あ、いや…何でもねえよ。んじゃ、いつでも連絡してくれよ!」

「うん!」

じゃあな、とお別れをして家に帰った。

二度目の人生で、初めて友達ができた瞬間だった。

Episode 6 風紀委員！

よっす！

南だ！！

皆さんに一つ聞いてもいいですか？

あなたはグッスリ眠っています。

時刻は朝の5時です。

その刹那、携帯電話が鳴り始めました。

マナーモードにしていなかったので、『プルルルルル』と音を鳴らしています。

携帯を見ると、知らない番号。

知らない人でしたし、もちろん出ません。

しかし、その電話は一回切れても何度も何度もかかってきます。

もう5分は経ちました。

でもまだ電話は鳴り続けます。

さて、どうする！？

その？ 電話に出る

その？ ムシを続ける

その？ 電話を切る

オレがとった行動は、？だ！！

理由？

なんかオレの第六感が、『出ないともっとひどいことになる』って察知したからだよ。

「もっしもーし」

『君、喧嘩売ってるの?』

「!?!? この声、オマエ雲雀か?

ったく何の用だよ…。休日こんな朝早くに…」

『10分以内に応接室来て「無理に決まってるだろ!!」それにイヤだし!!!」

来なかったらどうなるか分かるよね?』

「∴ワカリマセンガ? ソレガナニカ?」

『まあいいや。じゃあね』

一方的に電話をかけられ、電話を切られ…。

「オレって不幸…」

行かないと咬み殺されるんだろうな。

メンドクサイけど、戦うことになった方がメンドイ。

「仕方ない…。行くか」

オレは嫌々私服に着替え、朝早い並盛町を歩いた。

「ンで？何の用ですか――？」

ガラッ、とドアを開けながら言う。

「来たんだ。僕が家に行って咬み殺さなきゃいけないかと思ってたよ」

「は！？家って…場所知ってんのかよ！？」

「校長に聞けばいいだけだよ」

「……………なら来てよかった…」

うん…本当よかった…。

「でも、なんで私服で来たの？休日とはいえど、ここは学校だよ？」

ヤバイ！！！！

南は直感した。

今の服装は、黒いダメージジーンズ、紫色のガラの入った長Tシャツの上に緑色のパーカー。

指や手首にはアクセサリが付いている。

遊びにでも行くの？と言われそうな、到底学校に行くような格好ではなかった。

しかし……………。

「まあいいや。それより今日は君に話があってね」

よ…よかったあああああ！！！！！！

極悪非道の並盛中学校風紀委員長様から許しが出たよ！！！！

「話？」

「うん。君、風紀委員に入り「無理」」

即答したよ？

うん。

「断るのなら、学校に私服なんかで来た罰として咬み殺してあげるよ」

「そ、それは丁重にお断りシマス」

「ほら、ここにサインしなよ」

「オイオイオイオイ、勝手に話飛んでね？いつの間にオレが許可したみたいになってんの？！」

「うるさいな。早く書いてよ」

話聞けよ！！コイツ！！！！

「む、無理！！って何オレに差し出して「契約書だよ」

あ、契約書？イリマセンケド？」

「だから、君に拒否権はないんだって何度も言ってるでしょ？

早く書いてくれない？僕眠いんだけど」

「オマエが朝5時に呼びだしたんだよな！！」

…条件次第で入ってもいいぜ？」

ここで、ピクリ、と雲雀が反応する。

「…条件？」

「ああ！

一つ目、オレは朝早くに学校に来るつもりはない。一般生徒と同じ時間に登校する。

二つ目、無断欠席、無断早退、遅刻、そういったものを全て許可する。

三つ目、オレの武器の所持を認める。

四つ目、もしもオレが誰かと仲良くなって、そいつと一緒にいて

も攻撃しない。

五つ目、中学校は三年間通って、卒業したら風紀委員は抜ける。

…まあ、こんくらいかな」

オレは一、二、三、四、五、と指を立てながら話した。

最後のが変だって？

未来編を覚えていますか？

『風紀財団』なんてものがあつたでしょう？

あれは並中風紀委員を母体としてある組織ですよ？

ハイ。『？』ばっかでゴメンナサイ。

「……………」

雲雀は数秒考えている。

オレは風紀委員に入る気なんてないのさ!!

こんだけ条件を付けければ諦めて――

「い
い
よ」

「いいのかわよ!？」

くれなかった。

「どうせ、『これだけ条件を付ければ諦める』とでも思ったんでしょ。」

「残念ながらそうはいかないよ」

「.....」

オレの悲鳴が朝早い校舎に響いた。

「うるさいよ。早くサインしてくれる？」

「くそ…なんでこんな条件つけてまでオレを風紀委員にさせたいんだよ…」

サインをしながら聞く。

「君は面白そうだからね」

「それだけかよ…あーもう疲れた」

サインをし終え、ソファ―に座る。

ふう、とため息をついた時。

「失礼します！」

委員長！新しく風紀委員に入る者がいると聞いたのですが…」

あ——、副委員長の草壁サンだ——。

「本当だよ」

「そうですか…。？この人は？」

そう言い、オレの方を見る草壁さん。

「今日から風紀委員に入ることになったしまいました、風間南ツス
よろしくお願いしやーす」

「君だったのか…私は副委員長の草壁と言います。あの、こちらを…」

手に持った紙袋を渡された。

「…これ、なんですか…？」

「それは学ランです。風紀委員になった者には着用してもらっているのです」

「……それって女でも着なきゃダメっすか…？」

オレの言葉を聞いて、驚いている。

ま、そうだな…。

私服も全て男モノだし…。

「…女子……？」

「ああ。オレは一応女子っすよ…。それでもダメっすか…？」

数秒考える草壁。

そこに雲雀が口を挟む。

「いいんじゃない？ 風間南は普段も男子用制服着てるからね」

「オマエは黙れよ！！」

「あ、それならよろしくお願いします」

くそう…雲雀が口を挟まなければオレは今まで通りでよかったのに…。

「腕章は委員長が持っていますので受け取ってください。

それでは、失礼しました」

それだけ言い残し、草壁副委員長は応接室を出て行った。

ああ、そうだ…。

腕章もあんのか…。

「腕章って付けなきゃダメだよ。付けないと言うのなら、僕が今すぐ咬み殺してあげるよ」

即答——！！！！

「じゃ、じゃあさ!!せめて学ランの着方はオレの自由にさせて!!
!そうしてくれたらちゃんと付けるから!!」

「ハア…どの道腕章は付けさせるけど、それくらいは自由にさせてあげるよ。」

その分仕事は増やすけどね」

「エ——……………」

「変更は認めないよ。ほら、腕章」

雲雀は腕章を持ってきて、机の上に置かれている学ランの上に置いた。

「ういーす…。じゃあ帰る…」

オレは学ランと腕章という拷問的げうもんなモノを持って家に帰ろうとした。

「ねえ、君って何か武器持ってるの?」

「…ハイ？」

突然悪魔…もはや大魔王様がオレに聞いてきた。

「さっきの条件で『武器の所持を認めろ』って言ったでしょ。どんな武器なのかと思ってね」

あ——、あれか。

「今んところは何も。だけどコレにしようかな、ってのはあるが…。
それでも？」

「うん。どんなものなの？」

「短剣。あ、ただ一刀じゃなく二刀な」

今十雅に作らせてるんだ！

もう何十回かダメ出ししたけど…。

「ふーん…。まあいいや」

…まあいいなら聞くなよ!!

「じゃ、オレ帰るわ。じゃーな」

こうしてオレは応接室を後にした――――。

そして次の日。

オレは遅刻確実…もう10時なのにも関わらず、ゆっくりと学校に向かって歩いていた。

……昨日ムリヤリ渡された学ランを着て、腕章をつけてな!!

でも普通の着方はしてないぜ？

Yシャツの中に紫色のTシャツを着ているからな。

ガラララッ。

教室のドアを開けた。

皆、静かにオレを…いや、オレの腕章を見ていた。

———顔を真っ青にして…。

「君！！遅刻してくると…は……」

教師がオレを見て、怒鳴ったかと思いきや、震え始めた。

そうだな…。

学ラン着て、腕章付けてたらそうなるよな…。

「何か用スか？」

オレは教師に聞いた。

「ななななな何でもないですつつつ！！！！いつ、今テストをしているのですが、どうですか？」

あ！！！嫌ならいいんです！！！」

プルプルと手を震わせながらプリントを渡してくる。

まあ、暇だし…。

中一の問題なんてオレには問題ですらねえし…。

「別にいいスよ…」

オレはプリントを貰う

『ありがとうございます!!!』とか聞こえるが、気にしない、気にしないっ…。

オレは席に着き、プリントを見る。

理科…か…。

オレはスラスラと書き、一分弱で終わらせた。

それを教師が見ると、

「回収します!!」

と言った。

「先生! まだ10分しか経ってないのですが…」

「20分って言ってたじゃないですか!」

とか、いろいろ聞こえる。

「か…風間さんが終わってしまったんだ!! 一番後ろの席の人!! 早くしなさい!!」

その列は後ろから二番目の人!!」

と言って指をさすのはオレの列。

オレがいるからねえ…。

先ほど文句言っていた声は一瞬で消えていた。

プリントを回収し終えた教師は

「今日は根津先生の代わりなので、説明の仕方が少々変わるかもしれませんが許してください」

と言う。

…どんだけ怯えてんだヨ。

本来なら根津の奴が理科の担当なのか…。

そーだ！テスト返却の時、根津をハメてやろう♪

でも、ヒマだな――。

…よし！

ガタッ。

オレは席を立った。

「！？風間さん！？どうかしましたか！？」

「ヒマだから応接室行きます――。そんじゃ」

オレはそのまま応接室に向かってった。

教室に残された教師と生徒達は南の出て行ったドアを茫然と見ていた。
ぼうぜん

Episode 7 大空と少し仲良くなり、イエローに会う！

「今日も遅刻♪朝ゆっくりできるってサイコーだな！」

昨日に引き続き、またも余裕で遅刻している風間南だ！

今の時間ー？

11時になるな、もうすぐ。

でも気にしない、気にしない★

風紀委員として遅刻が許され、超自由人となった南はあり得ない時間でもゆっくりと、一瞬たりとも焦らずに学校に行くのでした。

応接室。

「ねえ…いくらなんでも初日からあり得ない時間で登校しないでくれる？」

「えー」。いーじゃん別に…」

オレは学校に着いて、教室で授業受ける気にもならなかったので、そのまま応接室にGO！したのです。

「それに君は授業もサボってるの？今日一度でも教室に行った？」

「いんや。今学校に来たばかりだけど？」

「じゃあ君は教室で授業受けてきなよ。それとも、書類整理をやるかい？」

「！？なにその究極の二択！！それなら教室行ってくるよ…。」

じゃーな！」

オレは嫌々教室に行った。

「ん？すぐに書類整理をやらされなかっただけで十分か…」

ガラッ！！

「「「「……」」」」

お！今日は教師までも静かだ。

…アレ？なんか席順おかしくない？

「かかかかか風間さん！！あなたの席は変えてないのであそこです！！」

よろしいでしょうか！？」

「…変えてないってどういうことだ」

「ハイハイハイ！！」

実は、効率よく授業を進めるために、この時間だけ席替えをしてもらったんです！！」

「あー…わかった」

効率よく、か…ただ単にバカが後ろに来るようにしただけじゃん。

オレに席の隣は、沢田綱吉…。

確かにバカだけどさ…。

ハア…ここで原作キャラと関わるのか…？

あんま原作変えたくねエし、メンドイし…。

「よ…よろしくお願いします…風間さん…」

沢田がオレに話しかけてきた。

…沢田ってこんなに度胸ある奴だったんだな…。

「…ああ…」

オレがそれだけ言うと、周りで

「おい！ツナが風間さんと話してるぞ！！」

「やっぱり最近ツナってすげーな…」

とかいろいろ言っている。

授業は————

数学か…。

オレ、どの教科でも満点取れる自信あるけど、数学は特に得意なんだぜ？

オレが低い声で言い、冷たい視線をぶつけて言った。

ああ、微量だが殺気も混ぜてるぜ？

周りからは

「ツナ：殺されるんじゃないか？」

「ご愁傷様」

とか言われてる。

「え！？？あ…あの…」

とモゴモゴ言ってる聞こえない。

「ハッキリ言え」

この一言で周りがかそこそ言っていた声も一瞬で消えました。

「えっと…その教科書、オレ達のと少し違うなって思っ…よくわかんないことばかり書いてあるから…」

「あー、これは数学の教科書。」

ただ、トップ校に通う高校三年でようやく解けるようになる位のレベルのな」

「あ…ははは…そうなんだ…。」

（もう笑うことしかできね——！！！！！！）

「まあ…でもこんなの簡単すぎてつまんねェけど。沢田解いてみるか？」

こんくらいなら沢田でも解けんじゃね？

簡単だし。

「イヤイヤイヤイヤ、いいです！！オレはどーやっ…た…って解けない

だろうし!!」

「あっそ」

オレはまた寝始めた。

それからオレを起こさないよう、静かに授業が再開されたらしい。

キンコーンカーンコーン。

「…昼飯…か…」

どうやら席替えタイムも終わったらしく、元通りの席になっていた。

130

購買で飯買うか…。

オレはそう思い、席を立とうとしたその時。

「あ、あの…!! 風間さん!!」

オレを沢田が呼びとめた。

「……なんだよ…」

オレは今、腹減った&寝起き、という不機嫌な状態なのによー。

喧嘩売ってんのかぁー??

「オ…オレに、勉強教えてください!!!」

頭を深く下げて頼んできた。

「…理由」

「は、はい？」

「オレに勉強教えてもらいたい、っつー理由は？」

「オレ…今家庭教師がいるんですけど、その家庭教師が答え間違えることにオレに攻撃してきて…。」

そっそれで、あんなに難しそうな問題が簡単すぎ、なんて言う風
間さんに教えてもらえないかなって思ってた…」

「（そりゃあ、リボーンはイヤだろうな…）」

…よーするに、オレにその家庭教師の代わりをやれっつーことか
…。

……まあ、いーぜ…」

そう思ったのも何となくなんだけどなー。

主人公である沢田がどんくらい頭いいのか…それを知りたかっただ
けだからな。

オレが言うと、沢田は顔を上げた。

「ほ、本当ですか！？

ありがとうございま「ただし、一回だけな」…そっそれでもいい
です！

ありがとうございます!!」

沢田はまたオレに頭を下げた。

————ここでまたメンドイことになる…。

「「「風間さん!! 私^{オレ}にも教えてください!!」」「」」

クラスのほぼ全員が言ってきた。

「…イヤだ。オレは一人だけにする。一番最初に言ってきた沢田のみだ。」

他の奴に教える気はない」

皆、嫉妬してるよ。

ドンマイ!

「沢田、今日の放課後オマエん家行くからな。場所は雲雀に聞くから。」

「んじゃーな」

オレはもう授業を受ける気が完璧に失せたので、カバンを持って応接室に行った。

もちろん、購買に寄ってからな♪

放課後。

オレは約束通り沢田の家に来た。

…まあ、時間がもう遅いけど…日が見えず、暗くなってるな…。

家の場所は雲雀に聞いて借りを作りたくなかったから校長に聞いた。

…答えるの、早かった…。

腕章見たとたん、敬語使いまくりだった…。

ピンポン。

「おじゃましまーす」

インターフォン鳴らして、すぐ！？と思ったヤツもいるだろう。

ま、オレは教えてやる立場だからいいんだよ。

「あら？どなた？」

エプロンを付けた女の人が出てきた。

「風間南といいます。沢田…沢田綱吉に勉強教えに来たんすけど…
いますか？」

「あら！カッコいい男の子ね！ツナのお友達！？「友達では無いで
す」

「? そうなの?」

っつか沢田の母親にも男だと思われるって…。

そんなに男っぽいかな? オレ…。

「はい、そうです。 んで沢田綱吉はいますか?」

「ちょっと待ってね。 ツナー!! お客さんよー!!」

階段の上に向かって叫ぶ。

「あ、うん!!」

ドダダダダ、と階段を下りてくる。

「風間さん!! 来てくれてありがとうございます!!」

沢田の私服…。

超フツーだな。

ってか服に『27』って書いてあるし…。

そんなに自分の名前好きなんだ…。

マグロなのに…。

「べつに。んで、なんの教科？」

「えっと…ほんとに全部教えてもらいたいですけど、数学…で」

「数学な…じゃあ早く終わらせるぞ」

靴を脱ぎ、階段を上る。

部屋も至って普通だな。

床に座って、一枚のプリントを渡す。

すると沢田は一瞬で真っ青な顔になった。

「あ…あのー。これをやるんですか…？」

「何言ってるんだ。当然だろ？」

「…少ししかわかんないんですが…」

「それなら分かる問題だけでも解け。全くわかんないような問題も少し考えてみろ」

「（この人、下手したらリボンよりもスパルタだ——！！）

は、ハイ…」

「じゃあスタート」

こうして、オレと沢田のお勉強会が開催しましたとさ。

それから数分。

「も、もう分かんないです…」

「見してみろ……………一問もできてない…バカにもほどがあんだろ…」

そう、一問もできてなかった。

簡単なのになー。

ちょっと高校で習う公式を使えばすぐ答え出るのに。

「…これって何年生対象の問題ですか？」

「並中生なら…高校二年？」

「そ、そんなのオレが解けるわけないじゃないですか！！！！」

「黙れ」

オレの一言で静まった。

ほんとにコイツは騒がしい…。

ガチャ。

扉が開いて、誰かが入ってきた。

「ちゃおっす」

リボーンだ。

「リ、リボーン！！入ってきちゃダメだって言ったじゃないか！」

「うるせーぞ、ツナ。…で、オマエは誰だ？」

オレの方を見て聞いてきた。

「人の名を知りたいのなら、まず自分が名乗りな」

「……オレはリボーンだ」

「リボーン、ね。オレは風間南。最近沢田のクラスに転校してきた一般人だ」

「やっぱりオマエが風間か…。だが一般人なわけねーだろ」

はい？オレが一般人じゃないだと？

そんなことは無い。

オレは一般人だ。

でも反論するのも面倒だから、まあいつか。

つつかオレのこと知ってんなら聞いてくんじゃねーよ。

「そー思いたいなら思っつけ。で、何の用だ」

「特に用はねーぞ」

「リボーン!! 早く戻ってくれよ!」

「おめーは黙っとけ」

「んな!!」

…このガキ…殺気放ってやがるな…。

警戒してんのか…。

まあ無理はないだろうけどさ。

第一オレも少し殺気放ってるしー。

お互い様ってことで♪

「…なあ沢田」

「は、はい!!?」

「オレもうめんどくさくなってきたから帰るな」

「え…あ、はい…あ、ありがとうございました…」

「チビちゃんもじゃーな」

オレがリボンチビちゃんに言うと、さらに大きな殺気を放ってきやがった。

つたく…ムカつくガキだ。

「チビちゃん、なんて呼ぶんじゃねえ」

「呼び方一つで文句言うな。チビちゃん♪」

「チツ……」

舌打ちとかムカつく！。

オレはそのまま沢田家を後にした。

「リ、リボーン……？」

南がいなくなった沢田の部屋では、リボーンが難しそうな顔をして

いた。

「…アイツ…何者なんだ……？」

「な、何者って……？」

「アイツはオレが最初この部屋に入ってきた時からずっと、殺気を放っていやがったんだ。

オレが放ってた殺気にも動じない…。

おまけにこないだ学校帰りをつけたが、気配が突然消えて見失っちゃった。

このオレを撒いたんだ…ただモンじゃねえ…」

「おい！！何やってるんだよ！！風間さんを尾行するなんて…」

リボーンの暴露話に鋭くツツコミを入れる沢田。

「…何より、アイツのことを調べてもなかなかヒットしねえ…情報

が無^ねえんだ…。ボンゴレの力を以^{もつ}てしても…な」

「？それって戸籍^{こせき}が無^ないってこと？」

「いや、そうじゃねえ…あるにはあるが、情報が少なすぎるんだ…」

「……どうということ？」

沢田の質問にしばらく考えるリボーン。

「（ツナに言って、風間に警戒心を持たれても困るしな…）」

何でもねえぞ。今の話は忘れとけ」

「じゃあ最初っから話すなよ！！」

「それはともかく、そろそろ飯の時間だぞ」

リボーンは部屋を出て、階段を降り出した。

沢田は疑問を残したまま、ご飯を食べたのであった。

E p i s o d i o 8 大空VS嵐!

「あーあ、昨日は沢田のせいで疲れた——」

ハア、とため息を吐きながら南は登校していた。

時刻は9時。

普通は遅いと思うが、南にとっては早い時間。

昨日、雲雀から連絡があったからだ。

1－Aに転入生が来る、と。

ちなみに二人来るらしい。

南は原作知識で知っている中で、獄寺が転校してくることを知っている。

その転入生が獄寺だと思い、学校に早く行くことにしたのだ。

もう一人が誰なのかは知らないが…。

ガラッ。

「おはようございますっ！風間さん！

今日は1時間目はHRで、転校生の紹介をしていました！」

やはり、キビキビと南に説明する教師。

「（来たか…）転校生？」

「はい、獄寺！山下！風間さんに自己紹介しろ！」

南は教師が言った『山下』という人物に驚く。

「ど、獄寺君！！早く自己紹介をしなさい！」

教師は『南の気分をこれ以上悪くさせてたまるか！』と思って獄寺に言う。

「あー、オレもメンドイんでいーや。後で雲雀に聞くな」

獄寺は絶対自己紹介なんてしないから時間のムダだということを南はわかっていた。

それよりも、山下という女が存在が気になった。

原作にいなかった人物がいる、このことを説明する方法が一つしか見当たらなかった。

南と同じ『転生者』である。

とりあえず十雅とお話することにして、南は席に座った。

あれから、オレは十雅に会いに行き、聞いた。

「お、南！」

「十雅…あの女は何だ」

「あ…あの女？」

十雅も知らないのか…？

「オレのクラス…1—Aに転入してきた奴だ。獄寺と一緒にな…」

「んー？ 獄寺と一緒に転入してくる奴なんていねーぞ？」

「だから聞いてんだろ…」

「あ、そっか」

やっぱコイツ馬鹿だな…。

十雅はどこからか資料を取り出した。

「んー、やっぱそんな奴はいねーな…。転生者かもしんねえと思っ
たが…記録がない」

パラパラと資料を見ながら話す。

「記録？」

「ああ。転生させたら記録をつけるんだ。これも仕事だからな。

ま、転生させるのは間違えて殺した時だけだからあんま使わないけど…。

南の前にも転生させた奴いるんだぜ？同じリボーンの世界にな」

「へー…。いつ頃？」

「それは教えられない。ま、その内分かるさ」

その内……？

ま、いつか…。

「で、その女の名前は何ていうんだ？」

十雅は資料を閉じ、聞いてきた。

「えっと…名字は『山下』。名前は忘れた…つか知らね」

「『山下』、ね…。とりあえず調べてみる」

「おう、なるべく早くな」

南がそう言うと、十雅は何かを思い出したように「あ」と言った。

「何？」

「あのよ…前に小型ノートパソコン…言いにくいから『パソコン』でいいか。ともかくそれ送っただろ？」

あれに特殊能力つけんの忘れてて、今は単なるパソコンなんだけど…」

「…能力ってオマエが考えてつけるのか？」

「ん？まあそうだな…」

それを聞いて、南はあることを思いついた。

「んじゃ、オレが能力考える」

「あ、いいぜ……………ってダメ！！これはオレが考えるものなんだからよ！」

「男に二言は？」

「無い！！……………じゃなくてええええ！！！！！！」

「よし、じゃあオレが考えるから。だから今はまだ何もつけないでおけよ。じゃーなー」

南は勝手に狭間から現実世界に戻り、そこには自分の発言を後悔する十雅のみが残された。

そして、今いるのは屋上――。

「オレを裏切るのか？リボーン！！今までののは全部ウソだったのかよ！！？」

「ちがうぞ。戦えって言ってんだ」

「は！？」

南は獄寺と沢田の戦いを見るために屋上に来ていた。

なぜ南が戦いのことを知っていたか。

それは戦い後の獄寺の変化っぷりが面白かったから覚えていたのだ。

「あー早く死ぬ気になんないと死んじゃうぞー」

そう思っている間にも、獄寺から沢田への一方的な戦いが続く。

「^{リ・ボーン}復活！！！！死ぬ気で消火活動！！！！」

バカ、と音を出して沢田の死ぬ気タイムが始まる。

「そーいや死ぬ気見るの初めてだったな…」

南は屋上でボソッと呟いた。

「消す消す消す消す消す…」

沢田の手がダイナマイトの火を消していく。

獄寺は『二倍ボム』を放つが沢田はどんどん火を消す。

そして、『三倍ボム』を放とうとするが、未完成なために手から一つダイナマイトが落ちる。

こういう場合、一つ落ちるとバランスが崩れるのでダイナマイトはポロポロと落ちていく。

「(ジ・エンド・オブ・俺…)」

獄寺がそう思った途端…。

「消す!!!」

『消火活動』を目的として死ぬ気になった沢田は獄寺の周りに落ちたダイナマイトの火も消していく。

「…おー、すごいなー……それ以上にキモイけど。

で、何でオマエがそこにいるんだ……？ 本来存在しないはずの、イレギュラーさんよお……」

南がそう呟いた。

南が大っ嫌いの、本来存在しない転校生————山下咲。

彼女が沢田やりボン達と一緒にいたのだ。

ならば原作と少し変わって進むのではないか……？

そう思って南はかなりイラついていた。

しかし、原作通りに物語は進む――――。

獄寺が沢田に土下座する。

しかし、この後が変わった。

「ところで、10代目。この女は誰ですか？さっきから一緒にいますか…」

「…チッ。ここからあの女が関わるのかよ…獄寺、気づかなくてよかったのに…」

南の予想は、当たってしまった。

「あ、この子は山下咲ちゃん…です。今日獄寺君と一緒に転校してきましたので…」

なぜか敬語になる沢田。

「山下、オマエは10代目の何だ!! さっきから馴れ馴れしく10代目の傍そばにいやがって!!」

「(ナイス獄寺 あああああ!!!!!!!! ウザいよな! 超ナイス!!!!!!!!!!!!!!!!)」

南は心の中で獄寺を後押しした。

「えっと…ツナの友達…です。今日なっただけだけ…」

咲がビクビクしながら言う。

そして、それだけではない。

顔が真っ赤に染まっていた。

「アイツ、転生者っつーことは原作のことも知ってんだよね…。な
ら何で怯えてるんだか。」

そんなもってあの顔は何だ。醜^{みにく}い顔に拍車^{はくしゃ}が掛かってんぞ」

南は離れていてあまり分らないが、獄寺は咲にかなりの殺気を送
っているのだ。

知っていても、まさか会ってすぐに殺気をぶつけられて怯えない人
は一般人にはいないだろう。

そして咲は獄寺のことが好きなのだ。

教室でもチラチラ獄寺を見ていた。

「ケッ」

獄寺は咲の存在を自分の中から消した。

そして原作に戻って、不良達が来て、獄寺がダイナマイトでボコボコにした。

「あー、よかった。原作のことを覚えちゃいないが、アイツが獄寺から嫌われて。」

どっちかつーとラッキーだったからいや」

少し上機嫌になった南はiPod touchで曲を聴きながら家へと帰った。

Episode 9 教師をハメる！

昨日、明日は理科のテストの返却があると聞いた。

つまり、根津をハメる日だ！

そして…。

今日は、学ランも腕章も付けてないんだぜ！！

…でも、今日はなんだよな…。

今日からじゃないんだよな…。

なんで付けてないのかって？

フッフッフ…。

これこそがあの忌まわしき根津をハメる方法だ！

だから昨日頑張って雲雀から許可を得たんだよ…。

アイツ、人の言ってることムシしやがるから大変だったんだぜ？

昨日にさかのぼってみよう――――。。

「なあ、明日だけでもいいから一般の生徒と同じ制服で来て「ダメ」」

…聞きました!?

この即答っぷり!!!!

「なんでそんなに即答なんだよ!!」

「君は風紀委員でしょ。なら当然だよ」

「だーかーらー、一日だけ!!明日だけでいいから!!!!」

頼むよ、極悪非道の風紀委員長雲雀様♪」

「咬み殺してあげようか？」

死にたくはないけど、明日の普通の制服はなんとしてももぎ取る！
！！！！

「あ、それは丁重にお断り。ホントに頼むって！！」

「……」(ムシ)

「はあああああああ！！！！？？！！？！！？！！

ここにきてムシとかなんだよ！！！！」

「……」(ムシ)

「……………ちょ、ちょっと酷くね？」

「……………」(ムシ)

「そーかよ!! ムシかよ!! ならオレはここで頼み続けるだけだ!!」

なあ!! 明日…」

と、二・三時間続き雲雀が折れたのだ。

……オマケに大量の書類（今日来る分だけらしいから大量かは分からないけど、きっと大量）も。

よし、逃げよ♪

今思ったけどオレって、一回も風紀委員の仕事してないなー（逃走するから）。

肩書きだけでいいって。

風紀委員とか、『風紀』って掲げただけの不良の集団なだけなんだよな〜。

原作では一部しかその様子が書かれてなかったから違うと思うだろうけどな。

おっと、これを雲雀に言うってことは喧嘩売ると同じことだから言わねえけど。

ま、そーゆーワケで今日のオレは風紀委員と知らないヤツは一般生徒だと思うだろう。

根津とか根津とか根津とか。

あー、根津の驚いた顔が目には浮かぶぜ♪

楽しみだな♪

そして、理科の時間――。

「今日は理科のテストを返却する。呼ばれたヤツは取りに來い。」

まず、青山―」

そして、名前順で呼んでいく。

オレは風間だから、沢田より前か―。

「大久保―」

「はい」

「風間―」

「……」

「風間！早く取りに来い！！」

ムシしてる訳ではありません。

爆睡中です。

周りの生徒（風紀委員と知っている生徒）は

「根津のヤツ、風間さんの機嫌を悪くさせんなよ！」

「根津…さようなら」

…とまあ、オレが根津をボコると思っているようだ。

オレとしてはまだ考え中だな。

「風間 あ…!! 起きるか…!!」

そう言いながら根津は教科書を丸めたもので殴ろうとする。

オレは爆睡中だったが、気配を感じて起きた。

ヒュッ。

パシッ。

なにが起きたかと言うと、根津が思いっきり殴ろうとしてきた（ヒュッ）。

そこでオレの右手だけが動いてそれを止めた（パシッ）。

んまあ、こんな感じ？

「貴様っ！！」

「ウルセエ。黙りな」

根津のやつ、どんどん顔が真っ赤になってくぞ？

あー、楽しい★

「生徒ごときが生意気なんだ!!」

…そうだ、オマエのテストの点数を皆の前で言いふらしてやろう。

えーっと…100点だ!!

たかが100で…なにいい!!!!????!ま、満点??!? ?
?!!!

「まあ、簡単過ぎて一瞬で終わったしー?

オレを誰だと思ってるの?」

「ぐっ…まあいい。そうだ、ここで仮定を話してやる。

理科のテストで満点を取りながらも返却時は寝てるやつがいるとしよう。

そいつは間違いなく頭のいいやつテストをカンニングしている！

それはなぜか！！なぜなら…。

そいつは頭がいいように思わせたいからだあ！！！！！！！！」

「「「「（バカじゃないのか？根津のやつ…。風間さんはホントに頭いいんだよ）」」」」

クラス中があり得ないほど静かになり、皆の心の声と一緒にあった。

「そー思いたいなら思っとけ。五流大卒の根津銅八郎」

「！！！？なぜ…まあいい。後で聞いてやる。

続きだ！川田」

お？案外動揺しなかったな？

まあここでリアクションしちまうと退職すつからな…。

ああ、オレが根津の学歴を知ってるのは調べたからだ。

転入二日目で根津と会った時にかなりムカついたからさ〜♪

後はこっそり雲雀にバレないように調べたんだ！

雲雀にバレたら根津をハメられないじゃん？

あ！そうだ！！こいつムカつくから退職させよ♪

そんな真っ黒いことを考えている内に話は進んでいき、沢田が呼ばれ、仮定をし、獄寺が来て…。

今は校長室。

校長はオレが風紀委員と知っている。

「根津君、まずは風間さんを帰らせていいかね？」

「校長！！いけません！！風間が一番悪い生徒なんです！！」

「ききききき君は雲雀君を敵に回したいのか！？」

「何を言ってるんですか校長。そんなのは嫌に決まっていますでしょうに」

「風間さんは風紀委員だ！！！！！」

「! ! ? ? ? ! ? ! ? ! !」

あービビってる、ビビってる♪

「は！　そういえば1—Aに風紀委員がいるとか…。

風間さん!!! ゆゆゆゆゆ許してください!!!」

お——、見事なド・ゲ・ザ♪

でもな、オレってばさっきのがかなり頭に来てんだ♪

「しょうがないですね。」

実は根津が五流大卒で、40年前に並中に通ってたことを教

えるだけでカンベンしてやるよ」

「!？ 風間さん！それは本当のことなんですか!？」

おっ、いーねーいーねー♪

校長が食いついてきた。

「まー後は本人に聞いてくださいーい。

そんじゃ」

オレは校長室を出て行った。

後から聞いたことだが、あの後は根津が退職することになり、沢田と獄寺も何事もなく助かったそうだ。

そんでもって、オレは見事に書類からの逃走を成功させました♪

Episodio 10 ファミリーに勧誘される！

あっという間に7月…もうすぐ夏休みだ。

今日は…6日。

そうそう、いつの間にか沢田と山本が仲良くなってたんだぜ！

何があっただらうーなー。オレこの辺の話覚えてねーんだよ…。

ま、別にいつか。

……別によくないのは、今の状況だ。

場所？並中。

まあこれは問題ない。

一緒にいる人？

…これが問題ある。

沢田、チビちゃんリボーン、獄寺、山本、あの女。

原作でもし、こんなシーンがあったのならば許そう。

だがな、なぜあの女がいるんだ。

全く……。

「おい、チビちゃん。オレを呼んだ理由はなんだ」

「オマエ、ファミリーに入れ」

……はい？

「聞こえてなかったのか？ボンゴレファミリーに勧誘してるっつーことだぞ」

「断る」

「…なぜだ」

あのさ…まず一般人に『マフィアにさせてあげる』と言って喜ぶ人がいるとでも？

チビちゃん
このリボーンは常識が無いのかな？

「オレはマフィアになるつもりねーし。第一束縛されたり制限されるの嫌いだし？」

オレは自由がいいからなー」

「安心しろ。ボンゴレは束縛なんかされねー自由なマフィアだぞ」

…オレが言いたいこと伝わってねーし…。

「…そうだとっても断る。理由はねーがな」

「……そうか。わかったぞ。だが気分が変わればいつでも入れてやるぞ」

あり？ 案外モノ分がいいな。

予想ではこの後もしつこく誘って来ると思ってたのに。

…ま、いっか。

「おい風間。リボンさんの勧誘を断るたあどーゆーことだ」

……この声、数回しか聞いたことないから無視でいっかなー。

でもなー、コイツとは気が合うと思うんだよなー。

あの女のこと嫌いなの一緒だし？

だから一応返事しとくか。

「別にいーじゃねーか、オレの自由で」

「良かねーよ！内容も内容だ！ボンゴレに入るのを断るだど？ナメてんじゃねー」

「いや別に…ナメてなんかねーし……」

コイツ、話通じねー……。

「まーまー獄寺落ち着けて」

「テメエは黙っとけ野球バカ！風間！！リボーンさんが勧誘してくださってんだから入りやがれ！」

「だから、嫌だっつの…」

しつこいなー。

だがここで、救いなのか逆なのか、一つの放送が入った。

『風間南さん、至急応接室に来てください。委員長がお待ちです』

…草壁さん……。

…ま、仕方ない…行くか。

「つーわけでオレ行くわ。んじやな」

「デメっ！おい！」

獄寺が叫んでる気がするが、気のせいだろう。

でもなー、この後応接室行くのも嫌だなー。

帰る…と雲雀が家まで咬み殺しに来そうだからなー。

……しゃーねえ、行くか。

渋々応接室に向かった。

ガラ
ラッ
ッ。

「んで、何の用？」

開けながら、室内にいるであろう雲雀に聞いた。

「いい加減、仕事をしてもらおうと思ってね」

「……お疲れ様でしたー」

回れ右！ さあ帰ろう！！

ヒュッ。

「逃がさないよ」

……いや、トンファーで頭殴ろうとするなよ…。

ギリギリで避けたからいいものの、当たってたら…。

「おい、当たってたら頭割れるだろ！」

「君なら避けると思ったからね」

「…なんつーテキトーな根拠…」

「……その言葉、君にだけは言われたくないな」

「何それ、ヒドくね？ま、傷付かないけど」

ああ、こう会話してる最中もトンファーで攻撃しようとしてきてる

んだぜ？

風紀乱してる委員長だよな、こりゃ。

「…で、仕事するの？」

突然攻撃を止めて聞いてきた。

「いや、しねえ」

何の悪びれもなく返事をしたからかなあ？

またトンファーが来たんだよね。

「…やっぱり君は、咬み殺す…！」

ビュッ。

「のわっ！危ねーなあ！」

仕方ねえ、逃げるか。

「逃がさないよ」

わー、追いかけてきた…。

校舎だと階段疲れるから…。

よし、外行こう！

ドタドタと階段を降り、あっという間にグラウンド。

…あれ？何だろう…。

ドガアン、って大きな爆発…。

あ、誰か見える。

獄寺、チジちゃんリボーン、階段のところに…10年後のランボ？

あ、爆煙の中からも出てきた。

沢田に、山本……それにあの女か。

あー、嫌なモン見ちまったー。

「見つけたよ」

……………。

そろそろと、後ろを見る。

「あは、ははは……？……やあ、こんにちは」

「君に選ばせてあげるよ。このまま素直に仕事するか、僕に咬み殺されるか」

「なんじゃそら……。あ、じゃあさ、こないだ根津銅八郎の学歴詐さし称ようを見抜いたからそれでチャラで！」

いやあ、あのことが役立つとはな〜。

オレがそう思っていると、雲雀が大きいため息を吐いた。

「…何だよ」

「仕方ないね…今日は許してあげるよ」「やった!」でも、明日は仕事あるからね」

……。

ん?何か聞こえた?

オレには聞こえなかったなあ。

「そんじゃな!」

オレはもう何も言われたくないから校門までダッシュした。

「ハア…どうせ明日も来ないだろうから、放送しないかね…」

南の自由っぷりに疲れた雲雀は、足早に応接室に戻った。

S t r a o r d i n a r i a m e n t e 2 暗殺部隊に会う!

今、オレは飛行機に乗っている。

理由？

十雅からさ、パスポートとか貰ったから。

で、せっかくならイタリアがいいなー、って。

ん？それだけだけど？

オレは思ったことはすぐ実行するからな。

ああ、今日は平日だから学校あるぜ？サボってるけど。

でさ、イタリア行って、どこ行こう…。

ピザの斜塔でも見に行くか？

…いや、冗談。

ボンゴレファミリー本部？

いやいや、もっと有り得ない。

……よし、決めた！

行き当たりばったり！！

おお、こんなことを決めてる間に到着だ。

さて、どこに着くかね…。

「で、早速迷子だ……」

「ここ？どっか分からない森の中。」

イタリア語読めるんだけどさー、道は知らないんだよ。

人が多いの嫌いだから人避けてたら…。

森でした、みたいな。

人嫌いとか…雲雀に感染させられたな。群嫌い。

「…とりあえず、だ。来た道を戻れば………どっちから来たっけ？」

マズい、これは迷子ではなく、遭難…!?

携帯……『圏外』、ね。予想はしてたよ。

「とりあえず、行き当たりばったりって決めたんだから続けよ」

そしてまたもや道無き道を進む。

1時間ほど歩いただろうか。

視界に大きな建物が入った。

…よし、とりあえず入ろう…。

さすがに疲れてきた…。

ずっと同じ景色って意外とキツいな…。

頑張って走るか…。

走ると意外と近く、すぐに着いた。

でも見張りがいるなあ…。

「Ciao…」

疲れきった声で挨拶…。

「!？」

「あ、驚かせたなら悪い…。って日本語で言ってるけど通じてる?」

「…日本人か」

あー良かった…。

イタリア語でもいいんだけどさ、最近使っていないから自信無いし。

「ああ…。空港出て、テキトーに歩いてたらここに着いて…。できれば入らせてもらえね？ つかここどこ？」

「…ここは一般人が来るような場所では無い」

「つーと、マフィア？」

「!?!?」

そんなに反応しちゃダメだろ…。

「あ、オレはどっかのファミリーとかじゃなく、普通の奴だから…」

「……ここはボンゴレ独立暗殺部隊、ヴァリアーだ」

…時が止まったとは、正しく今の状況だろう。

確かに、建物にV A R I Aらしき旗はあった。

それでも来たのがいけないのか？

…最悪だ……。

「おい、どうした？」

「いや、何でも…。やっぱり帰るわ」

「待て。今から引き返すことはできない。ここの情報を得たのならば他のファミリーにバラす危険性があるからな」

…なら話すな、と思うのはオレだけ…？

「しししっ。誰そいつ」

「「！！」」

突然中から人が出てきた…。

……でもな、見たことある顔。

「べ、ベルフェゴール様！」

そう、プリンス・ザ・リツパー切り裂き王子の異名を持つ、ベルフェゴールだ。

「で、オマエ誰だよ」

「あ、オレは日本人の風間南つつーんだけど…。道に迷ってここに
来て…。できれば中に入れてくんね？腹減って喉渴いた…」

「迷子かよ……。ま、いーぜ。入んな」

もう逃げるのは諦めた。

だってさ、逃げたら殺されそうじゃん？

今にナイフを投げてきそうだし。

「なあ、オマエ戦闘とかできる？」

「戦闘つか暗殺部隊なら殺し合いだろ？」

「オレらはそーだけど、オマエは一般人だろ？あ、それとも殺し合いたい？」

「アホ。オレはそんなことお断りだ」

オレとベルが普通に会話していることに周りにいる奴らが驚いてる

なー。

別に気にしないけど。

「つてことは一応強いんだ？」

「さあなー。よく知らん」

「なんだそれ」

こんなことを言っていると、他の者が出てきた。

「うゝおゝおい！！誰だそいつはあ！！」

「ウルセエ！」

ボカツ。

……しまった……。

出てきたロン毛のウルサイ奴を殴っちゃった……。

「あ……オレの鼓膜を守るための正当防衛だからな！」

「言い訳になってねえよ」

違うぞベル！

これは言い訳では無いからな！

「デメエ…ぶっ殺されてーか!？」

「だからさ、ウルサイんだけど？」

もうこーなりやヤケだー!!!

「…で、ベル。コイツは誰だ」

鯨だろうが何だろうがかかってきやがれ!

「風間南っつー迷子。日本人だよ」

迷子って…。

「迷子…？」

「迷子って言われ方は嫌だけど…。それで腹減ったから何か貰おう
と思ってさ」

オレが付け加えると、納得したようだ。

「でさ、オマエらの名前は？」

そういえば聞いてなかったからな。

オレは知ってるけど、名乗られて無いのに知ってたらおかしいし。

「オレはベルフェゴール。ベルって呼べよ」

「オレはスクアーロだあ」

「ん、よろしくな。ベルにスクアーロ。つつかさ、食堂みたいな場所ってまだ？」

「すぐそこだぜ」

ベルが指した場所には大きな扉。

いい加減に腹がヤバいから勢いよく扉を開け、叫んだ。

「何か飯くれ！！」

…うん、中にいた人たちが固まってるよ。

「あ、その変な頭の人、何か飯くれ」

頭のとっぺんからだけ緑色の毛が生えてる。ダサ。

「いきなり現れて何言ってるのよ！」

「うわ…しかもオネエ言葉とか…生きる価値無いな」

「黙りなさい！」

あー、コイツいじめるの楽し♪

「うしし♪ルッスーリア、何か作ってやれよ」

「そーそー。ベルの言う通りだぜ？早く作れよ」

「命令になってるわよ！？」

「早く」

「キイイ——!! わかったわよ!」

やべー、おもしろ。

「何でもいいわね!？」

「だから何でもいいつつってるだろ」

「ホントにムカつく坊やね…」

「あ、オレ一応女だぜ？」

「」「は?」

…ワオ、三人の声が重なったよ。

ベルとスクアール、それと多分ルツスーリア。

「あ、男だと思ってた？」

「…冗談…じゃねえんだよな…」

「うゝおい……」

「まさか…私と同類？」

「バカ！ちげーよ！！」

オレがルツスーリアと同類だと？

ナメたこと言うな。

「でさーオマエの名は？」

「私はルッスーリアよん。ルッス姐って「断る」」

誰がルッス姐だなんて呼ぶか。

「それよかまだ？ルッス」

「…姐はダメなのね……。できたわよ、チャーハン」

まだ熱そーだな…。

でも腹減ったから食お。

「いただきー」

ムシャムシャという効果音が出そうな勢いで食べる。

「ん！ふわいほ！」

「いや、何つつてるか分からねーから…」

む。ベルは読解力に欠けるな。

仕方ないなあ。

ゴクリ、と飲み込んで再び口を開く。

「うまいな」

「あんらー。嬉しいこと言ってくれるじゃない！えっと…名前は何？」

「ベルに聞け」

「……風間南、だよ」

ベル、名前を言うくらいで疲れた表情するなよ。

「ありがとね、南ちゃん「シネ」な！？」

ルッスが言った時、オレは殺気を込めて言い返した。

「「!?!?!」」

その殺気に気づき、三人はオレから距離を取る。

…まあ、普通に警戒するよな、うん。

「デメエ…やはりどっかのファミリーか!?!」

「あースクアーロ、違う違う。オレは名前にちゃん付けされたのが嫌だったただだ」

「……は?」

いや、三人して同じ顔しなくても…。

ボタン！

「今の殺気は何だい？」

あ、赤ん坊だ！。

マーモンか。

「…そこにいる南ちゃ「あゝあゝ？」…南の殺気よ。でも敵意は無いから大丈夫よ…」

「南…？君のことかい？」

オレの方を向いて聞いてくる。

「そーだぜー？あ、皆もオレのことは呼び捨てでいいからなー」

そう言ってチャーハンを食べるのを再開する。

「「「（何て自分勝手な奴……）」」」

んー、やっぱりウマイ！

「そんじゃ、ごっそさん」

「で、南はいつまでここにいいのかい？」

ああ、もうマーモンとも名前とか、ここに理由とか話したぜ。

「んー、じゃあ帰ろっかなー。明日もサボると雲雀アイツうるさそーだしなー。そーいえばさ、ここのボスって誰？」

その言葉に、皆がビクリ、と反応する。

…あり？ XANXUSって何かワケアリだっけ…？

んー…リング戦の最後、読み忘れたんだよな！。

ちくしょう…。読んどけばよかった…。

「ボスは……………」

あ。なんかシリアス…。

「やっぱ別に話さなくていいや！そろそろ帰らないと日本に着くの遅くなるし…」

つつかさ、今思ったけどレヴィは？

いや別に会いたくないけど…。

「ししっ。それなら空港行く？」

「ん、そーする。…道教えてくんね？」

「道を教えるより送っていく方が早いと、僕は思うよ」

「マーモン…送ってくれんのか？」

「金取るけどね」

…金大好きなんだな、うん。

「そこはセルフサービスでよろしく♪」

「それなら断「よし行こう、さあ行こう！」……ハア。一回だけだからね」

うし！勝った！

と、まあこんな感じで空港まで送ってもらった。

…リムジンでな。

もう注目されるどころじゃなかったよ…。

V A R I A の皆もオレが荷物無いのに飛行機乗るのに驚く…っつか
呆れてたし。

別によくね？

ムツツリ…：はいとして暴君様には会いたかったな！。

ま、仕方ないか。

日本に戻ったら見事に疲れて、次の日もサボったら雲雀に怒られた。

風紀委員に入る時に許可得たのに…。

まあ、雲雀に何を言われようとオレは気にしないけどな。

Episode 11 嵐と友達になる!

イタリアから帰国し、1日が過ぎた。

今日は休日だー♪

：雲雀から呼び出しされてるけど、オレが行くと思うか？

もちろん、行きますーん♪

今日は商店街とかで放浪^{ほうろう}するって決めてんだ！

っーわけで、今は商店街。

商店街には色んな店があるが、オレの行きつけの店になってるアクセサリーショップがある。

女物から男物まである、結構いい感じの店だ。

オレはここでリング、ペンダント、ピアスを買ったことがある。

もちろん男物だが…。

今日は新商品が入荷した、と連絡があったから来た。

ああ、店長に連絡先教えてんだよ。

最初はオレのことを怖がっていたが、今では良い舎弟しやていのような存在だ。

ん？それじゃダメか？

大丈夫、オレには何の問題も無いから。

「いらっしやいませ…と、風間さんでしたか。早速いらしていただき、誠にありがとうございます」

「よ、店長。で新商品ってどれだ？」

「こちらでございます」

持ってきたのは、ブレスレット。

黒い紐のような物が何重かになっているものだ。

うん、なかなかいいな。

「いかがでしょうか？」

「デザインは気に入った。値段は？」

「新商品のため、あまり割引はできなかったのですが…。今は1000円をギリギリ切れるくらいですね」

1000円か…。

うん、決めた。

「いいぜ、買う。他に新商品あるか？」

「ええ。只今他のお客様がご覧になっていると思いますが…」

「ソイツ、どこにいる？」

「先ほどまではこちらに…」

そう言われて案内される。

この店、意外と広いんだよな。

それにしても、このオレよりも先に新商品を見るとは…。

気に入らない奴ならぶっ飛ばしてやる。

「あちらのお客様です」

「……アイツ？」

「？はい、そうですが…」

…確かに、アイツはアクセサリー好きだった気がするけどよ…。

まさかここで遭遇するとはな。

近づき、声を掛ける。

「よ、獄寺」

「!？」

バツ、と振り返ってこちらを見る。

「か、風間！何でこんな場所にいやがる！」

「いや、それはオレの自由だろ…。しかもオレはここの常連だし？」

「チツ…」

コイツ…舌打ちしやがった。

「何で最近…前からだけど、ここ毎日サボってたんだよ」

「ん？イタリア行ってた。日帰りだから手ぶらでな」

「は！？イタリアに手ぶらで日帰り！？…何しに行ったんだよ…」

「暇つぶし」

「「……………」」

何か変なこと言ったか？

よくあるだろ、こんなこと。

「…まったく…オマエのような奴がリボンさんの勧誘断って何やってんのかと思えば…」

「別にオレの自由だろ？それにしてもオマエ、なんか沢田に似てきたな。色んな意味で」

「オレが10代目に？」

あー、そーいやコイツ、沢田第一主義者だったな。

なんか面白いし、アイツ嫌いなもの同じだから仲良くなっとくか。

「そりゃなー、ずっと隣にいたりあ似てくんだろ。右腕なら隣にいるの当然だろうし？」

「右腕…オマエはオレが10代目の右腕に相応ふさわしいと思うか！」

「だってよー、山本は違うだろ？あの女はウザイからそこで論外。そうすると獄寺が残るしな」

あ…これってつまり、残り者ってことになるな…。

ま、気分が良い今の獄寺は気づかないだろ。

「オマエ…よく分かってんじゃねーか！」

ほらな、やっぱり。

頭脳は良い方だと思うのに、アホなんだよ、コイツ。

「…なんか嬉しそーだな…」

「オレは10代目の右腕として一生10代目に仕えろと、今改めて決心した！」

…あつそ。

なんかコイツと会話すんのメンドくなってきた。帰ろ。

「店長ー、さっきのやつだけくれ」

そう言いながら1000円札を渡す。

「はい、こちらでございますね。ありがとうございます。お釣りの方が…」

「あ、釣りはいらん。小銭邪魔だし」

小銭って邪魔じゃね？

最近いつも思うんだけどさ。

「では募金箱の方に入れさせていただきます。こちらお品物になります」

「ん。あ、獄寺。アドレス教えてくれよ」

「ああ」

ピピッ、と赤外線通信をする。

「あー、オレのことは呼び捨てでいっから」

「んじゃあオレも隼人でいいぜ」

「んー、わかった。そんじゃな、隼人」

そして店を出た。

この世界に来て、友達が二人…ん？雲雀もか…？

…雲雀も含めたらこれで三人目。

……前世より多いな。

なんか久しぶりに風と遊びたくなってきたな…。

もうすぐ夏休みだし、誘ってみるか。

そう思いながら家に帰った。

Episode 12 問7を解く!

あっという間に夏休み!

…なのに、今は学校…それも応接室にいる…。

ハア…まあ朝早くはないから少しはマシだな…。少しは。

「ねえ、聞いてる?」

雲雀^{コイツ}にしては、だがな。

「見回りだろー? ヤ・ダ!」

ギロリ。

うわお！

雲雀サンが睨みつけてきたよ！

「咬み殺されたい？」

「結構でーす」

「やっぱり君は人をイラつかせるのが上手だね」

やべえ…。

結構…キレてる？

よし、とりあえず話題を変えよう。

「そーいえばよ、何で風紀委員が応接室使えてんだ？まだ委員会では部屋は持てないだろ」

「…僕が言ったんだよ、ちょうど君が転入してくるのに合わせてね」

「なぜオレが来る時と一緒に……」

「君は楽しめそうだったからね。僕が特定の場所において、いつでも君を呼び出して咬み殺せるようにしておきたかったんだ。」

それに、元から次の委員長会議でそうするつもりだったから」

…ワー、サスガ！ワガマイインチョウ！

「で、仕事してね」

「ふざけんな。全力で拒否する」

あ…しまった。

つい思ったまま言っちゃった…。

うん、殺気が溢れてるね♪

「オレ、なんか嫌な予感するから帰る！！んじゃな！」

「待ちなよ…ハア。相変わらず逃げ足速いね」

オレは世界新記録を超えるような速さで逃げた。

ってか、こんな暑い日に見回りなんてことは絶対にしたくない！！
(注…南は一回も風紀委員の仕事をしてません。)

プルルルルルル…。

「電話…？隼人じゃん」

隼人からの初電話だな。

「もしもしー？どした？」

『10代目に聞いたんだけどよ、頭良いつて本当か？』

「まーな。んで、それが何？」

『ちょっと…分かんねえ問題があつてよ…。今から10代目の家来れるか？』

す…素直…！

分かんないってハッキリ言った…！

「おう！すぐ行く！じゃ、後で『あのよ…』ん？何？」

少しの間を空けて、隼人は小声で再び話した。

『…今、アイツもいる…。オマエが嫌なのはよく分かるんだけどよ…しょっちゅうオレのこと見てきてウゼェし、できるだけ早く来れねえか？』

…アイツいんのか…。

アイツは隼人のこと好きらしいから…隼人は今、地獄だな。うん。

隼人でも解けないなら時間かかるだろうし、ちゃっちゃと行って、解いて、帰るか。

「ああ、わかった。…とりあえず、頑張れ」

『…サンキュ…じゃな』

ピッ

仕方ねえな…。

そして、一回だけため息をつき、沢田家に向かった。

ピンポーン。

「おじゃまします」

沢田の家に来るの、二回目だなー…。

オレ的には、あんま嬉しくない。むしろ嫌だ。

ま、もうなかなか来ないだろ。

「よっ隼人」

「おう。早かったな」

「か…風間？」

「「風間さん!!?」」

あ、オレ↓隼人↓山本↓沢田の順な
(ツナと一緒に咲も言ってます。)

それにしても、隼人はオレが来ることを知らせてなかったのか？

ま、別にいいけどよ。

「早速だけどコレだ」

ピラッ、と見せられたのは問7。

おいおい…こんなのを解こうとしたのかよ…。

「…何でこんな問題解いてんだ…？」

「あ、その…オレ達の宿題なんです…」

沢田達っつーと…三枚あるし、沢田、山本、アイツだな。

補習で出されたのか！。

「解けるんだけどよ…こりゃ超大学レベルだな…」

「「「!?!?超大学レベル!?!?」」」」

うるさ…。

「ああ…答えはー。」

ネコジャラシの公式で『4』だな」

こんなのを補習の課題として出すなんて…教師も解けるかどうかギリギリだぜ？

「ネコジャラシの公式って何だ？」

「隼人はもしかしたら知ってるかと思ったんだけどな…。

んー、コレが公式な」

サラサラッ。

「...?」

「あ、説明するよ。」

コレが元で———

んで、公式になる」

「なるほど…」

あー、周りは全く理解できてないな…。

ま、別に関係ねーしいつか。

「とりあえず、答えは4だろ？」

なら、それだけ書いときゃ大丈夫なのな」

山本…本当は途中式も書かなきゃダメだけどな…。

「んじゃ、オレは帰るな」

「待て」

「…オレ、早く帰りたいのに何の用だよチビちゃん」

本当だぜ？

さっさと家に帰ってダラダラとしたいんだからさ。

「何でネコジャラシの公式を知ってる…。

「コレは大学でも習うか習わないかの問題だぞ」

「オレの前のガッコは超一流なんだよ。」

聞いたことねえ？小、中、高、そして希望の奴は大学と大学院までエスカレーター式の学園」

十雅に、オレの通ってた学園はこの世界でも存在させたってことを聞いた。

同じレベルとして、だ。

「南…それって『帝都王儀林学園』ていとおうぎりんがくえんか？」

「あ、さすがに分かった？」

そう言うのと、山本（と、咲）の顔色が変わる。

「え…！？あの帝王かよ！？」

「そーだけど？」

「て…帝王？」

沢田は知らねーの？

「ツナ知らないの？日本一の学校で、世界でもトップの学校だよ？」

あーあーあーあーあーあーあー…。

今、何か聞こえた？

聞こえたとしたら、気のせいだぞ！？

「まさか…あの帝王ー！！？！？！？」

「で、でもよ南…何で並中なんかに来たんだ？」

あ、隼人が沢田の言葉無視したよ…。

「オレ、もう帝王の大学院のテストを満点取っちまったんだ。

そんで、中学に最初は行ってたんだけど…。

つまんないから、それならフツのガッコ行こうと思ってな」

あ、この世界のオレの情報は前世の続きになってるんだとよ。

情報を入れておいてくれてよかったよ…。

オレは前世で満点取っていて、自由登校になってたんだ。

あ、制服は男子はズボンで女子はスカートかズボンか自由だったんだ。

高校までだけだな。

そっからは私服…って決まりだったハズだ。

んで、どのくらい頭がいいかはネクタイの色で決める。

小学校は赤。

中学、青。

高校、黄。

大学、緑。

大学院、橙。

って決まり。

オレは紫。

これは大学院をクリアしたレベル。

初めて作った色らしい。

緑までなら今までに2人いたんだとよ。

まあ、その2人も超ガリ勉で高3の二月に取ったってウワサだった
がな…。

ただ、帝王のレベルだから…。

帝王の赤ネクタイをしてる奴なら普通の高校くらいの問題はヨユウで解けるレベルだ。

あ、オレはメンドイのが嫌いだから勉強してないぜ？

「やっぱ南か…」

隼人？何がだよ。

「何が？」

「これだ…見てみろ」

渡されたのは、雑誌。

見開きが開かれてる。

『帝王の大学院をわずか11歳で卒業！！
今までの、そしてこれから人類の中でトップの天才！！ミナミ・
カザマ！！』

…なんじゃこりや…？

オレの写真とか載ってるし…。

写真はダラダラしてる時のだけど、インタビュー記事がオレの言葉
とは思えない気持ち悪さ。

うえ……気持ち悪…。

「…オレ、こんなインタビューされた覚え無い…それに、このインタビューの答え…キモ…」

「オレも最近読み返したら見つけて、違うと思ったんだけどな…。

でも顔がオマエだから、会って聞こうと思って持ってたんだ」

ん……………インタビュー…？

「あ…思い出した」

「やっぱ南だったか？」

「いや、オレが大学院の卒業証書貰って一ヶ月位経った頃、メチャクチャ人が来て…。

追い払ったんだけど一社だけしつこいから、『勝手にやれ』つつたんだよ。

でもこんな風になってるとはなー」

そーだったよー…。

にしても、気持ち悪すぎるな。

うん。イラつく。

「やっぱなー…って南って世界で一番頭いいんだぜ!？」

何でそんな性格なんだよ!! 傲慢とかもしねーし…」

「メンドイから」

「」「」「なんか納得」「」

おいこら、納得すんなら聞くな。

(南は基本、この中では隼人以外の人に反応しません。)

「やっぱな。じゃあもう帰っていいぞ」

やっばなっと思うなら呼び止めんなよ…チビちゃん。

「ハア…じゃあ帰る」

こうしてオレが帝王に通ったことが広まった。

同時刻、職員室でもバレた…。

応接室の人は、とくに知っていたらしいがな。

Episodi 13 二期開始!

「くそう、くそう! 雲雀のアホ—————! ! ! ! !」

只今全速力で登校中。

何で走ってるのかって?

「書類整理なんて、死んでもイヤだあああああ—————! !」

という訳だ。

そうそう、今日から二期なんだ。

夏休み…特に何もしてねーな。

問7を解いたりしたくらい？

他は…。

あ、またイタリアに行って、V A R I Aの奴らと遊んだな。

ま、それも一回だけだったけど。

「確か…体育館で朝会だっ！」

校門での時間はセーフ。

だが、風紀委員は朝会の時にいなくてはいけならしい。

「着いたあぁっ!!」

ガラッ、と体育館のドアを開けたら生徒が皆こっちを見て、静かになる。

「雲雀イイ!!セーフだから書類整理やんねえからな！」

珍しく群れを見ても怒っていない雲雀を指差して言う。

その時――――。

キンコンカーンコン。

「うん。ギリギリセーフだね」

雲雀の許しが出た。

「よしっ!! 危なかったあっ!!」

思わずガツポーズ。

「でも、廊下走って来ただろうから書類整理やつてもらおうよ。

今まで逃げた分もあるから」

「イヤだ!! オレは今日忙しいんだ!」

実際は何も忙しくないけどな。

「じゃあ何が忙しいのか言ってみてよ」

「あれとか…これとか、それとか…」

「用事ないのは分かってるんだから、諦めなよ」

「イーヤーだああ!! そっそうだ、隼人!! 今日オレ用事あるよな!?!」

何かテキトーに言ってくれ!

「オ、オレに振ってんじゃねえ! 10代目に迷惑かかるだろ!」

「何でオレ——!?!」

沢田は白目になっている。

「ダメだ! 沢田は今日ボクシング部に来るのだ!」

うるさ…。

「笹川了平か…。別にそれは自由にすれば?」

「うむ、それならいい!」

勝手に話しかけて、勝手に解決してるし…。

何だコイツ…。

「沢田、今日オレ用事あるよなっ！」

「君が無理やり用事作ったって、無駄だよ」

雲雀は黙っとけっ！！

「そ、そうだ！オレはこれからイタリアに行かなければならないんだ！とゆーわけで…」うるさいよ」

…うるさい、はないだろ…。

オレが頑張って用事を考えているのに…。

「風間南、仮に君に用事があったとしても、書類整理はやらせるからね」

「イヤだああああああ」

教師も生徒も、朝会始められなくて困ってるけど、それどころじゃねえっつ!!

…こうなったら道は一つ!!

「なら逃げるっ!!」

オレはそのまま体育館を飛び出した。

「後で咬み殺してあげるから安心して」

「安心できるかアホっ!!」

このまま家にいてもダメだしな…。

まずは教室に行くぜ!!

そして放課後――。

「うわあああああっ！！来るなああああ！！！！」

雲雀との鬼ごっこ続行中！！

朝からずっとだぜ？

いい加減、体力が…。

でも、途中で休んだりしてるけど。

オレは今外を走ってる。

お？前に何部かのジム！！

ひとまずここに隠れるぜ！！

ボタン！！

ドアを開けて侵入。

「あり…？」

中では笹川了平と沢田が互いに死ぬ気になっていた。

それだけではなく、隼人、山本、笹川京子、チビちゃんリボン、ボクシング部員。

それと――――

――――あの女。

「南！？何でここに来たんだよ！」

隼人：今沢田が頑張って笹川了平と戦っているけど、それは無視？

「書類整理から逃げたら雲雀に追いかけてる。ひとまず隠れさせてくれ」

「そ…そーゆーことか…つつかまだ逃げてたんだな…」

本当は見たくないんだけど、今回は沢田の死ぬ気をじっくり見るか。

「入れ入れ入れ入れ！！」

「やだやだやだやだ」

笹川了平のパンチを避けながら断る沢田。

…変な状況だ…。

しかし、勝負は決まる。

「断る!!!!」

「ぐはああ!!」

ガッ、となかなか強い沢田の右パンチが笹川了平に当たる。

殴られた笹川了平は窓ガラスを割るほど飛んだ。

しかし――――。

「ますます気に入ったぞ沢田!」

「!!!?」

「お前のボクシングセンスはプラチナムだ!! 必ずむかえにいくからな!」

「もーお兄ちゃんうれしそうな顔してー!」

…変な兄妹だな…。

それしか思うことねえや…。

「京子ちゃんのお兄さん、大丈夫ですか!?!」

何でオレがまたあの女が存在を…。

いやいや、見えない、見えない、聞こえない。

「おう!! 京子の友達か!

見ての通りオレはピンピンしてるぞ!」

血流しながら言えるセリフじゃねえぜ?

「オレも気に入ったぞ笹川了平」

「!？」

「おまえファミリーに入らねーか」

ああ、またスカウトしてるよ…。

オレは今のうちに…。

「おまえもどうだ？ 風間」

……。

「何度言われようと答えは同じ。断る」

「何で嫌なんだ？」

「だから、オレはメンドイのが嫌いなんだよ。あと、ウルサイのも嫌いだから断る」

本当だぜ？

オレはこーゆーのが嫌いなんだ。

「またそれか…。まっいつか必ずファミリーに入れてやるぞ」

「何度でも断ってやるよ。んじゃーな」

オレはもう放課後だから帰ることにした。

だが、問題が一つ。

そして四時間後。

「こ…これで最後だな…？」

「うん 早く終わらせてね」

「うう…」

そして、ポン、とハンコを押す。

「おおおおおお終わった…」

もう肩がイカレそうだ…。

「じゃあ早く帰る準備してね」

「送ってくれんの？」

冗談で言ってみた。

「見回りのついでだよ」

中学の委員会で見回りすんのかよ…。

「とりあえず、サンキュー」

「じゃあ校門に来てね」

雲雀はさっさと応接室を出て行った。

「ってか、荷物これだけだし…」

オレの荷物は、カバン、財布、携帯、小型パソコン。

筆箱や教科書なんてオレにはない。

たまーに授業を受ける時は、教師が渡してくるからな。

カバンを取り、雲雀の後を追う。

「んで…？なんで君は中学生なのにバイク持ってるのかい？」

校門の前にはバイクに乗っている雲雀。

「並盛のボスは僕だよ？」

「ああ…そーでしたね…」

もう何言っても無駄だ…。

「早く乗りなよ」

「ハイ？」

聞き間違いだな、うん。

「早く乗りなよって言ってるんだけど」

…どうやら聞き間違いではなかったようだ。

まさかバイクで送られるとは…。

「ハア：乗らなかったら殺されそうだし、乗るよ…」

そして後ろに乗る。

「行くよ」

ビュウウウンッ！！

「おいおい！！速度出しすぎだろ！」

「僕にそんなもの関係ないよ」

でも速すぎる…が。

「うっひょうっ♪オレこーゆーの好きだから楽しいぜ♪」

オレ、絶叫系大好きなんだぜ！

「君に楽しんでもらう為じゃないよ」

「まあまあ。お、もう家か」

あっという間にマンションが見える。

「着いたよ」

マンションの下でバイクを止めた。

「ありがとなー。んじゃ」

何も言わずに雲雀は帰ってく。

「つと。コンビニ行って飯買ってから帰ろ」

マンションの向かい側にあるコンビニに向かって歩き出した。

E p i s o d i o 1 4 誕生日を迎える！

只今、9月6日の夜11時。

普通なら家で寝ている時間だ。

でも、今日は違った。

理由？

……あのワガママ委員長・雲雀に呼ばれたんだよ！！

電話が来たんだ。

『今から並中の屋上来て』

それだけ言って切られた。

…何のために？

しかも屋上？

……やはり、雲雀が何考えてるのかなんて分からないな。

理解する気もないけど。

「やっと着いた…」

ギィ…。

屋上へのドアを開ける。

「遅い」

…いましたよ。

何か安心したよ…。

すっぱかされてると思ったからな…。

「遅いも何も…。ちゃんと十分以内に来たけど？」

いつも十分以内だからな！。

それに、オレ寝てたんだぜ？

やっぱり雲雀はワガママ大魔王だ。

「じゃあこれからは五分以内に「すみません、もう言いません」ならしいよ」

五分以内？

ムリだし、イヤだし、メンドクサイし。

あ、この言葉気に入った。

『ムリだし、イヤだし、メンドクサイし』。

うん。

オレのモットーにしよう！

ん？モットーでいいのか…？

まあいいや。

ああ、空がキレイだ…。

星一つも浮かんでないけど、月だけは見える。

…最高ではないか。

ああ、オレ星って無駄にチカチカしてて嫌いなんだ。

『死んだら星になる』？

オレはそんなの信じない。

第一、十雅から死んだらどうなるか聞いたし。

「ねえ、何ボーっとしてんの？」

「んー？空がキレイだなーって思って」

雲雀も空を見上げるが、一度見て、再びオレの方に向いた。

「星一つも出てないけど…」

「星なんて無駄にチカチカしてるだけじゃねえか。オレが好きな月だし」

「ふうん…。まあ確かに月はキレイだね」

雲雀は再び空を見る。

「委員長!!」

ドアを開け、草壁さんが入ってきた。

「何？」

「用意できました。それと、あと五分です」

？

何か用意してたのか？

それに『あと五分』って何が？

「分かった。今から行く。君も行くよ」

「え〜…。まあいいや」

雲雀から睨みつけられたのは言うまでもない。

「ってかどこ行くんだよ」

草壁さんは何も言ってなかったのにコイツ知ってるみたいだし…。

「ついてきたら分かるよ」

「…」

イラっとしたのは、気のせいではないだろう。

「…応接室？」

雲雀が止まったのは、応接室の前。

「うん。入れば？」

「…なんか嫌な予感するんだけど…」

雲雀から言われて良かったことなんて何も無い。

「今日のことを企画したのは草壁だよ」

「じゃあ入る」

草壁さんなら大丈夫だろう。

ガラッ。

パ
パ
パ
パ
パ
——ン…。

「」「お誕生日、おめでとうございますー！」「」

「…は？」

ドアを開けたらクラッカーを浴びた。

？

「誕生日？あ…」

時計を見たら、ちょうど12時。

日付は9月7日。

「風紀委員って、マメな人だったんだな…」

これしかオレは言えなかった。

だってよ、雲雀率いる風紀委員だぜ？

ビビる…。

「君もこれで13か」

「うお?!」

あの…あの群れるのが大嫌いな雲雀が…。

この群れを許してるよ…!!

「僕は眠いんだ。早く終わらせてね」

…オマエが呼んだんだよねー？？

「雲雀！！」

オレは両手のひらを雲雀に見せる。

「何？」

「プ・レ・ゼ・ン・ト！！」

「…」

何もくれねえのかよ…。

「じゃあ『特別委員』」

「は？」

何て言った？

「だから、君を『風紀委員会特別委員』にしてあげるよ」

「嬉しくねえよ！！」

「もう決めたから無駄だよ」

「…」

…こんな勝手に嬉しくない誕生日プレゼントを渡されたよ…。

ああ、空が青いな。

他の人には夜だから真っ暗に見えるかもだけど、今のオレには真っ青に見えるぜ。

あ、真っ青ってのもキモイな。

「じゃあ…」

こんなに勝手な奴ならオレからも言ってやる!!

「オレ、これから雲雀のこと『ヒバリン』って呼ぶからな」

ふっふっふっ…。

これは、『吸血鬼ヒバリン』の『ヒバリン』だ!!

アニメを思い出したんだよ!

「咬み殺すよ?」

「じゃあ恭弥でカンベンしてやるよ」

咬み殺されるのは嫌だ。

それに、凧と隼人、大切な人はみんな下の名前で呼び捨てなんだし。

「…」

お?何も言わないってことなら許可したってことか?

「それなら僕も呼び捨てにするよ?」

「別にいいぜー?」

隼人も凧も、呼び捨てだし。

「あ、じゃあこの腕章も付けてね」

雲雀：否、恭弥から渡されたのは腕章。

でも、何も字が書いてない。

風紀委員の腕章の『風紀』って字を消して、黄色の部分に緑に、赤い部分を青にした感じだな。

「2つ付けろと…?」

「うん。『風紀特別委員』ってことだからね」

…やっぱ嬉しくねえ…。

「じゃあこれからは特別委員って呼ばさせていただきます!!」

「え…、いや…それはナシで…」

草壁さん、それだけは嫌だ…。

「しかし…」

「い、いままで通りでいいッスよ…？」

ただでさえ、『風間さん』ってさん付けされてるんだ…。

「しかし…」

…そんなに『特別委員』ってすごいものなのか？

オレには理解できない。

「じゃあ命令な。絶対に今まで通りにしろ」

少し殺気を込めて言ってみた。

「わ、わかりました!!」

ん、冷や汗流してるな…。

悪イ、悪イ。

「じゃ、オレ疲れたから帰るな…」

「うん。ああ、今日の委員長会議に君も出てね」

恭弥が言ってる委員長会議ってのは確か、各委員代表一名のみじゃなかったか!?

…風紀委員から二名でいいのか?

「はあ…あ、じゃあ代わりにしばらく仕事なしで」

「まだ一回しかやってないのに、よく言うよ…。まあいいよ。ちゃんと出ればね」

へいへい。ちゃんと出ますよ。

「「「お疲れ様でしたア!!」」」

……ヤクザのボスカい、オレは。

「じゃあね」

…うん、恭弥くらいサッパリした感じで充分。

オレは家に帰った。

朝――――。

携帯にメールが二通届いていた。

隼人と凧だ

内容は『誕生日おめでとう』。

ああ、ありがたいな…。

二人に返信をして学校に行く。

新しい腕章は嬉しくないけど、誕生日プレゼントとしてちゃんと付けて行った。

で、今日は委員長会議があるんだった…。

それまで応接室で昼寝してよ。

この時、オレは予想してなかった…。

「…まさか、寝過ぐすとは……」

そう、寝過ぐした。

あーあ…やっちゃった。

ま、いいか。

……何でかな？

廊下から殺気がするんだ。

ガラッ。

「よ、お疲れさん」

「君さ…あれだけ言ったのに来なかったね……」

そう、恭弥だ。

「さっき留守電で伝えたけど、寝過ごしたんだって。だからまあ、どんまいだ」

「ハア…いいよ、別に。予想通りだから」

「…なんかヒドくね？」

「君が今まで、素直に仕事したことある？」

「ない」

「……だから、どうせ今回も仕事しない、ってわかってたんだよ」

まー、確かにそうだな。

「それじゃ、僕はまだ仕事あるから」

「ん、じゃな」

恭弥は部屋を出て行った。

応接室でする仕事じゃないんだなー。

それからグダグダしてたら電話が来た。

「つたく…誰だよ」

少しイライラしながらも通話ボタンを押す。

「もしもしー？」

『オマエ、今どこだ？』

…
リボーンチビちゃんか。

「応接室だけど？」

『…風間は風紀委員なのか？』

「だったら？ってか腕章見たことあるから分かるだろ」

まさか、バカだとは思わなかった。

『確認だ。オマエがファミリーに入りたがらないのは、風紀委員があるからか？』

…何でそーなる…？

そこまでして、オレをファミリーに入れたいのかよ…。

「全く関係ねえよ。何度言おうがオレはマフィアになるつもりは無い。諦めな」

まあ、関わることになりそうな予感するけど、それは言わない。

『…そーか…。だが、オレは諦めねーからな』

それだけ言って切れた。

ったく…何だよ。

再びソファで眠ろうと欠伸あくびした時、扉が開いて恭弥が入ってきた。

「ふ、ほうひほほわっはんは」

おお、欠伸^{あくび}しながらだから言葉になってねえな。

「…なに言ってるのか全くわかんないんだけど」

「仕事、終わったのか？」

「今のはね。でも他の仕事が溜^{ため}まつてるからまた仕事だよ。君のせいだけ」

溜^{ため}め息混じりに言ってきた。

「棘^{とげとげ}々しいなー。オレは『特別』委員だから仕事しないの」

「そういう意味の特別、じゃないんだけど…」

そして、また溜^{ため}め息をついた。

「じゃあどーゆー意味の特別だよ」

「君は縛られたりするのが嫌いみたいだから、他の風紀委員に比べ
て自由なんだよ。服装や、登校時間がね」

あー、風紀委員に入る時の条件か。

「ふーん。ま、いいや」

紅茶とクッキーを取ってきて、ソファの前にある机に置く。

紅茶とかは応接室にあるんだぜ？

その時だ。

ガチャ…。

「へ〜。こんないい部屋があるとはね——！」

山本と隼人が来た。

何しに来たんだ？

「君、誰？」

あらら…恭弥はかなりイラついてるな。

ま、そりゃそっか。

じぶんのばしょ
応接室に勝手に入ってきたんだから。

隼人、恭弥を挑発すんなよ…？

挑発したら、タダじゃ済まないだろうし。

「なんだあいつ？」

「獄寺待て…」

「風紀委員長の前ではタバコ消してくれる？ま、どちらにせよただでは帰さないけど」

「！！んだとてめ——」

「消せ」

ビュッ。

へー、恭弥も優しくなったもんだ。

最初っからボコらず、タバコだけ潰すなんてな。

「南!？」

お、気づいたか。

「南、何でそこにいるんだよ!」

「オレ、風紀委員だぜ? んで、応接室でまったりしてた」

隼人は知ってたと思うんだけどなー。

「へー。はじめて入るよ、応接室なんて」

するっ。

お、沢田が来たか…。

「ね、ねえツナ…？」

…何か聞こえた？

オレには聞こえなかったなあ。

「まてツナ…！」

「え？」

「1匹」

ガッ。

うわおっ。

まあ沢田はいいんだけど…。

問題は……。

「のやろお!!ぶっ殺「隼人待て!!」？」

そう、このバカ隼人だ。

オレは叫んで隼人を止めた。

「恭弥も待てっての!!」

オレは止まった隼人に殴りかかろうとしている、恭弥のトンファ―を掴む。

全く…コイツら……。

「…何のつもり？南…」

「最初に風紀委員に入るときの条件。

隼人はオレのダチだから、手出し禁止な」

「…」

恭弥は止まったか…。

んで、またもや問題は…。

「南！！コイツは10代目に手エ出したんだ！邪魔すんな！」

こちらも、またもや隼人だ。

「…分かった。オレは一度止めたからな」

隼人には沢田関連で何言っても無駄だ。

「それじゃあ、再開しようか」

恭弥も隼人と戦う気になっている。

…これ以上は、ダメだな…。

そして、隼人はやられ、山本もやられた。

うん、あつという間だった。

で…存在を認めたくないが、あの女は？

部屋を軽く見回すと、いた…。

入り口に立っていて、自分が攻撃されないように廊下にいる。

……何だよ……。

なら、来るんじゃないエよ…。

沢田達と関わるのが、危険と隣り合わせだということはわかって
関わってんだろ…？

それなのに、いつも一緒にいるよな…？

なら、なぜ今助けない…？

オマエにとって仲間は…友達は、その程度のものなのか…。

……だから、オマエは嫌いなんだよ…。

他にも嫌いなことはあるが、これが何より嫌いなんだよ…!!

オレがイラついてる間に沢田は目覚め、死ぬ気になっている。

沢田だって、隼人と山本を守ってる。

なのに、オマエは何だ？

殺意が出てきた。

ピタ。

恭弥と沢田の戦いが止まる。

二人…いや、窓の外にいるリボンチビちゃんもオレを見ている。

「南…？どうかしたの？」

下を向きながら殺気を放っているオレに恭弥が話しかけた。

「…何でもない」

「…そう。ねえ、君にはもう飽きちゃったな。

そこにいる君、相手になってくれない？」

沢田のことが飽きたのは、オレの殺気を感じたからだろう。

恭弥は^{チビちゃん}リボーンに殴りかかる…が。

まあ、止められた。

いつも頭に乗ってるカメレオンが変化したものによってな。

「ワオ。素晴らしいね、君」

「おひらきだぞ」

爆弾！？

そんなもん投げられたら、応接室もボロボロになるし、オレも怪我

するし！

オレは急いで爆弾を奪い取る。

…間に合え！！

ヒュッ。

爆弾を思いっきり外に投げる。

ドカーン…。

「ふうー…。おいチビちゃん、こんな危ねえモンを使おうとするな」

「チッ…」

おいおい、舌打ちかよ…。

「じゃあな」

ぴょん、と窓から降りて出て行った。

恭弥は追わなかった。

沢田、隼人、山本…あの女も消えていた。

「…ねえ」

「？」

いきなり恭弥が話しかけた。

「あの爆弾に反応できたの？」

「ん？まあ…」

…ヤバいことしちゃったか？

「ふうん…。ますます南を咬み殺したくなってきたよ」

嬉しそうに、妖しく笑いながら言う。

「…オレは嫌だから」

嬉しそうな恭弥を止められそうもないので、急いで応接室を出た。

Episode 15 体育祭!

明日はいよいよ体育祭。

オレは、風紀委員…いや、風紀特別委員だからかなり忙しい。

恭弥のヤツ、オレに単なる面倒事係を押し付けただろ…。

何がそんなに忙しいのかって？

まず、一週間前から予算を決め、各委員会との話し合い。

そして、ルールのチェック、出場選手の種目チェック、etc、e

tc…。

「草壁さんより忙しいじゃねえかよ!!」

草壁さんも副委員長だから忙しいってことを聞いた。

でも、その比じゃないくらい忙しい。

「これで最後です」

オレには五人手伝いが来た。

それでも、昼寝ができない程忙しいのだ。

だから最近は授業は受けてない。

まあ、いつも受けてないが…。

でもその仕事を教室でやっている。

周りの目が痛いよ…。

隼人が『手伝うぜ』って言うてくれたけど、遠慮した。

なぜかって？

…全部オレのサインが必要だから意味ないんだよ…。

「…まだあんのか…？」

さっき最後だって言ってたけど、新しい紙を大量に持った人が来た。

「…すみません…。ですがこれは我々でも大丈夫な物ですので、お帰りください」

「おおマジか！！なら頼んだ！」

オレは急いで帰る。

だってさ、また持って来られたら嫌じゃん。

そしてそのまま帰宅完了。

明日、このままサボ…いやいや、ダメだ…。

さすがに明日サボると恭弥がうるさそうだからな。

ソファァーで横になる。

「…なんか…眠い…」

よっぽど疲れてたのか、そのまま寝てしまった。

プルルルルルル…。

「電話…」

せっかく気持ちよく寝てたのに…。

ピッ。

「もしもし…」

『今日は朝から仕事あるから、早く来てって言ったよね?』

…恭弥ですよ…。

ってか、そんなこと言われ……………たな…。

「悪い…何分以内?」

『今なら20分』

おお?

意外と時間あるから、風呂入ろ。

「分かった。じゃな」

電話を切り、急いで風呂に入る。

そして学ランに着替え、残り五分。

「やべっ…走って行かなきゃ…」

…体育祭始まる前から疲れそうだ、コリャ…。

まあ競技は出ないけどな。

「間にあつたか!？」

応接室のドアを勢いよく開ける。

「うん。セーフだね」

「フー…」

よかった、よかった…。

でもさ、こっからが忙しいんだよな…。

「はい、書類」

「……………どう…も…」

朝っぱらから書類…。

何の嫌がらせだろうな…。

ああ、昨日に比べたら少ないかな？

「それをあと一時間で終わらせてね」

「……………」

文句言う気力も失せたよ…ハア。

一時間後。

「おーわーったアアア!!!!!!」

何とか終わった…けど体育祭開始まで30分…。

「屋上行って、サボってよ♪」

これなら仕事が増えてもサボれるぜ♪

そして10分後の応接室――。

「南…逃げたね…咬み殺す!!」

何も知らない南は寝てました。

『只今から、並盛中学体育祭を開催いたします』

「ん…」

放送の声で目が覚めた。

もうそんな時間か…。

まっ携帯に恭弥からの連絡はないから寝てよっ♪

『プログラム一番、選手全員による準備…ひひひひひ雲雀さん…!!
?』

…聞かなかったことに……………。

できないな。

何やってんだ? 恭弥…。

わざわざマイク使って言うことでもあんのか?

『南…逃げたお礼をしてあげるから出てきなよ』

ヤバイ！！

行かなくては！！

え？どうせ咬み殺されるから隠れてればって？

10で済むのを100にしたくはない。

急いで屋上から出て、グラウンドに行く。

わー、皆揃ってるよ…。

「それじゃあ早速咬み殺してあげるよ」

トンファーを構え、言ってくる。

さあ、やっぱり逃げようか♪

「来るなああ——————！！！！」

……嬉しくない鬼ごっこ開始ー！

「いくよ」

そう言ってトンファーを振り下ろしてくる。

ビュッ。

ひゅっ。

ふー、ギリギリで避けたよ…。

すると、突然脳内に声が響いた。

『南！』

『ああ？十雅、今オレ忙しいんだけど！』

『前に言ってた刀、完成したぜ！』

おお、マジか！

一瞬恭弥から隠れられれば刀貰って応戦できるな！

『じゃあ、すぐに貰うから準備しとけ！』

『お、おう!』

ふー、これでどうにか戦えるな。

「君…いつまで逃げる気?」

「さあな!」

そして校舎の陰に隠れる。

「十雅! よこせ!」

小声で十雅を呼ぶ。

「ほら、これだ！」

一瞬にして十雅が現れ、漆黒の刀を渡された。

全てが漆黒の刀だ。

「ど…どうだ…？」

十雅がビクビクしながら聞いてきた。

な、もう何回ダメ出したかわかんねーくらいしてるからな…。

「これで合格だ。さっさと姿消せ！」

「ああ」

十雅は姿を消した。

「見つけたよ」

あー、見つけなくてもよかったのに…。

「!…その刀は何だい？」

「前に風紀委員になる時言っただと思うぜ？」

「ああ、完成したんだ」

何も言わずにトンファーを振りおろしてくる。

ガギイン…！

トンファーと刀がぶつかった。

「なー、もう許してくれよー。疲れたし」

「……次はちゃんと仕事してね」

んー、確かにそれしか道はないな。

「わあったよ。んじゃ、またな」

そのまま校舎に入る。

そーだ、また屋上で昼寝しよ。

「…何やってんだ？あのバカ共は…」

隼人と笹川了平がC組の総大将を潰していた。

…この後処理をするのが誰か、分かってんのか…？

…オレなんだよな！。

棒倒しって結構人気ある競技だから審議になるな！。

めんどくさ…。

そして昼――――。

今は審議中。

「んで？ A対B・C合同でいいのか？」

提案者である笹川了平に確認する。

「もちろんだ！！」

熱いなあ…。

それ以上にメンドクサイ奴だけど。

つかバカだろ？ コイツ…。

倍差あるのに勝てる気でいんのか…？

「じゃあそれで決定。審議なんて面倒なのは終わりで解散」

周りは『本当にいいのか?』とか聞こえるけど気にしないって。

そしてすぐに棒倒しが始まる。

合同チームの総大将は恭弥。

A組の負けは更に確実だな。

最初はA組も元気だったが、2対1。

ズガン。

「お、沢田が死ぬ気になったか」

騎馬を作り、圧倒していく。

しかし、些^ち細^こなことで終わってしまう。

「おい芝生メット！てめー今足ひっかけたろ！」

「ふざけるなタコ！人の足を蹴っておきながら！」

…やっぱ短気な者同士だと大変だな…。

ま、普通に考えて乱闘だ。

「…グラウンドが壊れませんか…」

願いはそれだけだ…。

Episode 16 大空の殺しを処理する！

今日は日曜日。

ああ、久しぶりにゆっくり出来る…。

しかし、そんな時間は長く続かない。

ブルルルルルル…。

ピンポーン…。

「…出たくないなあ…よし、居留守だ」

ダブル居留守を使うことにした。

しかし、相手が悪かった。

ガキッ。

…何だろう、今のドアが壊れるような音は。

「やあ」

「…もう少しまともな入り方してくんね？」

「南が開ければいいことだったんだよ」

…居留守の権利なし？

ああ、電話も恭弥からだ。

「んで、今日は何の用？」

「赤ん坊に貸しを作りに行くんだけど、あいにく僕は忙しくてね…。

だから代わりに南に行ってもらおうと思ったんだよ」

はあ？ ついて行くならともかく、オレ一人で沢田の家に？

「いや「君に拒否権はないよ」…わあったよ…ハア」

オレ達はマンションの下まで行く。

家の扉は十雅に直させるか…。

ちなみに、今の服装は学ラン。

…風紀委員の仕事だから学ランにしろっつわれたんだよ…。

恭弥はバイクに乗る。

「なあ恭弥、オレもバイク欲しい」

恭弥だけバイクで楽するなんて、不公平だろ！

「ふうん。じゃあちゃんと仕事したらいいよ」

「マジ！？よっしゃ！色は黒な！！」

やっぱさ、色は黒がいいじゃん？

「ちゃんと仕事するのが前提だからね」

「おう！」

そのまま恭弥は消えてった。

オレはさっさと仕事を終わらせたかったから、少し急ぎ足で沢田家に。

ピンポーン。

「おじゃましまーす」

返事も聞かずに家に入り、階段を上る。

「で、何の用だって？」

部屋に入り、いるであろうリボン^{チビちゃん}に聞く。

「南!？」

「風間!？」

「風間さん!？」

「はひ…? 誰ですか？」

「ちゃおっす。早かったな。今ヒバリから連絡あったばかりだぞ」

皆で反応しなくていいのに…メンドクサイから。

「で、恭弥に頼みの内容聞いてないんだけどよ…何？」

そう言った時だ。

ベッドの上の死体に気付いた。

「お♪こいつぁー見事だな♪心臓一発。あ、もしかしてこの死体の処理が頼み？」

「鋭いな、その通りだぞ」

「なっ。はぁ〜!!!?何言ってるの〜!!!?」

「沢田、ウルサイ」

本当、鼓膜破れたらどうしてくれるんだよ…。

「い…めんなさい…」

あ、そーいやアイツは……よし、いねえな♪

「死体を見つからないように消して、殺し自体を無かったことにしてくれるんだぞ」

「いろんな意味でマズいよそれは!!」

だから、ウルサいつての…。

ハア…。

「オレが処理すんのはメンドクサイから、後で他の風紀委員よこすわ。んじゃな」

「委員会で殺しもみ消してんの…!!?」

「それは極秘だ。またな」

風紀委員のことは極秘さ。

オレはさっさと沢田家を出てった。

ああ、出ていく時は窓から出てったんだ。

なんでかって？そりゃあもちろん、窓からの方が近いからだよ。

靴は履いたまま家に入ったし？

さて、恭弥に連絡するか…。

「もしもしー？もう終わったけど」

『そう。ああ、今赤ん坊から連絡があってね。今の死体は処理しなくていいそうだよ』

「ふーん。なら頼んでくんなよ…。で、バイクは？」

『もう並中にあるよ。違うのが良ければ変えるけど』

…いや…変えないでいいよ…もうあるなら…。

「んじゃ、今度並中行った時に見るわ。んじゃな」

ブツリ、と電話を切る。

…早く家に帰ろう…。

さすがに休日に来て学ランでいたくないからな。

行く時よりは遅いけど、少し急ぎ足で家に帰った。

家に帰って、ふと思った。

このままリング戦とかでオレはどうなっていくんだろうか、と。

守護者とかにはならないと思うけど、もしかしたら関わりができるかもしれない。

それが沢田達…主人公達と敵になるポジションの奴とかかもしれない。

「なら…変装しなきゃだよな…」

黒曜編はわからないけど、V A R I A 編に関わる可能性は高めだろう。

前にV A R I A アジト行ったりしちまったし。

「十雅ー、出てこい」

ソファ―に座って、十雅を呼ぶ。

「どうかしたか？」

パツ、と十雅は出てきた。

「あのよ、オレの新しい武器作れ」

「は!?! 刀以外で、か!?!」

「…何か文句でも？」

「いえいえいえいえ、滅相めっそうもございません!!」

よし、ならOKだ。

「じゃー、どんな武器にするか言うからよく聞けよ。

武器は千本。針みたいな奴で、本来の千本よりも殺傷能力を高くしろ。

本数は…1000な」

十雅が一生懸命メモとってるし…。

ま、頑張れ。

「それとは別に、食らったら2、3秒だけ激しい痛みを感じる“痺れ千本”が500。

そして、5時間は行動不可能になり、常に頭が割れるほどの痛みを感じる“毒千本”も500。

分かりやすく色も付けてくれ。痺れが黄色で、毒が紫な。

毒千本の解毒剤を錠剤状にしたものも忘れんなよ」

…だんだん十雅の顔色が悪くなってきたな…。

「あ、変装の服はオレが用意するからいい。

それと、パソコンの機能をつけろ。

オレが知りたい奴の体力とかが分かるようになるものと、沢田の超直感がオレには効かないようにするもの。

…とりあえず、今日はこれでいい」

わー、十雅の顔が真っ青な気がするよ。

「……………」

「返事は？」

「あ、ハイ！……！すぐに作らせていただきます！……！」

この様子ならすぐに完成するな。

「じゃあ今すぐ作れ」

「はい！！失礼しました！！」

そして十雅は姿を消した。

「さて…オレは変装用の服とかを買ってくるか…」

そして再び家を出た。

結果的に買ったのは、黒の長ズボン、白いシャツ、黒の顔がすっぱり隠れるフードがついた大き目のパーカー、黒い手袋、黒いポーチ、黒い男モノのブーツ。

それと、念のため青いカツラ。

手袋つーのは、骸が使っているような手袋だ。

ブーツも、V A R I A が使っているようなものだけだな。

「あとは…名前、だな」

オレの名前に近いのでいっか。

風間…ではなく南に近いのにするか。

南はイタリア語で s u d ……。

なら、『スード』とかにしよっかな。

うん、スードでいいや。どーせテキトーだしな。

で、黒曜編とかが起こるのは…来年…だっけ？

「はぁ…来年になってほしくねーなぁ…」

でも、わかっている。

その時はすぐに来てしまうことを。

だから今できることは、その時に向けて準備をすることだけだ。

その時は、
すぐに来てしまうのだから。

Episode 17 雲のお見舞いで10年後雷に会う！

「…絶対ウソだろ」

オレは今、恭弥と電話してる……んだけどさあ…。

恭弥が風邪ひくとか、あり得ないだろ…。

「バカは風邪ひかないっつーし」

『僕はバカじゃないけど』

「いや、戦いバカだな。すぐに強そうな奴に喧嘩ふっかけるからバカなんだよ」

『咬み殺されたい？』

「ほら！元氣じゃねーかよ！」

咬み殺すことができるのなら、それは元気ということだ。

『ハア…とにかく来てね』

ブツッ。

「…話を聞け！！！！！」

仕方なく、病院に行く。

ああ、恭弥が入院してるらしいんだけどよ……アイツは絶対に風邪なんかひかないと思うのに…。

で、オレが呼ばれたんだよ。

『僕がいない間にやってもらおう書類を教えるから』らしい。

…よし、全部草壁さんにやってもらおう。

バイクに乗り、並盛病院へ向かった。

ガラガラッ。

「恭弥、来たから貸し1な」

「ワオ。僕がそんな事を聞くとでも？」

「…そうだったな…。でも見舞いは無いからな」

「別に期待してなかったからいいよ」

ムッ…。

そう言われると買って来ようかと思うが、そんな面倒なことはしない。

「…そう言われたら買ってくるのが普通だよ」

「欲しいなら欲しいって言えよ。オレはそうじゃなきゃ買わないからな」

オレの面倒くさがりっぷりをナメるなよ!!

「じゃあ買ってきて」

「へ？」

「だから、何か買ってきて」

恭弥が…。

「素直になった…!!」

「…何？」

「イヤ、何でもない！買ってくるよ」

果物にして、パイナップルも忘れずにな♪

どうせなら骸戦が終わってからだったら良かったのに…。

嫌がらせの意味が分かるから。

「早くしてね」

「へいへい」

廊下を歩いていると、山本が見えた。

…関わらないでいこう…。

「お？ 風間？」

…バレたか…。

ま、真正面から歩いてたら見つかるよな。

「…だったら何だよ…」

「ハハッ。今ツナが入院しちゃっててさ。ん？もしかして風間もツナの見舞いか？」

…誰も理由聞いてねえし。

「何でオレが沢田の見舞いしなきゃいけないーんだよ」

「そんな事言うなって。ほら、行こうぜ」

「行かねーよ」

ってか行きたくないし。

アイツがいる可能性もあるから。

「まーまー」

∴コイツ、ノーテンキ過ぎて殴りたい∴。

「やれやれ。トラブルですか？」

…まさか…。

「初めまして、若き師匠」

「……………は？」

「お、師匠っつーのは風間のことか？ならオレは先にツナんところ行ってるな」

…山本…。

何でそんなに馬鹿なんだよ…。

「オマエ、誰？」

知らないフリをしよう。

「師匠、10年後のランボです…」

いや、知ってるけど…。

「つかさ、師匠って…？」

「ああ、10年後で弟子にしてもらってるんです。だから、師匠と呼ばせてもらってます」

…そう…なんだ…。

一体10年後のオレは何をしてんだよ…。

「てゆうーかよ、オマエ誰？オレ、“ランボ”って名前の奴知らねーけど」

「よ…よくボンゴレ…沢田綱吉と一緒にいるんですが…」

あ、なんか落ち込んでるな。

ま、放っておこう。

「あのアホ牛か？死ぬほどウザい」

「そ…そう、です…」。

では若きボンゴレに会いに行くので…失礼します…」

ヨロヨロと歩きながら行った。

オレ、そんなひどい事言ったか？

ま、いつか。

「あ、恭弥のお見舞い」

急いで買いに行った。

「恭弥、買ってきたぜ!!」

ガラッと開けて言う。

「ワオ。意外と早かったね」

「バイクで行ったからな。ほら、コレ」

渡したのは、一般的なお見舞いの果物。

パイナップルは忘れてない。

ああ、恭弥の足元に何人か倒れているけど気にしないぜ？

オレは。

「じゃあ切って」

「は？　そんなくらい自分でやれよ」

「僕は病人なんだから」

オレが言い返そうとした時、病室のドアが開いた。

「やあ」

「ヒバリさん!! 風間さんもう!!?」

沢田だ。

「ウルサ…」

「ごっごめんなさい！」

ヒバリさんは何で病院にいるんですか？」

「カゼをこじらせてね。」

退屈しのぎにゲームをしてたんだが、みんな弱くて…」

「んな——!!!!」

それが普通の反応なんだろうな。

沢田にとっては。

（普通の人の反応です）

「相部屋になった人にはゲームに参加してもらってるんだよ。」

ルールは簡単だ。僕が寝ている間に物音をたてたら、咬み殺す」

「一方的——っ！！？」

「ってか病院じゃありえない状況だ——！！！」

ボコッ。

「いふっ」

「だから、ウルサイ」

あまりにウルサイから、腹パンチ一発したんだ。

「あ、あの僕、もうすっかりよくなったんで、たっ…退院します！」

「だめだよ医師の許可がなくちゃ」

「!!?」

「やあ院長」

「お、院長じゃねーか」

「えゝ。いんちよー!!?」

…やっぱ沢田はウザい。

ウルサイのが分らないのか？

「こうして安心して病院を運営できるのもヒバリ君と風間さんのおかげ。

生贄でもなんでもなんなりとお申しつけください」

ペコーツ。

…オレって何かした？

ああ、よく病院の周りにいる不良をボコってるからか…。

「じゃあそろそろ寝るよ。南は皮剥いておいてね。

ちなみに僕は葉が落ちる音でも目を覚ますから」

「なっ」

「ハア…分かったよ」

「では失礼します」

「えっ。うそ！！ゲームスタート！？」

恭弥が寝たらスタートだぜ？

そしてまたドアが開く。

ガキが二人現れた。

消えろよ…。

「ガハ…んむむ」

…恭弥起きないよな…？

オレも咬み殺すとか言われないよな…？

沢田がアホ牛を連れて出て行った。

…ヤケにイーピンと目が合うんだけど…。

イーピンって、恭弥に惚れるハズだよな…？

しかも、外見男だけど女だし…。

ドコオン…。

…恭弥…起きるなよ…。

ん？ 沢田の声が…。

「ヒバリさんか風間さんに惚れてる——！！」

…オレを選択肢に入れるな。

ドオオン…。

パラパラ。

「……」

「あ、恭弥起きた？ 沢田が何か爆破させたらしい」

「じゃあ約束通り咬み殺してあげないとね」

…オレはセーフだな。

「わっヒバリさん起きちゃったよ——！！ぎゃ——！！！！」

ガツン。

「ふぁーあ…沢田綱吉もダメだったね。」

南、できた？」

「おう、ホレ」

オレが渡したのは、パイナップルをそのまま6つに切ったやつ。

ん？パイナップルってこれでいいんだろ？

…廊下でぶっ倒れている沢田は無視でいいか。

「じゃあ帰っていいか？」

ずっと病院にいるのもイヤだし。

「……ねえ、これで食べれると思ってるの？」

「さあ。食おうと思えば食えるだろ」

「…パイナップルの缶詰、食べたことないの？」

缶詰え？

「さあ？多分あるけど…。それが何？」

「どんな形分かる？」

「えーっとな…。輪の形だ」

「そう。だからその形に切ってよ」

えー…めんど。

「今、めんどって思ったでしょ」

「…よく分かったな…」

「それにさ…君、料理できないでしょ」

「ん、そのとおり！オレは単純なものしか作らないし、作れないさ

「飯はコンビニで買ってるしな」

一人暮らしするなら料理できなきゃダメかもしれないけど、オレには必要ない。

24時間営業のコンビニがあるから。

「あ、パイナップルはもう諦めたから。自力でやるか、院長に頼んでくれ」

「…もういいよ。君に頼むと僕に被害が及ぶからね」

…なんか酷いなー。

「じゃ、オレ帰るわ。早く退院しろよ」

「君に言われなくてもそのつもりだよ」

そして家に帰った。

恭弥が退院して大変な事件が起こる事を知らずに――

Episode 17 雲のお見舞いで10年後雷に会う! (後書き)

はい、南は料理ができません。

これは南の性格のモデル? 見本? である私ができないからです。同じように単純なものならできますが…。

さすがにパイナップルを6つに切っただけで食べませんよ! ?
ってか食べれませんし。

南の食生活はコンビニによって支えられています。

では、また次回〜!

Episode 18 命を狙われる！

恭弥が昨日退院した。

そして風紀委員で今日の朝、校門に集まって祝福しようと計画をしていた。

ああ、オレ以外の風紀委員は実行したみたいだ。

でもな、恭弥は群れが嫌いなんだぜ？

案の定、ボコられてた。

オレは屋上からその様子を見た。

カワイソー。

でも、自業自得だぜ？

そして恭弥が行くであろう、応接室に向かった。

「退院おめでとーう」

「見事な棒読みだね」

「ま、気にすんなよっ！」

「ハア…」

ま、今まで通りの会話だな。

そりゃそつか。

あゝ、今日から大変な日々が…。

ドカァァン…。

「「……」」

応接室の前の廊下が爆発♪

「あのさ…さっきもオレの近くで爆発音したんだよな…。命狙われてんのかな…」

さっき屋上から降りる時、入り口でも爆発したし…。

「ワオ。良かったね」

「アホ!! 良くないわ!」

「でも南なら返り討ちにできるでしょ」

「まあ…」

ここで、この話は終わった。

数日後の応接室――――。

「で、何かわかった？」

草壁さんが来ている。

ん？オレはソファでゴロゴロしてるぜ？

「はい……。爆発物のくわしい正体は不明です。

強い異臭以外、残っているものがほとんどないためで……」

「ふうん……」

「爆発物をしかけた犯人についても、いまのところ手がかりはつか

めていません。

その手段や動機についても不明です」

「不明ばかりだね。

……報告は、それだけ？」

「いえ。あと、もう一つだけ」

「何？」

草壁さん…恭弥の機嫌を悪くさせるのだけは止めてくれ。

オレに被害が及ぶ。

「実は……これは確実とは言い切れないのですが……。

爆発がおこった場所に、共通点と思われるものがあります」

最近、並中で謎の連続爆発事件が起こっていたのだ。

まー原因は沢田達だと思うけど。

「風間さん、爆発が全てあなたの近くで起こっているんです」

「は？オレ！？」

…まあ、確かに最近はおれの周りで爆発音よく聞くよ？

でも…ねえ……。

「はい…もちろん、確実とは言えませんが」

「なんだ、南のせいだったんだ」

「オレのせいでは無い！」

だってオレが悪いわけじゃないし！

オレの周りで爆発させてる誰かが悪いんだし！

「報告は以上です。失礼しました」

草壁さんはどこかに行った。

「…オレ、なんで狙われてるんだろ…」

「知らないよ。まあ、このままだと並中が破壊されるから僕も手伝ってあげるよ」

「マジで！？サンキュー！」

これでオレが死ぬ確率が低くなったというワケだなっ！！

よしよし…。

「じゃ、オレは教室行くわ。じゃな」

「一応気をつけなよ」

「分かってるって」

…さすがに教室まで来ないだろう…。

ガラガラ〜。

ま、普通に授業中だ。

ドカアアン!!

「…またかよ…」

今度は教室前の廊下。

でも爆発が小規模だったからセーフ…。

大規模だったらオレ死んでたな。

あー、コワイコワイ♪

「南、またってどーゆーことだよ!？」

隼人が食いつく。

「最近並中で爆発音が多いだろ？それが全部オレの周りで起きてるんだ…。」

あ、草壁さん」

草壁さんが早速来た。

「大丈夫でしたか？」

「まあな…ってか何でオレが狙われなきゃいけないんだよ…。」

ああ、しばらく家にこもろっかな…。

でもそれは辞めよ。

「我々が事件は解明致しますので、ご安心を」

「ああ。絶対犯人ボコる…」

シーン…。

オレが殺気を放ったせいで教室中が静まり返った。

「んじゃ、こここの処理は頼んだぜ？」

「はい」

草壁さんに任せて授業という名のお昼寝タイムだ。

ああ、平穏な毎日が欲しい…。

しかしその願いは叶わず、ある日――――。

「まさかココまでやるとはな…」

オレは応接室前の廊下に、ガスマスクをして立っていた。

「応接室のオレ専用ソファーの前に毒料理、か…」

誰カリボーンのキャラで毒料理使う奴いたっけな！。

あ、隼人の義姉のビアンキがポイズンクッキング使ってるな。

確かにアレとビアンキのポイズンクッキングは似てるけど…。

なんか雑な気がするんだよな！。

雑ならビアンキのではないだろう。

「風間さん！」

「お、草壁さん」

草壁がこっちに走ってきた。

「ご無事でしたか…」

「まあな…オレの代わりに何人かやられたけど」

「爆弾に引き続き毒とは…」

ビアンキでは無い者がポイズンクッキングを使うってことは、ビアンキの関係者か…？

「この事を委員長には…」

「恭弥にはもう連絡した。

アイツ、殺^やる気マンマンだったから、この件に恭弥は首出さないように言っておいた」

「な！？い、いいんですか！？」

「何が？　つかそうしないとオレが殺される…」

こないだも『君のせいだね…』とか言っただけで殴られそうになった。

もちろんトンファーで…。

「そう、ですか…。風間さん、この毒で一つ分かりました」

「ああ、オレも分かってる。狙いは…確実にオレだ」

あゝあ…。

なんでこんな平凡なオレが狙われる身に…。

「犯人分かったら…。絶対に殺してやる！！オレの楽しみを奪いやがって！！！！」

殺気溢れ出てきて、草壁さん達ビツクリしてたね。

アハハハハ…。

さらに数日後――――。

「風間さん!!」

屋上でのほほん、としてたら草壁さんが来た。

「犯人分かったか？」

「それはまだですが、有力な情報を得ました」

「じゃあ言わなくていいや」

「へ？」

「オレも爆発の正体とか分かってるから。草壁さんは犯人探して来て」

どうせ、爆発はイーピンかアホ牛だ。

毒は…分かんないけど。

問題は、それを行った犯人。

「分かりました。あと、この前も言いましたが…」

「さん付けは辞めてくれって？」

「はい…」

あゝ、なんかこの前言われたんだよ…。

『立場的にも風間さんの方が上なので、さん付けはしないでください』って。

「分かった、分かった…。じゃあこれからはさん付け辞めるよ」

「ありがとうございます。それでは」

あー…。

オレはとうとう、風紀委員のナンバー2になってしまった。

まだオレが草壁のことを『草壁さん』って呼んでたからオレ的には誤魔化せてたんだけどなー。

まあ、過ぎてしまったことは仕方がない、か…。

そして、眠くなったらから昼寝をすることにした。

ドオオン…。

「また爆発か…。今回は遠いな…」

オレ狙いなハズだよな？

不思議だ…。

「ま、応接室行こ」

オレは応接室が学校内で一番落ち着く場所になった。

プルルルルルル…。

「ん…もしもし？」

『南、草壁から聞いたんだけど、犯人は草食動物の所のイーピンって子供らしいよ。』

それで、草壁達は返り討ちに合ったらしい』

おー、恭弥か…。

「ガキ？なんでオレがそんなヤツに狙われなきゃいけないんだよ…。
ってか返り討ちって…」

『知らないよ。それじゃあね』

プツッ。

「おい…。ま、犯人はイーピンか…」

さて、どう殺してやろうか…。

その時、屋上のドアが開いて風紀委員が一人入ってきた。

「風間さん！犯人が…犯人が来ました！！」

もう！？

ま、構わないけどよ…。

「オマエは消えてろ」

「ハッハイイ！」

風紀委員はオレの言った通り、校舎内に消えた。

コツ、コツ、と階段を上る音が聞こえる。

ギイイ…。

ドアが開く。

「…何でオマエがここにいるんだ？

チビちゃん」

いたのは、イーピンではなくリボーン^{チビちゃん}だった。

「オレが犯人だからだぞ」

「嘘なのは分かってる。犯人は…」

ズガンッ。

ガキイン！

リボーンチビちゃんが銃を撃ってきた。

それを刀で防いだ。

「何のつもりだ」

「犯人は、オレだ」

頑かたくな言う。

「あのな…無駄だって言ってるだよ」

「理由だってあるぞ？オマエが強いが見極めるためだ。弱いとマフ
イアになれねーからな」

「何言っただよ…。それに、オレはマフィアになるつもりは無い」

「…」

ようやく黙ったか…。

「オマエに何を言ってもダメなのは分かった。だから、このことは
オレに貸し一つで終わりにしろ」

「……分かった。一つ聞かせろ。何でオマエはアイツを庇^{かば}う」

すると、リボ^{チビちゃん}ーンはオレに背を向け、帽子のつばを下げながら言っ
た。

「女にはやさしくするもんだ……。マフィアってのはな」

それだけ言って屋上から姿を消した。

「…ってか、オレも一応女だけどな…」

ポツリ、と呟いた。

Episode 19 お正月!

あけましておめでとうございます。

あっという間に新年だな。

もう三日過ぎたけど。

…でもさ、まだ正月だよな？

三日過ぎただけじゃ正月は終わらないよな？

……なのになぜ、オレはこんな場所にいるんだろう…。

「なあ、ホントになんで？」

「知らないよ」

「いや、オマエが呼び出したんだからな！？コノヤロウ」

そう、恭弥に呼び出されて応接室にいる。

新年早々忙しい…。

あー、最近凧と会えてない…電話はしてるけど。

「んで、わざわざ正月に何？」

「仕事だよ。本来なら無いんだけど、君はいつもサボってるから。まだ数回しか仕事してないからね」

んーと、二学期始まった時と、体育祭と…ああ、沢田が殺した騒動の時か。

あと…根津のも一応仕事だな。オレが楽しんだだけだけど。

「でもさ、いくらなんでも新年は…」

「反論できるくらい仕事してれば良かったんだよ」

…理不尽だ。

「へいへい、わかりやしたよ。仕事は見回りでいいな？つかそれ以外なら断固拒否！」

「ハア…仕方ないからいいよ。報告は電話でいいから」

あ、電話でいいものなんだ…。

「んじゃな」

オレは並中を出て、バイクに乗った。

さて、どこ行こうかなー。

沢田達は何かしらやってんだろー？

めんどいのにには関わりたくねーしなー。

…河原の方なら大丈夫かな？

うん、きっと平気だ………多分。

そのままバイクで川へ向かう。

警察がたまにオレを見るが、学ラン着てるから何も言われない。

やっぱり便利だな…。

オレは60キロは出してバイクに乗っている。

そんな奴を許す程、恭弥が怖いのか…。

ああ、そうそう。

オレはもっと仕事してたわ。

よく風紀を乱している人を見つけるけど、ストレス発散のために、かなりボコボコにするし。

それは並盛のほぼ全体に起こってて、今は伝わってるらしいな。

だから恐れられている並中の風紀委員は、委員長の恭弥と特別委員のオレって噂も聞くが…。

ま、気のせいだろ。

「ん…アレは？」

川沿いをバイクで走っていると、何人かの集団が見える。

キキイイイ。

近くでバイクを止める。

うげ…。

沢田達だ……。

「!? 南?

あ、そうだ。明けましておめでとう」

「おお隼人! おめでとうー。

…何やってんだ?」

ま、沢田もいるなら隼人もいるよな。

他にいるのは、リボーン^{チビちゃん}、隼人、沢田、山本、笹川兄妹、三浦ハル、ランボ^{牛ガキ}、イーピン、キャバツローネの奴ら…。

そんで、あの女…。

「ボンゴレ式ファミリー対抗正月合戦だ」

なんじゃそら…。

「風間、オマエも入るか？」

「断る。どうせ入ったら『これからファミリーの一員だぞ』とか言うだろう？

それに何よりメンドイ」

まあ、誘ったのはリボンだ。チビちゃん

「バレてたか。んで、何でここにいるんだ？」

「見回り。オマエらが何か風紀を乱すようなことしたら、オレがすぐにストレス発散させてもらうからな」

ストレス発散…。

最近しょっちゅうしてるんだけど、溜まるんだよ…。

「わかったぞ。さあどんどんいくぞ」

今は羽根つきをしていたらしい。

でも百人一首、福笑い、たこあげ、すごろく…。

残念な結果だな…。

「あ——、どーしょー！

このままじゃ1億円借金だ——！！一生借金地獄だ——！！」

ウルサイなあ…。

もし本当に10代目になったら一億なんて余裕だろ…。

ボンゴレってデカイし。

「考えてみたらちょっとシビアすぎるな。」

大人対子供だ。少しハンデをやってもいいぜ」

「ん」

「ディーノさん」

キャバッローネのボスは優しいヤツなんだな———。

ま、どーでもいいけど———。

…問題起こしてくれたらいいのに…。

ストレス発散できるから。

なんてことを考えてたら、もちを作り始めた。

「うっわ…。隼人超笑顔だ…。山本と一緒にいるのに…。

写メっところ」

カシャッ。

「…ぷっ。後で隼人に見してやろう…」

オレが隼人いじりを考えてたら、笛が鳴った。

「まずはキャバッローネのアンコロもちだ」

「とりあえずつくってはみたが…。

オレ達の知識じゃあこれが限界だ」

出したのは、ボロ——…、とした、もちみtainモノ。

「…まずそ…」

オレが思った通り、『パサパサしてまずいな』らしい。

ってかよく食ったな…。

「次、ボンゴレだぞ」

「うん。これ。」

な！ポイズンクッキング——！！！？」

確かにポイズンクッキングだ。

ビアンキがいるし。

隼人：なんか可哀想だからいじるのは辞めてやるよ…。

写真は残すけど。

そしてリボーン^{チビちゃん}が凄まじいほど寝て、沢田とディーノが逃走して終わった。

ま、逃げるよな…あれは。

「問題ナシだな。帰ろつと」

何も壊していないから問題ナシ。

これがオレの基準。

まあ、コイツらに対しての基準な。

オレはバイクに乗り、家に帰る。

「さて…と、報告するか…」

ガチャ、と家の鍵を開ける。

すると、見慣れたけど家にあるはずがないモノが。

「……なんで？」

頭の中では分かってるよ？

認めたくないんだ。

ダイニングへのドアを開ける。

「何でいるのかな？ 報告は電話じゃなかったかい？」

恭弥だよ。

玄関にあったのは、靴だ。

「報告が遅かったからね」

そうなのか？

電話で報告：つか見回り自体が初めてだから、どんくらいで報告すりゃいいのか分らん。

「なら電話すりゃよくね？ わざわざ家にいなくても…。

って、あ！ どうやって入ったんだよ！」

鍵は三つあるが、一つは家。

一つは携帯し、一つは本来なら管理人だが、オレがそれを奪い、家の中。

管理人も、納得したから新しく作るなんてしない。

なら…？

「専門家に作らせたんだよ」

右手に鍵を持ちながら言う。

確かにオレの鍵と同じ形だな。

「…わかった…。扉壊さないでくれるならいいよ…」

壊されると、わざわざ十雅呼ばなきゃいけないって面倒なんだよ。

そーいや十雅とも最近会ってねーな。

「ワオ。南が認めるとは思わなかったよ。」

まあいいや。もう扉は壊さないであげるよ」

「そりゃどーも」

恭弥は常に上から目線で言うけど、慣れてしまったから対抗はしない。

対抗したって、損するだけだし。

あゝ、そういえばまだ1回も本気で戦ってないな。

戦いたくないけど。

「報告は？」

「問題ナシ。沢田達が遊んでいたのを見ただけ。

あ、何も壊してなかったぜ」

「そう」

聞くだけ聞いて、テレビを付けた。

「……帰らないのか？」

「今日は疲れたからね。」

早く何か作……なくていいや。コンビニでいいから買ってきて」

「はい？」

ああ、作って、と言おうとしてたな？

でも病院でのこと思い出したみたいだな。

「だから、今日ここに泊まってくんだよ。」

早く何か買ってきて」

「…自分で行けよ…」

「僕は客だよ？」

「こんな客がいてたまるか。招待すらしてねーし」

でも、どうせ何言ったって無駄なんだよな…。

「ま、いいや。買ってくる」

それに、どうせオレは飯買いに行く予定だったしな。

コンビニでは、普通のお弁当を買った。

恭弥は一泊して、次の日の朝、オレが起きた時にはいなかった。

忙しいんだなー。手伝わないけど。

「…さて、この一年はどんな一年になるかね…」

雪が降り出した空を見上げて、そっと呟いた。

———このときは忘れていた。

この年は、オレの人生を大きく変えるかもしれない出来事があることを———。

Episode 20 適応者!

「ふぁゝぁ…眠い…」

今日も疲れたー。

な、特に何もしないでウロウロしてただけだけど。

最近…つか12月頃から、制服に私服がプラスされた。

元々Yシャツの中にTシャツ着てたけど、今は寒いからYシャツの上にパーカー着て、それで学ラン。

結構温かいんだぜ♪

あー…恭弥からは最初は怒られたけど、無視し続けてたら何も言わ

なくなった。

プルルルルルル…。

「電話…？ 隼人じゃん」

ピッ。

「もしもし。どうかしたか？」

『オレさ…やっぱ一人が向いてんのかな…』

は？ 何突然…。

「何でそう思うんだよ。 ってか何でオレに聞くんだ？」

『周りから見たらどうなんだって思ったんだよ…。』

今日リボンさんが直接指導してくれたんだけどよ…上手く行か

なくて10代目にまで迷惑かけて…』

へーえ？

でもそれは、いつものことだと思うのはオレだけ？

「それで理由は全部か？」

『…それで、山本が来た時に…』

あー、なるほどな…。

「沢田が頼りにしてるのが、隼人より山本だっと思ったのか？」

『…ああ』

隼人って馬鹿だな…。

「確かに、そうかもしれないな…。

でも沢田は少なくとも隼人のことを、大切な友達だとは思ってる
だろ」

『…!』

頼ってる、なんて無責任なこと、オレは言えない。

でも、沢田が隼人のことを大切な友達だと思ってるのは言える。

『南から見て…そう思えるか…?』

「ああ。それに隼人がいないと沢田も寂しいと思うぜ？

どうせ今、沢田のそこから出てきたんだろ？早く行きな」

『南…ありがとな!』

プツ。

電話が切れた。

「隼人のやつ…突然どーしたんだろ……ま、悩みは解決したみたいだし、気にしなくていいか」

そう呟いて、家の鍵を開けた時。

『南！』

脳内に声が響いた。

「家の中に入ったら、出て来い」

ボタン、と扉を閉めるのと同時に十雅が現れた。

「今日は何の用？」

「出来たんだよ！千本が！」

千本、毒千本、痺れ千本、解毒剤。

「早かったな」

「まあまあ頑張ったからなっ！」

使うかもしれないのは黒曜からだし、セーフだな。

そして、こないだ買ったポーチに千本を入れる。

三種類全部入れてもまだ余裕がある。

小型パソコンとかも入るし、ピッタリだ。

「さて、明日から練習するか…。

十雅、もう帰っていいぜ」

「…もう一つ、話がある…」

少し低めの声で言ってきた。

「…何だ？」

「山下の…正体があった」

「!!」

アイツの正体か…。

「で、何者だったんだ？」

「その前に…少し話をさせてくれ」

アイツの正体に関係あるのか…？

「わかった」

「長くなるから、座って話そう」

ダイニングに向かい、向かい合わせになっているソファ―に座った。

オレと十雅が座ると同時に、十雅は口を開いた。

「まず、オレのことを“神”という…これは分かるな？」

「信じてなんかねーけど、わかるぜ」

「…まあ、話を続ける」

お、もう反論してこないな。

「で。オレが住む世界を“神界”^{しんかい}という。これは神1人とその下に使える“天使”100人の世界だ。

もちろん“神界”以外にも世界がある。まずは“神界”と似ている世界、“魔界”^{まかい}だ。

この世界もトップは一人で、“閻魔”^{えんま}。その下には同じく100人、“悪魔”が使えているが…“閻魔”も“悪魔”も、悪い奴ではない。ただ見た目が怖くて、心を鬼にただけだ。根は優しい。

一般に地獄、と呼ばれる場所が“魔界”で、天国と呼ばれる場所が“神界”だ。

死んだ人間が悪事を働かせてたら“魔界”にてその分の倍の刑を受け、“神界”に送られて再び人間になる。

たった一つ、思い出を残してな…」

「思い出？」

「ああ。生まれつき○○が好き、とかあるだろ？あれが“思い出”だ。

ちなみに、送られてきた人間は“神界”や“魔界”では生きられないから、ノーカウントだ。

話を戻す。もう一つ、世界がある。それが今いるこの世界…命ある者が生きる世界、“生命界”^{せいめいかい}だ。

オレ達には命はないが、この世界の者には命がある。人間、動物、植物…これらが全て、“生命界”に生きる者だ。

ただ、この“生命界”に住む者はいない。“神界”なら永遠に“神”と“天使”が住んでいるが、“生命界”は巡り続ける。

だから“神”と“閻魔”が“生命界”を守っているんだが、これは別に関係ないな…」

ハハハ、と十雅は苦笑した。

きつとコイツは、巡る命が欲しいんだ…。

永遠に生きる、という言葉は一見良さそうに思えるが、つらかった

り、悲しかったりする思い出が溜まっていく。

喜びもあるだろうが、パツ、と思いつくのは後悔などの負の感情の方が多しな…。

決して巡ることの無い命…。

「……南、聞いてるか？」

「ん？ ああ、聞いてるぜ。話、続けてくれ」

オレの返事を聞くと、十雅は少し下を向いて話し出した。

「普通はこの3つの“三世界”さんせかいで成り立っているだけど…。

数千年前、新たに“世界”ができてしまった…。

“異端者が暮らす世界”の…“異端界”ヘレンだ」

『ヘレシー』：英語で『異端』、か。

「この世界は“三世界”に不干渉だったんだが、ある日突然、干渉してきた…。

オレ達の“神界”にな。だが、アイツらは自分達の情報を一切伝えずに干渉しようとした。

『オレ達の世界…“異端界”も“三世界”に加え、“四世界”にしてくれ』、とな…。

オレ達は断った。だが、向こうは引かなかった…。

…そして……………」

十雅の拳に力がこもっているのが分かる。

「……当時の“神界”のトップ…“神”を殺した…」

「……！」

まさか…殺すまでするとは…。

「ってあれ…？命ってないんじゃない…？」

「…そう、無い……だから、存在を消したんだ…」

存在を…？

「だからオレ達の記憶から当時の“神”のことは消えてしまった…。

たった一人、オレを除いてな」

「？何で十雅は覚えてるんだよ」

「その殺された“神”の後任がオレになったんだ…。だから、オレは覚えている…。

更に、その時の“神”はオレのアニキだったしな…」

十雅はポケットに手を伸ばし、一枚の紙を渡した。

でも、見ても真っ白。

「何？これ…」

「それは写真だ…その写真にはオレのアニキ…零^{ゼロ}が写っていた。まあ、零のことを覚えている奴しか見えねーけど。

零は“閻魔”の親友でな…二人で“三世界”を作ったんだ。

ああ、世界を創った者同士だったから“閻魔”…烈華^{れっか}も零のことを覚えてる」

「烈華って…女？」

名前に『華』があるから女っぽいけど…。

「ん？ああ女の人だ…怖いけどな…」

ま、“閻魔”だしな…。

「で、“異端界”の者はアニキを消して満足したのか…。

それ以来、名前すら聞かなくなった……つい、この前までは」

「!?!」

なるほど…よく分かったぜ…。

つまり――――。

「あの女は、“異端界”によって送られた」

「そうだ。

あの女は“生命界”に住んでいた普通の人間だったんだが、“生命界”と“異端界”の2つに暮らす者になった。

まあ、“生命界”に暮らしているから“命”はあるから殺せるがな。

でも“異端界”の者だからオレらは干渉できない」

なんだよ…じゃあ一切手出しできねーじゃん。

「干渉できるのは“生命界”にいる者だけだ。まあ、オレは普通の人間なら間違っただけで殺せるんだけどな」

イライラ…。

思い出して、ムカついてきました♪

「あ…悪い…。

sonでさ、南には色々悪いんだけど、“神界”と“魔界”に関わる人間になってくんね？

“神界”や“魔界”の者にならなくて大丈夫だから、関わりだけ。

今の南じゃ“異端界”の者に何もできないけど、関わりが出来れば“異端界”の者に干渉できるし」

…そうなれば、あの女を殺せる…？

「アイツを殺すことができるようになるなら、喜んで関わりをもつぜ」

「サンキュー！！じゃあ、“コレ”と“コレ”に触れてくれ」

出されたのは、真っ白な水晶に、真っ黒な水晶。

まあ、白が“神界”で黒が“魔界”だろう。

「おう…。

って、何だあ！？」

触れた途端、光り出したのだ。

「…やっぱ南が“適応者”だったな…。

まあ、これで“関わり”ができたからな」

「…“適応者”って？」

「あー、“関わり”を持つことのできる人間。世界にたった一人だけ、ソイツが死んだら、誰か別の者になる。

ま、南かどうか確信は無かったけど多分そうだろうと思ってたから」

…どんな理由だよ…。

「あ、オレだってテキトーな気持ちで南だと思ったんじゃないぜ？
一応記録見て、名前は書いてなかったけど南にピッタリだったから」

あーはいはい。

便利ですねー。記録って。

「で、もう少し話いいか？」

まだあんのか…。

もう疲れた…。

「……しゃーねえ…少しにしてくれればいいぜ」

「サンキュ。“異端界”と、山下咲の狙いが分かった」

「!！」

狙い…？

「まず、“異端界”。

コイツらは山下咲を使って世界を手に入れることが目的だそーだ。

山下咲が“適応者”ならすぐだったんだが…それは南のことだったからな。

だからこれから南が“異端界”に狙われるかもしれないねえけど…」

「…それ、言っていないよな？」

「あ……………って南！！真っ黒な笑み浮かべないで！！怖いから！！その持ち上げた手を下ろして！！」

……ハア、仕方無い…。

「…でも、聞いててもオレは断らなかったからいい…早く話せ」

「お、おう…。

で、どーゆーわけか、“異端界”の者が“適応者”を殺せば、殺した奴が“適応者”になれるらしいんだよ。

ま、理由はアイツらが持つてる特殊な力を使ったんだらうけどな」

「力？」

「ああ。オレ達にも力がある。“神”なら命を吹き込む力、“閻魔”なら罪を浄化する力…。

“異端界”って言われるくらいだから、特殊な力があんだろ」

あー、確かにありそーだな。

つつかさ、命狙われるなんて聞いてないよ？

まあいいけど…。

「で、山下咲の狙い…」

何だ…？

アイツの狙いは…。

「アイツはな……“異端界”の者と利害が一致したから手を組んでるらしい。

なんでも“異端界”の主ぬしに救われたらしくてな。

で、アイツ自身もリボーンが好きらしいしな。

それで偶然にも南が送られた世界がリボーンの世界だから、来たっつーことらしい。

あ、でも前世で死んではない。そのまま転送……トリップしたんだ」

「へー……じゃあただ単に、恩を返すのと、リボーンの世界に来たかったっつーこと？」

「ま、そーゆーわけらしい……」

なんだ……もっと悪いこと考えてんのかと思ってたのに……。

「これで話は終わりだ。悪かったな……長くなって」

「別にいい。オレも知りたかったことだったからな」

でも疲れたけど。

「そんじゃな」

「おう…」

フッ…。

十雅は一瞬で消え、そこには一枚の紙が残されていた。

十雅の兄…零が写っていたはずの写真だ。

拾って、もう一度見る。

「!?!? 写真が…見える!?!?」

そこには、十雅よりも少し大人っぽい顔つきの男…。

でも十雅と似ている。

髪の色、目の色…。

どちらも十雅と同じだ。

「……これが…零…十雅のアニキ、か…」

どうせ十雅はオレが机の上に置いた写真を持っていき忘れてたんだ…。

写真をピッタリサイズの袋に入れ、再び机の上に置いた。

「オレは…なんでこの世界にいるんだろうな…」

オレ自身のことなのに、ふと疑問に思った。

答えは、いつ出るのだろうか…。

S t r a o r d i n a r i a m e n t e 3 オレンジ親子に会う！

南は今、再びイタリアに来ていた。

そしてまたもや『暇つぶし』で。

今回は十雅を脅して金を貰い、その金で来た。

「んー、久しぶりのイタリア！！」

夏休みに二回目のV A R I Aに行った時以来だ。

もちろん、今も手ぶらだ。

腰にポーチがあるが、それだけ。

日帰りで帰る、というノープランな状況で来ることができるのは南だけだろう。

「今回はどこ行こうかな…前みたいに『テキトーに行ったらマフィアでした』は嫌だし…。」

ん、今回は人通りが多い道を進もう!!」

それはつまり、行き当たりばったり、ということだ。

「っと、その前に飯だ、飯」

視界に入っている店に入る。

とりあえず一番人気のピザを頼み、食べる。

「んー、さすがはイタリア。日本のとは違うな」

そう言った時だった。

「相席あいせきいかしら？」

日本語だ、と思って顔を上げた。

優しそうな大人の女性で、首からはおしゃぶりが下げられている。

南はこのおしゃぶりである人物が浮かび上がったが、その動揺は顔には出さなかった。

相席、という言葉に疑問に思っ、て周りを見渡すと、店内は満席状態。

「いいッスよ。日本人…ではないですよね？」

「ええ。私は日本人じゃないわ。日本語は勉強したの」

「へー。オレは風間南っていいいます」

「私はアリア。それと、もう1人いいかしら？」

アリアが目をやった先からは、ピザを持ってこちらに来る女の子。

「あの子ですか？」

「ええ。ユニ！ここ、相席で良いって！」

ユニ、と呼ばれた少女はアリアの声を聞き、足を速めた。

「ありがとうございます！私はユニ、といいます」

「（未来編の時よりかは幼いな…）ユニ、な。オレは風間南！」

南は、この二人が誰か分かっていた。

未来編で初めて出てくるオレンジ色のおしゃぶりを持ったユニ。

そして、10年後では亡くなってしまっているユニの母、アリア。

決定打となったのは五弁花のマークと、アリアが持っているオレンジ色のおしゃぶりで。

「悪いわねー、南君。相席してもらって」

アリアがそう言いながら椅子に座る。

「相席は気にしないでいいって。あの…さ。オレ一応女だぜ？」

「「…え…」？」

二人の声が重なり、動きも止まった。

ユニもアリアも、南が男だと思っていたようだ。

「ああ、謝ったりはしないでいいからな？毎回のことだから慣れたし」

まだ動きが止まっている二人に言う。

「…いや、それでもごめんなさいね」

「ごめんなさい…」

「だから、謝ることねーんだって。ま、これからは呼び捨てでいいからな。んじゃ、食おうぜ」

南はそう言いながらピザを食べ始めた。

そして南を見て、アリアとユニも食事を始めた。

「ねえ、南。あなたはイタリアに旅行に来たのよね？」

「んー？…ま、そーかな」

実際は暇つぶしなのだが、旅行と言っても変わらない。

「なら…どうして手ぶらなの…？」

そう、今の南は完全に手ぶらだ。

財布や携帯もポーチに入れているため、何も持っていない。

「だって、日帰りで来たから。元から暇つぶしのためだったし？」

当然だ、と言わんばかりの顔をして、アリアに返事をした。

「…わざわざ日本からイタリアに、暇つぶし…？」

「ああ。そーだけど？」

「……そう」

アリアはそれだけ返事をして、食事を再開した。

「んー。ウマかったな！」

南とアリア、ユニは店から出た。

話しながらゆっくり食事をし、おまけにデザートなども食べたので、もう時間は結構経っていた。

「そうね。南、改めてありがとう。一緒に食事ができて楽しかったわ」

「私もすごく楽しかったです。日本ジャッポーネの話とか、初めて聞くものばかりでした」

「オレの方こそ、ありがとう。ユニがそんなに喜んでくれたなら、オレも話した甲斐かいがあるよ。

それに久しぶりに『家族』って感じがわかって、懐かしかったしな」

そう、南には家族がない。

そんな中、アリアとユニと出会って『家族』というものが改めて感

じられた。

二人を見ていると『家族』、『親子』というものが理解できて、それが何となく嬉しく、楽しかったのだ。

「南…あなた、もしかして……」

アリアとユニは気まずそうな表情をした。

今の南の言葉で、南に家族がないことが分かったのだ。

「別に気にしなくていいぜ。オレはもう、かれこれ五年くらい一人で暮らしてるからな。」

それに今は………」

南は顔を少し上にあげて、続きを言った。

「今は、大事な仲間が…友達がいるから…な」

そう言う南の表情は、今まで見たことも無いくらい優しい表情だった。

南の表情につられてか、アリアとユニも優しい表情になった。

「ねえ、南さえよければ私達が家族になるわよ？」

「へ？」

突然のアリアの言葉に、素っ頓狂^{すっどんきょう}な声をあげる。

「私も大歓迎ですよ！」

アリアだけではなく、ユニも言った。

「え、いや…でも、それは…さ」

突然過ぎるアリアの言葉に、動揺する。

「家族だからって何も束縛されたりはしないから大丈夫よ。

ただ、南にとって心の拠り所よりどころの内の一つになってくれば、それでいいの」

「…………でも、オレには……」

今度は下を向いて、口を開いた。

『家族というものが、もう分からない』

小さな声でそう続けた。

その言葉を最後に、しばらくの静寂が三人を包んだ。

「でも、それでいいんじゃないですか？」

静寂を破ったのは、ユニの声。

「ユニ？」

「私も家族、というものがどういうものかは正確には分かりません。血の繋がりは確かにあるけど、そうじゃなくても家族でいいと思うんです。」

「一般的にも、父と母、という親同士は血が繋がってないですから」

ユニは先ほどのように優しい笑顔でそう告げた。

「……………ありがと…な……………」

「それじゃ、南は私達の家族決定ね!!」

「ちょっとアリアさん!?! なんかいきなり話飛んでね!?!」

「えー…じゃあならないの?」

アリアの言葉に、少し考える南。

「…はあ、もういいや。何でも」

「なら決定よ! 敬語はダメだから」

「ん。わかった。ユニもオレには敬語禁止な」

「わ、私ですか!?!」

「だから、敬語禁止」

「……はい…わかった」

少しため息混じりに言っていたが、ユニの表情は嬉しそうだった。

「それじゃあ、私は『南お姉ちゃん』って呼ぶね」

「ん、わかった。あ、でもオレ、アリアさんのことはさん付けで呼ぶから」

「ええ。いいわよ」

アリアが返事をした時だった。

突然、南が何かを思い出したように『あ』と言った。

「ヤベ！そろそろ時間だ…。アリアさん、ユニ、連絡先教えてくね？」

「本当に暇つぶしの旅行ね…。はい、これが私のアドレスと番号。

ユニに連絡取りたい時もこっちによろしくね」

メモされた紙を受け取り、南は空港に足を向けた。

「また来る時は何日かで来なさいよ！そしたら私達の家泊まらせてあげるから！」

「また日本の話聞かせてね！」
ジャッポーネ

「わかった！んじゃ、またな！！」

南はそのまま、空港へと姿を消した。

「…ホント、不思議というか…変わった子だったわね」

「……次会えるのは、いつかな…」

「きつとまた、来るわよ。何せ『暇つぶし』でイタリアへ来るような子なもの」

アリアの答えにユニはふふ、と笑い、飛んでいく一機の飛行機を見つめた。

「まさか、また原作の人間と会うとは…」

南は飛行機の中で、呟いた。

日本にいる時は仕方ない。

自分が住んでいる場所も、同じ並盛町なのだから。

だが、イタリアは広いし、会うことのできる人数も少ない。

「…これからが楽しみになってきたな…」

そう言い残し、南は日本に着くまで眠っていた。

Episode 21 授業参観!

今日は授業参観の日。

もうすぐ授業開始だ。

…でも、一つ心配事。

オレは、一応風紀委員だ。

そんなヤツがクラスにいて、マトモな授業になるか？

…ならないだろう。

そんなところに、リボーンチビちゃんが来たり（沢田の家庭教師だから100%来る）したら？

…想像もしたくなってきた…。

ま、テキトーに過ごすか。

…飽きたら応接室に行こーつと。

キーンコーンカーンコーン…。

「今日は授業参観ということで、みんな緊張していることと思いますが肩の力を抜いていつも通りの姿を見せればいい。

先生もいつも通りミスするからな。

よろしお願いします、父兄の皆様、風間さん」

オレに対しての敬語と他の生徒に対しての言葉でぐっちゃぐちゃになっただけ。

「じゃあこの問題。今日はあえて数学の得意でない生徒からあてていこうかな。

山本いつてみるか？」

そーいや山本って勉強苦手だったよなー…。

「ちえ。いきなりかよーー」

「いつもの汚名返上といってくれ」

…教師の奴、何^{なに}気にヒドイこと言ってるよな…。

「んじゃ1^{二分の一}／2あたりで」

「コラ！またおまえは当てずっぽうで……ん？

いや…正解か」

「イエーイ。ラッキー！」

「いいぞ山本！！」

「いーぞ、武！！今夜は大トロだ！！」

「まったく親父っ」

あれだけで大トロってスゲー家族だな…。

親バカにも程があるぜ…？

「まったく。くだらねーぜ」

「ご…獄寺…私語はつつしまんか…」

「け」

あー、皆に不良って言われてるな。

ま、オレの態度はもっとヒドいぜ？

…聞きたい？

まず、隼人と同じく机の上に足を乗せる。

そして、机の端にはお菓子。

更に学校内の自販機で買ったジュースを飲んでいる。

イヤホンを片耳に付け、曲を流す。

片耳だけにするとか、オレ偉くね？

ん？皆見て見ぬフリしてるからな！

「…そーだな…あつとる。よし次！

山本も今日はがんばったし…山下！」

あ？何かあったのか…？

ああ、隼人が少おし難しい問題解いたのか。

つかよお……あの女に当ててんじゃねえよ!!

イライライライラ…。

おっと、殺気は抑えよう…。

「えっえと…。ええゝ!？」

「落ち着いて考えろ。……………仕方ない…沢田!山下の代わりに問
4!」

…アイツ馬鹿なんだな…。

ってかあんな簡単な問題分かんないのかよ…。

「9!？」

パコーンッ。

「ぎゃっ」

おゝ、ぞうりが…。

てか9…？

その三分の一だ。残念。

「あいたゝ」

「どーした沢田。何だ今の音は？」

「後ろから何かが…。！キモイお婆ちゃんいるー！！」

…
リボーン、チビちゃんやっぱ来たか…。

たまにオレに視線…つか殺気感じるんだよね…。

「沢田どーした？」

「いや…あの…」

「はい！！100兆万です」

「ランボー！！」

…死ね。

ついでにオレを殺そうとしたイーピンもいるし…。

「君は誰の弟君かな？お父さんかお母さんは？」

「ランボさん九九もできるんだよ！」

ニニンがニ！キキンがキ！ケケンがケ！！」

おい、意味不明な九九してんじゃねエよ。

さっさと消えな。

どっ、と笑い声が聞こえる。

「見てて見てて」

フッ。

キュッ。

キュキュ——ッ。

あーあ、黒板消した…。

でもな、それよりイラつくんだよ。

オレはイラつきを抑えるなんて面倒なことはしたくないので、言うことにした。

「…オイ…」

教室内の人間が、一部を除いて真っ青になる。

「なななな何でしょう!!?」

教師が声を発する。

「…このガキ達は何だ？ウルセェんだよ…さっさと追い出さないと、オレが消すぜ…」

「ぐぐぐぐぐめんなさい！！」

教師がド・ゲ・ザ★

教師の土下座見るの二回目だな。

根津の時と、今と。

いきなり沢田が叫んだ。

「あ——！！イーピンが照れて…もう残り三箇所…」

うお！？

また爆発しそうじゃん！

沢田はイーピンを捕まえて廊下に出た。

ドオオン…。

外には大きな花火が…。

「ふー。ギリギリセーフ…」

沢田が戻ってきた。

「沢田、さっきのヤツとコイツはオマエの知り合いだよな…。どっかにやれ」

「えっオレ——！？」

しかし沢田の親が出てくる。

「すいません、うちの子達なんです」

「母さん！！」

ああ、誤解が広まるな…。

「ランボさん京子と遊んでく」

「コラ——！！」

ちょっと母さん、何でチビ達つれてきたんだよ!!」

「さあ…」

「さあって何だよ!？」

わけわか…「私よ」!

「隼人の授業参観についていききたいっていうから」

「ビアンキ!!!!」

ビアンキ登場、つまり…。

「うがつ。ふげ———っ!!」がつ

ああ、ナームー。

「先生大変です!!」

「獄寺君が倒れました!!」

ピクピクしてるし…。

大丈夫か？

「なあ!？」

「獄寺君大丈夫？」

「とにかく保健室に運ぼう」

「私も一緒にしますわ」

ここまではセーフ、だが…。

「私もいくわ。隼人、私がついてるからしっかり」

「ふわっ」

さらに悪化したし…。

「緊急事態ですので一時授業を中断します。

父兄の方、そして風間さんにはご迷惑おかけしますが、各自自習をして待っていてください」

そして、隼人、教師、ビアンキ、沢田母、ランボアホ牛が消えた。

教室はザワザワしている。

「コラー……。静かに……。授業再開するぞー。はい注目」。

オレが代打教師のリボ山だ」

…何やってんだ…？チビちゃんリボーンの奴…。

「父兄の皆さんも、なにとぞヨロシク」

ま、姿は変だけど礼儀正しいから受け入れちゃうよな…。

「えーつと。では、さっきの授業をひきついで、まずはこれ。

わかる奴」

黒板にはぎっしりと問題が書かれた。

んー、答えは $\sqrt{5}$ だなー。

「ちなみにこの問題を解いた奴は、いいマフィアの就職口を紹介するぞ」

…言わないでおこう。

ま、元から答える気なんて無いけど。

「おい！

リボ山だかへボ山だか知らねーけどよ、お前なんか相手にしてらんねーよ！！」

「私語はつつしまんか」

パァン。

おゝ、チヨーク粉碎したねえ。

「ちょっとあんた——！！！うちのオサムちゃんに何するザマス——！！！！」

「お母様落ちついてください」

パン。

母親もやられたな。

「おい、じゃあ解いた奴は紹介ではなく入ってもらうぞ。風間、解け」

…こーなるの、なんか予想できたよ…。

「イヤです。わかりません」

「オマエなら余裕なハズだぞ。『帝王』に通ってたんだからな」

おい、バラしてんじゃねーよ。

「おい、それなら風間さんはあの天才と同一人物か？」

「多分そうよ！さっすが風間さん！かっこいい」

「サイン貰ったこうぜ！」

ひそひそウルサイ…。

「…黙れ」

ピキィッ。

教室がオレの一言で静まった。

「じゃあ風間、答えを言え」

「だから、オレは答える気ねえし」

「分からないってことになるぞ」

「別にどうぞ？勉強なんかに誇りもプライドもないし」

「…チッ」

ようやく諦めたか…。

「はいはい！！うんこ」

…消えろ。

「ペケ」

ピューッ。

ドガン。

「ぐぴゃああっ!!」

アホ牛
ランボ、リタイア。

「アホ牛が…。この問題、見たことが…あります」

「獄寺君!!」

「答は√5だ!!!!」

「おまえはすでにマフィアだろ」

ピューン。

ドガン。

「ぎゃあああっ！！！」

隼人、同じくリタイア。

「獄寺君——！！！」

ランボ！！獄寺君！！大丈夫？」

沢田が二人に駆け寄る。

「おい！やりすぎだぞリボン！！！」

「カチンときたからなカチンと」

「おまえ、そんな理由でなあ！」

ここで、ヒソヒソと声がする。

「やっぱり…」

「やっぱり沢田がらみだったんだ…」

他にも随分言ってるな…。

「じゃー、どーにかしてやれ」

ズガン。

「復活^{リ・ボーン}！！死ぬ気でオレが教える！！」

てめーらこれしきも分かんねーのか！！ぶっとばすぞ！！」

見事な開き直りなこと。

プルルルルルル…。

電話…。

「もしもしー？」

『仕事のできたから応接室来て』

…恭弥か…。

「やだよ」

『君に拒否権はないよ』

「あのな、人間には拒否権くらいあるぞ？」

『そんなの関係ないよ』

「じゃ、逃げるわ」

プツッ。

さて、鬼ごっこ――――

ガラガラッ。

「やあ、逃げられると思ってるのかい？」

――――は、始まりました！。

「逃げ道なら他にもあるさっ！」「待て！！」

…何だよ…」

死ぬ気の沢田が話しかけてきた。

「今はオレの授業中だ！」

「んなこと知るか。じゃな」

窓から逃げられるさ！

ヒュー。

スタツ。

着地成功★

さて、恭弥と沢田は…よし、追いかけてきてねエな。

こうして沢田と恭弥からの逃走を成功させましたとさ。

Episode 2 バレンタインデー！

今日は、南にとってある意味一番嫌いな出来事がある日。

それは、バレンタインデー。

恋する女子が好きな異性に、自分の思いと共にチョコを渡す日だ。

もちろんその他にも、友チョコ、義理チョコ、逆チョコなどがある。

しかし本命チョコは、異性に渡すものだ。

…それなのに、南は前世で…。

朝、下駄箱に溢れているチョコ。

教室でも机の中にパンパンに入っているチョコ。

机の上にも山になっているチョコ。

手渡しで渡されるチョコ多数。

南は女であるのに『本命ですから』と言って渡す者もいた。

しかし、南はそれらを受け取っていない。

直接渡されたのは『いらない』と言って突き返した。

勝手に入れられていたチョコは全て捨てた。

というか、下駄箱なら床に落とし、机の上・中も床にバラまいた。

もちろん、その行動は良くない。

だが、それでもチョコを渡した者は『私のはちゃんと受け取ってもらえたわ』と思い込んでいるのだが…。

南は今日、そのような事態にならないことを祈った。

学校の昇降口。

南の下駄箱だけ、明らかにおかしかった。

まず、何かが溢れている。

いわゆる、チヨコ。

南は一度大きなため息をつき、辺りをキヨロキヨロと見渡す。

風紀委員を探しているのだ。

そして見つけた風紀委員にチョコを処理させようとしている。

すると一人発見した。

「おい」

南が声をかける。

「!?! あ、風間先輩!?!」

「...先輩?」

「あ、我々下っ端は先輩って呼ばさせていただいてるんです!

ところで、何かご用でしょうか?」

ああ、なるほど、と納得し口を開く。

「デカイダンボール箱持って、ついてこい」

「?はい…」

そして数分後。

「持って来ました!」

なかなか大きなダンボールを持ってきた。

「んじゃ、こっち」

さっきの場所に戻る。

「こ…これは…?」

「…多分チョコだ…ここのが集め終わったら、教室までついてこいよ」

「は！！」

テキパキとチョコを綺麗に詰めていく。

南は少し感心していた。

バランス良く積んで、重い物の計算もしながら積んでいるのだから。

「これで全部です」

ダンボールは7分目辺りまで埋まっていた。

「おう。んじゃ、教室だ」

そして1－Aに行く。

ガラガラッ。

「……やっぱな……」

机の上も中も周りもチョコまみれ。

「さっさと頼む」

「はい！」

そしてまたキレイに積んでいく。

そしてここにある三分の一を詰め終わったところで、ダンボールがいっぱいになってしまった。

「すみません、新しく箱を持ってきます」

「…ついでに一箱目を応接室に運んどいて」

「はい」

さすが、風紀委員である。

チョコがパンパンに詰め込まれたダンボールを、ものともせず持ち上げて運んだ。

「南！」

風紀委員がいなくなったところで、隼人が南を呼んだ。

「何だよ…」

「…スゲエ数だな…」

「…………そう…だな…」

ハア、とため息をついて言った。

「前の学校ではどうだったんだ？」

「同じような状況…でもこっちの方が多いかもな…」

「そ、そうか…」

「あ、隼人いるか？」

南が机の上にあるチョコをテキストに取って聞いた。

「あのかな…南に渡してるんだ。それにオレもいい」

「ハア…これだから2月14日は嫌いだよ…」

「まあ仕方ねえよ…。」

おい、さっきのヤツ戻ってきたぜ」

さっきより大きいダンボール箱を持ってきた。

「んじゃ、詰めるの再開して」

はい、と返事をしたが、一人で詰めるのも大変だ。

「あ、あの…風間さん！」

後ろから声がして、振り返った。

「…何だよ」

「チョコ、貰ってく「いらねえ」」

南は即答し、断った。

「…そう、ですか……で、でも、食べてくれなくてもいいので、受け取るだ「帰れ」」

南は少し睨みつけて言った。

でなくては諦めないと思ったからだ。

南にチョコを渡しにきた女子はトボトボと1—Aを後にした。

今の南の言葉を聞いていたからか、廊下に南にチョコを渡しに来た他の大勢の女子も帰った。

10分後。

ようやくダンボールにチョコが詰め終わった。

詰めたチョコは、応接室に運ばせた。

ちなみに、応接室にも南へのチョコが大量にあった。

キンコーンカーンコーン…。

チャイムが無い終わり、もう一つの音が鳴った。

プルルルルルル…。

南の携帯の着信音だ。

「も…もしもし…」

ヤッベー、と内心で言いながら電話に出た。

『応接室にあるダンボール箱は何？』

「…分かったよ…今から応接室行く…」

『早くしてね』

プツッ。

恭弥からの電話だった。

「…帰りたい…」

しぶしぶ応接室に行く。

途中でチョコを渡してきた者もいたが南が即答で断り、皆トボトボしながら教室に入った。

「来たぜー…」

応接室到着。

「それじゃあ、このチョコ片付けてね」

「…焼却炉へGO!」

「そのためにかかる費用は全て、君が出してね」

「…それは嫌だ…」。

「……………あ」

何かを思い出したかのように、フツ、と呟いた。

今日風と会う約束をしていたのだ。

「ところでさ、僕にはないの？」

「は？何で恭弥にあげなきゃいけないんだよ」

「お世話になった人に渡すものでしょ」

「お世話になってない」

恭弥はハア、とため息をはいた。

「…まあいいよ。南が作ると思わないし、君の料理は食べれないものだからね」

「だから、オレは買うんだよ！今日、オレの親友に渡しに行くし！」

凧は南の親友になっていた。

それは意外にも、凧が言った。

それは、ある日電話をしていた時のことだ。

『南…私と…あの、その…』

『ん？どーかしたか？』

『えっと…私と…親友、に…なってください…！』

『！風…』

『ダメ…？』

『何言ってるんだ！オレ達もう親友だろ？』

『！南……ありがとう…』

と、まあこんな感じだった。

「じゃあ僕のも買って置いてね」

しまった、と南は瞬時に後悔した。

「いや「じゃあこのチョコを全部食べてね」あーもー分かったよ！
」

全部食べるなんてムリだし、南が食べるとも思えない。

しかし過ぎたことは仕方無い、と思ってドアの方に向く。

「んじゃ、オレ一旦帰るな。恭弥にチョコあげる代わりにチョコの
処理頼むからな」

「ハア…仕方ないね」

買い物すらも面倒だと思いながら学校を出た。

商店街にある店に着いて、チョコを選ぶ。

ちなみに、店員は南のことを知っている。

商店街で南のことを知らない者はいないのだ。

「ん、風のはこれにしよう」と

南が風を選んだのは、ブラウニー、トリュフ、チョコチップクッキーが一つのボックスに入ったもの。

値段は2500円と、高い。

だがそんなことを全く気にせずにカゴに入れた。

そして恭弥の分。

「どーせなら隼人の…いや、あと十雅の分も買うか…」

チョコを買う金は十雅のものだが、そんなことを気にする南ではなかった。

結果的に三人には同じものを買った。

生チョコが六個入った、普通のチョコだ。

店を出て、更にもう一軒の店に入った。

南がよく来るアクセサリーショップだ。

ちなみに名前は『jewelry namimori』。

本物のルビーなども売っているからこのような名前になっている。

「いらっしゃいませ、風間さん」

「電話したものはあるか？」

「はい、こちらに」

南は店長のあとをついて行った。

南が電話したもの…それは、ペアリングだ。

実は風に『親友になって』と言われたのはお正月の頃で、それから

は会えていない。

なので、南なりのお礼のつもりだ。

「こちらです」

店長が指差した先には、何種類ものペアリングが置いてあった。

南は仄との：親友と付けるものだと言ってあるので、恋人同士が付けるようなものは省いてある。

「思ったよりは種類があるな…せいぜい10種類あればいいと思ってたからな」

「ありがとうございます。風間さんに喜んでもらえたなら、用意した甲斐^{かい}があります」

そして、南はジックリと選び始めた。

選り始めて一分経った頃。

「決めたぜ。これにする」

南が持っていたのは、シルバーリング。

本物のシルバーなので多少手入れに手間がかかるものだ。

「さすが風間さん。すばらしいものをお選りになりましたね」

「オレはあげる奴に似合うものを選んだだけだ。さっさと会計」

「かしこまりました」

値段は万単位と高かったが、そんなことは南にとってどうでも良かった。

そして、凧と待ち合わせをしている公園に急いだ。

「凧！」

南は公園のベンチに座る凧を見つけ、呼んだ。

凧はこちらを振り向き、立ち上がった。

「悪い…遅くなった」

「ううん、私も今来たばかりだから…」

そう言う凧の手を、南が優しく包んだ。

「？」

「ハア…ったく、こんなに手が冷えてるのに今来たばかりなワケねー
ーだろ…。」

ほら、ついでで買ってきたホットドリンクやるよ」

南はカバンの中から250ミリリットルのペットボトルを取り出し、
凧に渡した。

「…ありがとう。でも…いいの？」

「遅れた詫びってことで♪」

南がそう言った時だ。

風が小さめの声でだが、くしゃみをした。

「寒いか…?」

「ん…ちよつとだけ…」

それもそのハズ。

今二人は制服姿なのだ。

南は学ランにパーカーを着ている。

マフラーなどは無い。

しかし、風は制服にマフラーを加えたただけだ。

「んじゃ、ちょっと待ってろよ…」

南はカバンをベンチに放り投げ、学ランを脱いだ。

そして、学ランを風の肩にかける。

「ん、これで少しはマシだろ！」

「あったかい…でも、これじゃ南が…」

「オレはパーカーも着てるし、第一寒くないし？」

南が放り投げたカバンの隣に腰を下ろす。

そして風も隣に座る。

「あ、南…これ…」

風が差し出したのは、赤色にラッピングされたもの。

「これ…バレンタインの…手作りだから不恰好かもしれないけど…」

「おお！ありがとな！すげー、手作り…あ、オレもあるんだった…」

南は再びカバンの中から物を取り出した。

藍色にラッピングされた、風に買ったチョコだ。

「オレは買ったもんだけど…ん」

そして風に渡す。

「ありがとう…」

「オレの方こそ♪」

あ、他にも風に渡すものあるんだった…」

もう一度カバンを探る。

そして、小さな箱を出した。

箱を開けると、そこには二つのリング。

「オレと凧の親友の証！凧はどっちがいい？」

「え…これって、すごい高いんじゃない？」

凧がそう言うのも仕方ない。

デザインは、普通のシルバーリングの真ん中に、白のライン、または黒のラインが入ったもの。

だが、白のラインの上にはパールが碎かれたものが、黒のラインの上にはダイヤモンドが碎かれたものが散っている。

ただテキトーに散らしてあるのではなく、どこかセンスの感じるものだった。

ちなみに、シルバーもパールもダイヤモンドも、全て本物だ。

「んー？　そーでも無かったけどなー…」

しかし、南は金銭感覚が狂ってるので分からないのだが。

「でも…こんなに高価なもの、もらえないよ…」

「ならオレ一人で持っても意味無いし…風が貰ってくれないなら捨てるぜ？」

「……………わかった…じゃあ…ありがとう」

「どーいたしました。白と黒、どっちがいい？」

「じゃあ…白…」

そして南は黒のリングを箱から鳥、箱ごと風に渡した。

二人で指に嵌めるが、お互いにピッタリサイズ。

「ピッタリ…？」

「ああ。風が白を選ぶと思って白を風のサイズにしたんだ。

もし黒選んだら買いなおすだけだしな♪」

白を選んでよかった、と風はホッとした。

「あ、ヤベ…もっかい学校行かなきゃ…。

あとリングと一緒にこれも」

南はポケットからチェーンを取り出し、風に渡した。

もう一度学校に行かなければならない理由は、恭弥や隼人に渡してないからだ。

「リングネックレスにもできるからな」

「うん。ありがとう。南、用事あるんでしょ？なら…じゃあ、またね」

「悪イな…またな！」

南は凧から学ランを返してもらい、学校へ急いだ。

凧も南と一緒に公園を出て、家へ帰った。

「恭弥！！これチョコ！」

南は応接室に行き、恭弥に投げつけるように渡した。

…否、実際に投げていた。

「ちょっと…投げないでくれる？」

「うっせ！それやったのはオレなんだ！だったら文句言うな！」

「ハア…じゃあまたね」

「おう！」

そしてそのまま、1—Aに急ぐ。

…が、応接室のすぐ近くで隼人を見つけられた。

「隼人！」

「あ?…って南か…どうかしたか？」

「ん、これチョコ。一応バレンタインだしなー。それに買ったものだけど」

「…サンキュ…」

照れくさそうに、隼人は南からチョコをもらった。

「んじゃ、オレ忙しいからまたな！」

「おう」

そして南は家に帰った。

「十雅ー。出て来い」

南の言葉の直後に、十雅が現れた。

「何だー？」

「ん、これやるよ。買ったものだけど」

「へ？…おぉー！！そっか、今日はバレンタインか！

…ってアレ…？金ってオレのじゃね…？」

「…文句あつか…？」

南の辺りにドス黒いオーラが見える。

「なななな何でもない！！ありがとう！それじゃ！」

十雅は危険を察知し、すぐに消えた。

「ふー…今日は疲れた…寝よ」

そのままベッドに倒れこみ、次の日は見事にサボった。

Episode 23 雪合戦!

「あゝ寒い…」

それもそのハズ。

今日は雪が積もった。

ブルルルルルル…。

「んゝ?…誰だ…?」

ディスプレイには、知らない番号。

「もしもし」

『オマエ、今日ヒマか?』

チビちゃん
リボーンか…。

隼人にでも聞いたのかなー。

「ヒマだしたら何?」

『ツナ達と、雪合戦やんねーか?』

…は? そんなのオレがやると思う?

「それはパス」

『そうか…まっ、オマエは来ないと思ってたからな』

…なら電話すんなっての…。

「んじゃ、切るぞー」

『一つ聞かせろ』

……妙に低い声になったな…。

『どうしてファミリーにそんなに入りたくないんだ？』

「別にー？いつも言ってるけど、メンドいからじゃね？」

ってかそれ以外に理由ないし。

『そうか…わかった。じゃな』

プツッ。

「あゝ…まだ諦めてないのか…」

さっさと諦めてくれればいいのに…。

そしたら気が楽になるし？

プルルルルルル…。

「また…って今度は恭弥か…」

ピッ。

「もしもし？」

『仕事だよ』

…仕事をしろって言いたいんだよな…？

「えー…昨日ノルマはやっただろー？」

『やってないよ。見回り一時間でノルマだと思わないでくれる？』

「オレにとってはアレでノルマ達成だ！」

頑張ってるし。

オレにしては。

『ともかく来てね。じゃないと咬み殺「分かったよ！」…10分以内だよ』

ブツッ。

ツーツーツー…。

「雪だからバイクは…あゝ———!!!!」

叫んでストレス発散…にはならないけど。

「そうだ！応接室でまったりしに行こう！」

ちょっと元気になって行くことにした。

応接室にはウマイ菓子がいっぱいあるからな。

10分後には学校に着いた。

…なんか騒がしいんだけど…。

「沢田に、隼人に山本に笹川に…他にもいるし…あ、アイツもいる…ハア」

何でこんな日までアイツに会わなきゃいけないんだよ…。

さっさと応接室行こう。

ガラッ。

「よっ」

「ピッタリ10分だね」

「だって雪だから…」

と言いつつお菓子準備完了★

「ハア：仕事する気ないでしょ」

「ん？当たり前じゃん」

だって仕事じゃなくて、菓子とか食いに来たしー？

「まあ今すぐじゃなくてもいいけど、これは今日のノルマだからね」

恭弥が用意したのは、書類、書類、書類…。

「…どんくらいある？」

「自分で数えなよ」

…もうイヤだ…。

そうだ！隼人の頑張りっぷりを見ながら菓子食お！

んで書類はやんない、と。

「書類はあとでやるから」

さてさて、どうなってるかな？

なんか三チームに分かれてるし…。

そーいや雪合戦って言ってたな…。

でも危ないよなー。

実弾が入った雪球とか、ポイズンクッキングが入った雪球とかあるよー。

「んー、やっぱアイツらバカだなー。実弾あるならそのまま撃てばいいのに」

ズズー、とまだ熱い紅茶を飲む。

うん、まだ超熱い。

「…書類やる気ある？」

「ない」

「…………じゃあ見回り行ってきたよ」

「こんな寒い日に見回りやれっのか？ふざけんな」

ワオ。恭弥が少し怒ってる♪

ま、もう慣れたけど。

「…ねえ、仕事しないなら風紀委員退会してもらおうよ？」

「あ、別にどーぞー。オレなりたくてなってるワケじゃねーし」

「……いいから仕事してね」

なんだよそれ！

結局は入りたくも無い風紀委員に入っただけ仕事しろってか。そーですか、ああ。

「あのさー、そーゆー仕事は全部恭弥がやれよー。委員長の仕事だろ？」

「君は特別委員だから手伝うんだよ」

「意味わかんねーし…つか並中の風紀って乱れまくってるからな？」

「……………どーゆう意味？」

あ…さすがにこれはヤバイ。

沢田たちのせいで、なんて言ったら恭弥が咬み殺しに行くだろう。

今すぐに。

「え？ いや…ま、気にすんなよ」

「まあ、風紀が乱れている理由としては君だね」

「へ？ オレ？」

オレがいつ風紀を乱したんだよ。

「うん。服装もそうだし、授業態度も。校則も無視してるから」

「…それは風紀委員に入るときの条件で…」

「でも風紀を乱しすぎだよ。そろそろ咬み殺そうかと思ってたんだけどね…」

まずい!!

恭弥が立ち上がってしまった!

「それじゃー……さようなら♪」

オレは急いで応接室から飛び出した。

だってそうしないと恭弥が追いかけてくるし？

「逃がさないよ」

「だから来るな！！」

このままグラウンドに逃げる。

「なんだ…アレ…」

「！」

グラウンドにはデカイカメ…。

「行くよ」

「分かってるよ…」

あ、あっちが気がかりでオレのことは忘れてくれたか…よかった。

「いでで〜〜っ」

コケるとか、ダサ。

「何これ？あとそのデカイカメ」

「ヒバリさん！！いや、あの」

オレもいるけど、隠れてるから気づかないだろう。

「せっかくの雪だ。雪合戦でもしようかとね。といっても群れる標的に一方的にぶつけるんだけど。」

…南、出てきなよ」

「なー、やっぱ寒いから戻ろうぜ？」

「って風間さん——！！？」

ん？ちょっとイラっとしたよ？

「何だよ…オレが学校に来てたらダメなのかよ…」

「あ、いえ！そんなことは…」

「ここで会ったのも何かの縁だ。今日は君を標的にしようかな」

ん、沢田ドンマイ。

そーいやアイツは…。

あれ？いない…。

隼人もいねーな…。

それにさっきより人数減ってるような気が…。

…どーせリボーンチビちゃんが企画した雪合戦のせいだろう。

「ひいっ！」

あ、恭弥が沢田に何かよく分かんない物投げようとしてるよー。

「思ったけど、風紀委員の仕事の途中だ。またね。…南」

「はいはい…」

「た…助かったー…ん？無意識に何かをタテに…。

うそ——！！イーピン風間さんに惚れてるんだった——！！

ああ！爆発する！！あと二箇所——！！

あっ」

一人で随分言ったな…。

あ、オレは避難済。

ドオオオオオ…。

…何でオレは助かったんだろう？

ってかイーピンオレに惚れてるって…。

ま、放っておこう…。

オレは恭弥がオレへのイラつきを思い出す前に学校から姿を消した。

勝手にいなくなったので、次の日にこつてりと仕事をさせられた。

ハア…
疲れた。

Episode 24 花見！

季節は春。

もうすぐ進級か…。

んで、この世界に来て一年が経つのも近い。

「早いなー。一年って」

「そういえば南が風紀委員になってもうすぐ一年だね」

…空耳じゃないぜ？

今、恭弥と花見に来てるんだよ。

「確かにそっちも一年経つな…」

「そっち、って他に何があるの？」

「えっ…並盛に来てから？」

ウソじゃないよな！

うん！

「ふうん…」

…大して興味ナシですか。

ま、いいけどよ…

花見といえば団子、ということで今両手には団子の束。

んー、まあまあウマイ。

「やっぱ人がいないってのはいいなー。ウルサいの嫌いだし…」

「他の風紀委員に追い払わせてるからね」

「……ま、そいつはドンマイだな」

少しでもウルサクしたらボコられるし。

「あっちの桜の方が綺麗みたいだから行くよ」

「あいあいさー」

てか花に綺麗とかあんの？

それを恭弥が分かるの？

…謎だ。

あー、凧とも花見したいな…。

あとで誘ってみよ！

「ん？アレって沢田達じゃね？」

会いたくもなかったけど。

あ、隼人は別だぜ？

「そうみたいだね。

追い払わせた風紀委員も殺^やられたみたいだし、行くよ」

あー、オレの返事を聞かずに先行かないでくれよ…。

あ！珍しくアイツいない！

いよっしやあ！！！！

「何やら騒がしいと思えば君達か」

「ヒバリさん！！それに、風間さん！

あ、この人風紀委員だったんだ！」

でも弱者は風紀委員にいらないうぜ。

「僕は群れる人間を見ずに桜を楽しみたいからね。彼に追い払って貰っていたんだ。」

でも君は役に立たないね。あとはいいよ、自分でやるから」

「い…委員長…風間先輩……」

さよ～なら～♪

「弱虫は土にかえれよ」

ガッ。

がはっ。

「！仲間を」

「見てのとおり僕は人の上に立つのが苦手なようだね。

屍の上に立っている方が落ちつくよ」

確かにコイツはしょっちゅう、風紀委員をボコってるしな…。

「いやー絶景！絶景！花見ってのはいいね——♪

つか——やだね——男ばっかつ！」

「Dr. シャマル！」

誰だあ？このオッサン…。

「まだいやがったのか！！このやぶ医者ヘンタイ！スケコマシ！

それに、一応でも南は女だぜ」

うん、一応でいいよ！

でも言わなくてもよかったよ！

「オレが呼んだんだ」

「リボーンも！」

「南って、その子か？…モテそうだな。女の子に」

「…キモイ、ウザイ、ウルサイ、失せろ、死ね、消えろ」

オレが言うと、オッサンが精神的ダメージを受けたようで、しゃがみ込んだ。

「ス…スミマセン…」

ずっとそのままでいろ。

「赤ん坊、会えて嬉しいよ」

「オレ達も花見がしてーんだ。

どーだヒバリ、花見の場所をかけてツナが勝負すると言ってるぞ」

「なっなんでオレの名前出してんだよー!!」

…ま、ドンマイ…。

同情もしないけど。

「ゲーム…いいよ、どーせ皆つぶすつもりだったしね」

つぶすって…。

「じゃあ君達三人とそれぞれサシで勝負しよう。お互いヒザをついたら負けだ」

「ええ！それってケンカ！？」

「沢田、ウルサイ。ヒザついたら負け、恭弥の割には優しいぞ？」

気絶したらじゃないだけ良かったじゃないか！

「えっ！？あ、スミマセン！！」

そして、皆…沢田を除いた人達がやる気になった。

ん？オレ？

だって、『恭弥VSその他』だろ？

なら別に参加する意味ないしー。

「のへ————!!ふぎゃ——っ!!」

あ、いつの間にかシャルという名の変態ジジイが消えた。

次は隼人だ。

「てめーだけはぶっとばす!!」

「いつもまっすぐだね。わかりやすい」

恭弥が攻撃をするが、隼人は避け、ボムを放つ。

新技、ボムスプレッズ。

「果てな」

ドガアン。

「えゝえゝ。まじでヒバリさんを!！」

「あのスピードと柔軟性は強化プログラムで身につけたものだぞ」

…まだ殺^やられてないのに、呑気なこった。

「で…? 続きはないの?」

おーおー。隼人は秒殺されたねー。

もっと強くなれよー。

「南、君も参加してるからね」

…は？

「なぜでしょうか？委員長？」

「まだ君の戦闘を見たことがないからね。山本武は譲ってあげるよ」

…メンドクサ…。

「遠慮す」そうだな。山本、風間と戦え」…オイ。なぜ乗り気なんだ、チビちゃん…」

ふざけるんじゃない。

オレはのんびりとしてたいんだ。

今もこうして桜の木の上に乗る、寝転がっているんだ。

「早くしないと書類整理してもらおうよ」

「…わかったよ！10秒で終わらせる」

「ハハッ。言ってくれるな」

うーん、アイツは剣使うし…。

「じゃあスタート」

オレが言った途端、先制攻撃を仕掛けてくる。

…甘いな。

キーン。

右手で刀を持ち、防御する。

「なっ…オマエも刀かよ!？」

「誰も素手で戦うなんて言っただけだな。ま、これで終わりだけだな」

何も持っていない左手で腹パンチを一発★

「うぐっ」

山本は膝をつく。

「オイオイ…まだ一割程度の力にしたのに…。弱いなー」

見栄を張っている訳じゃなくて、ホントに一割。

「風間…強、過ぎ…だぜ…ぐっ…」

山本はまだ痛そうにしてる。

「ん、恭弥！これで終わったぜ」

「そうだね。じゃあ最後だ、沢田綱吉」

恭弥が軽く殺気を放つ。

…コイツの場合、『早く戦いがしたくて、ウズウズして溢れた殺気』

って感じだよなー。

ズガン。

ん、最終決着だ。

沢田はレオンをはたきにして、恭弥のトンファーと戦う。

しかし、それは長くは続かない。

シュウウウウツ。

「いゝ!？」

死ぬ気タイムが切れた。

しかし恭弥は構わずに攻撃をしようとする。

――が。

どさっ。

「？恭弥…？」

恭弥が膝をついた。

「奴の仕業だぞ」

「おーいて。ハンサムフェイ」「どこがだよ、オッサン」………」

体育座りでいじけ始めたよー。

大の大人が…情けない。

そしてシヤマルオッサンはいじけながら、桜クラ病の説明をする。

「約束は約束だ。せいぜい桜を楽しむがいいさ」

恭弥がフラフラとだけど立ち上がった。

「んじゃ恭弥、頑張って帰ってく「書類整理」…分かりましたよ」

つまり、肩を貸せ、ということだ。

「ちょっと待ってくれよー。タクシー呼ぶから」

「「「タクシー!？」」「」」」

沢田・隼人・山本・シャマル^{オッサン}の声だ。

皆何に驚いているんだ？

タクシーくらい呼ぶだろ。

ピッピッ。

「もしもしー？今すぐ来い、じゃな」

ブチッ。

「…南、場所言っていないじゃねえか…」

「ん？何言ってるんだ隼人。そんなのはタクシー全部で探せば…来たぞ」

キキィッ。

「お待ちせ致しました、風間さん！どうぞお乗りください！」

「ん、じゃな！」

そして恭弥とオレはタクシーに乗り、並中に行った。

残された人達は、オレに対する謎が増えたとか、そうでないとか。

Episode 25 進級!

4月になり、木に咲いた桜はだいぶ少なくなってしまった。

今日から学校…つまり、二年になる。

あー、早かった…。

もう転生してから10ヶ月くらい？

…よく頑張ってるよ、オレ…。

何をもって？

それはもちろん、恭弥のワガママに耐えたり、隼人とグチ言い合ったり…。

イタリアに行くのもメンドクサイんだぜ？

これで頑張っていないなんてことはない！

「あゝ……学校ダリイ……」

そう言いつつも学校に行く。

クラス分けはオレのの仕事だったんだけど、面倒だから草壁にやらせた。

草壁には草壁の仕事があつて大変そうだったけど、オレが半分命令してやらせた。

だって……オレ、クラス分けなんてどーでもいいし。

あ、隼人とは同じクラスにするように言つたいたぜ？

原作で沢田とかも一緒だったかもしれないけど、それはアレだ……草壁任せだ。

どうなるかは、草壁次第。

「さて…クラス見て、応接室で休んで…屋上で仮眠をとって帰ろう」

教室には行かない。

面倒だから。

教室に行くのが。

今の時間はH R^{ホームルーム}が始まったくらいで、校舎の外には誰もいない。

今日は午後から入学式か…。

オレ風紀委員代表として出なきゃいけないらしいんだけど、草壁に任せよ。

そして、クラス分けが発表されている紙を見る。

「あつた…2－A、か」

んー、隼人や山本、沢田とか…いっぱいいるじゃん。

原作で出てくるメンバーは全員……。

あ、そういやアイツは…？

「…げ…同じだ……ま、無視してりゃいいっか」

気にしなければいいだけ。

とりあえず応接室に行く。

応接室では、恭弥が書類整理をしていた。

何でも『クラスが変わったり、新入生が来るから忙しい』らしい。

オレ？オレは手伝わないぜ？

だから今もお菓子の準備を――――

「それ食べるなら手伝ってね」

――――止めた。

さて、どうしようか…。

お菓子は食べたい。

でも仕事はしたくない。

ここが、人生の分かれ道か……………！！！！

「何考えてるのか知らないけど、『人生の分かれ道』なんて思ったら大袈裟おおげさだよ」

「！！なんで分かった…！まさか、エスパー…？隼人に教えなければ！！」

隼人はこーゆー変な話好きだからな。

こないだも『幻の生物』とかいう古い本持ってたし。

「…本当にそう思ってたの…？」

「うん」

「……僕が予想した、最悪の言葉を言ったまでだよ」

「だって、仕事やらなきゃお菓子がもらえないなんて……オレには地獄だ！」

「……ハア」

おい、何のため息だ、それは。

「そうだ、君にはこれを見せておくよ」

「?どれ…」

恭弥から一枚紙をもらった。

「えーつと…? 『中学交流・黒曜中学』…は?」

あの黒曜中と交流しろ、と?

いや、今はまだ骸いないからいいかもしれないけどさ…。

骸が来たらヤバイことになるよ…？

「そのままだよ。『特別委員』ができたから、こういう行事もした方がいい、と草壁が言ってるね。」

まあ、やるかやらないかは君に任せるよ」

草壁！テンメエ…オレの仕事作るな！！

「オレという特別委員ができたからの行事か…。」

ま、面白そーだし、やるよ」

「じゃあ校長に言っておいてね」

「りょーかい」

応接室を出て、校長室に向かう。

にしても、黒曜か……。

どんな運命だよ…。

いや、拒否できたよ？ できたとも。

でもさ………。

楽しそうじゃん？

黒曜編が終わっても交流はあるだろうし。

黒曜編が終わると『交流は無くして』って恭弥から言われるかもしれないけど。

そーいや黒曜って、荒れた学校なんだよなー。

並盛ではよく聞くんだよ。

原作でもそうだったのか？

ま、いつか。

あっという間に校長室。

「おーい、入るぞ」

返事も聞かずにドアを開ける。

「……！か、風間さん！？」

「よ。ちよつと承認してもらいたい書類があつてな」

先ほど恭弥から渡された書類を見せる。

「なるほど。他校との交流ですか…。

しかし、隣町…あ、いや、なんでもないです！！喜んで承認させていただきます！！」

校長が『しかし』と言った途端、オレが真っ黒い笑顔を見せてあげた。

「うん、よし。じゃあさっさと黒曜中に知らせておけ。今日の放課後、オレが行く」

「きよつ今日ですか……！？あ、いえ…分かりました」

さて、これで入学式は行かなくて済む。

校長は早速電話をかけ始めた。

「あ、はい…新しい一年が始まることですし…。

…えっと…申し訳ありませんが、少々待っていただけますか？ 風間さん、夕方ですよろしいですか？」

げ！ 夕方なら入学式サボれない…。

でも、ま…黒曜との交流がもてるならいいか。

「分かった。夕方5時にオレが黒曜中へ行く」

「ありがとうございます。お待たせ致しました。こちらの代理の方が17時に行くようです…はい、それでは」

ガチャリ、と電話をきった。

はあ…13時からは入学式だ…。

そして、13時。

体育館にはまだ大きめの制服を着た新入生が、期待を不安を胸に開始を待っていた。

なーんて。よくあるベタなセリフを言ってみた。

心の中でだけど…ダセエよな。

『期待と不安を胸に』？

勝手にしろ。

式が始まったら、すぐにオレからの挨拶がある。

あー、めんどくせ。

『大変長らくお待たせ致しました……』

始まった。

新人生の表情は…疲れてるな。

『それでは、並盛中学校風紀特別委員の風間南様から挨拶を頂きました
と思います』

おい、新人生の前で生徒に敬語をするんじゃないやねえ。

ま、もう慣れたけど。

「あー、かったりー」

そう言いながらマイクを持つ。

「あー、どーも。新入生の奴ら。オレが風紀特別委員の風間南だ。クラスは2―A。」

この学校では風紀委員が全てを管理する。規則はあるが、小さなことなら気にしなくていい。自由にやれ。

部活に入りたい奴もたくさんいるだろうが、オレからはアドバイスはしねエ。好きなのに勝手に入れ。

あ、委員会として風紀委員に入るには恭：委員長からの誘いが無けりゃ入れねえからな。ま、誘われない方が幸せだが。

んでー…ま、他には特になし。聞きたいことあんなら担任にとかにでも聞きやがれ。以上」

新入生の女子ほとんど全員の頬が赤く染まっている。

ああ…メンドクセエ。

ただでさえオレのファンクラブとか校内に出来ちまってるらしいし…。

本当に嫌だ…。

また恭弥に怒られるんだろうな！。

『君のせいで校内の風紀が乱れる』 ってな。

ハア…。

おっと。そんなことより黒曜中だ。

意外と時間は無いから支度しておかねえとな。

17時。

オレは黒曜中にいた。

服装？

カラー半Tシャツ、Yシャツ、パーカー。

学ランはダリイから。

あ、ズボンは学ランのやつだけど…。

腕章はパーカーに付けた。

短剣二刀にポーチも持つてるぜ。

これは常備してるからな。

「あなたが…風間さんですか？」

「あゝあゝ？」

オレを呼んだのは、制服を着た男子。

つまり、男子生徒だ。

「申し訳ありません、挨拶が遅れました。

黒曜中学校生徒会長、日辻 真人ひつじ まさとといいます」

「生徒会長、ね…知ってるならオレのことはいいな。
んじゃ、さっさと話すんぞー」

「はい。とりあえず、校舎内にお入りください」

「へいへい」

にしても、なんかウザイ奴だなー。

さっきから周りにいる不良を虫でも見るような眼で見やがる。

見下してんのか…。

…オレは、こーゆー眼が大嫌いだ。

前世で、オレにこんな眼を向けられた。

ま、オレに対しては気にしてない。

オレが嫌だったのは、アイツに向けられていた目だ。

オレと何も変わらない眼。

だけど、オレと同じ眼を向けられている者が他にいるのは嫌だったんだ…。

「すみませんね…」

「は？何が？」

「…このような、醜みにくい生徒をお見せしてしまったて…。

頑張っではいるんですが…生徒は聞き耳を立てずに…」

「……………」

「あはは、呆れて言葉も出ませんよね…着きました。校長室です」

オレは返事をしなかった。

コイツには返事をする価値もない。

コンコンッ。

「どうぞ」

「…入るぜ」

扉を開けると偉そうに座った校長。

全く…ここの奴らはムカつく。

「オレが並盛中学風紀特別委員の風間南だ。

…挨拶はいいから、さっさと書類をよこせ」

「「！」」

校長だけではなく、日辻…だっけか？コイツも驚いてた。

「…かざ「早くしろ」…日辻君、彼に書類を」

「は、はぁ…」

また男に思われてるな…ま、いいけど。

校長に言われ、日辻が書類を持って来た。

3枚。

黒曜中の合意書と、並盛中の合意書。

そして、内容についてだ。

黒曜中の合意書にはサイン済み。

内容を見ても、至って普通な内容。

よし、サインすつか…。

ササツと書いて、校長の前に出した。

「並中は承諾した。黒曜も承諾済みのようだし、さっさとコピーし

ろ」

「…日辻君」

「はい」

ヴィー、という音を出しながら、コピーされた。

オレは黒曜中の合意書のコピー、並中の合意書、内容のコピーを持って校長室を出た。

もう、あんな場所にいたくなかったから。

恭弥に見せても問題は無かった。

…ああ、『黒曜中学校は並盛中学校の下につくって文がないよ』って言われたけど…。

『それなら自分で行け』 って言ったらトンファー振り回しながら追いかけられた。

なんで？

ともかく、こうして黒曜中と並中は姉妹校となった。

……姉妹校が隣町って……ま、いいけどよ……。

Episode 26 夏祭り!

早いもので、只今夏真っ盛りの8月4日。

今はもう夏休みだ。

本当、早い…。

この日まで、特に何も無かった。

…ホント、二年になったのが昨日のように感じるほどに何も無かった。

ま、その方が楽だな。うん。

んで、今日は並盛神社で夏祭りがあるんだ！

去年は行かなかったからな。

去年って…ああ、V A R I A アジト行ったりしたんだ。

でも、今年は夏祭りに来れた。

…風紀委員で。

夏祭りで、風紀委員がシヨバ代回収してるんだ…。

もちろん、オレも同行することになった。

ん？浴衣？

着るハズねえし…。

そんなモン着るくらいなら死んだ方がマシだな！

あ、オレにとってはな。

だから今日も私服。

学ランじゃなくてもいいって言われたんだ！！

やったぜ！

ズボンは、サルエルの黒いゆったりしたズボン。

白いタンクトップの上に、あちこち切れたデザインの半袖の黒Tシャツ。

…腕章は付けなきゃダメだとよ…。

泣きたくなる…。

凧と来たかったのに…。

ハアア…。

最近、凧と連絡だけで会わないんだよ…。

「いつまでブツブツ言ってるの。」

早く行くよ」

「あれ？声に出てたか？」

「小声でブツブツとね。」

「それより早く行くよ」

オレは無言で神社に向かった。

「…なあ、確認するが…この人混みの中に入るのか？」

オレは人混みも大嫌いだ。

ウルサイから。

「まあね。でも腕章付けてれば道ができるから大丈夫だよ」

「……あっそ」

さすが風紀委員だ。

…恐ろしいなあ、まったく。

そして恭弥の言った通り、通ろうとするとド真ん中に道ができた。

「あ、射的！」

オレは射的の方へ行った。

もちろん、人は自然と避けている。

「もうそのシヨバ代は回収済みだよ」

「じゃなくて、遊ぶんだよ！

おっちゃん！一回！」

一回分を受け取り、狙いを定める。

「ここだな…」

そして指を引いた。

ぽん、ぽん、ぽん、ぽん、ぽん、ぽん…。

バタバタバタバタバタ。

「うし！最高記録達成！」

10個以上をまとめて落とした。

周りは静かだ。

「ふうん、南って射的得意なんだ」

「まあな！おっちゃん、早くしろよ！」

「…またか…さっきの小僧といい…うああああああああああ！！！！」

叫びながらもしっかりとつめる。

ああ、さっき^{チジちゃん}リボンが来てたのか。

「南、早く行くよ」

「おう！

…て、嫌だよ。どっか…あ、隼人がやってるらしい屋台行ってるから」

メールが来てたんだ。

『こだわりの屋台出すから、来いよ』って。

…隼人がこだわると、こだわり過ぎになりそう…。

例えば商品が何製か、とか…。

でもウマけりゃいいか。

「ハア…確かチョコバナナの屋台だよ。後で行くから、その時まで自由でいいよ」

「マジ!? やった!」

あの恭弥から自由時間をもらえるなんて!

「でも…あと10分くらいだから、その時にはいてね」

「あー、りょーかい。じゃな」

金は十雅から貰ったのがあるから、それを持って歩く。

…うん、通りやすいな。

まるで人が避けているようだ。

さて…隼人はどこにいるかね…。

何となくウロウロしながら探して、2分経った。

両手には多くの景品、食べ物、飲み物。

全部回収した金から出したから気にしてないけど。

「あ…あった」

恭弥の言った通り、チョコバナナ屋だ。

「おっす隼人！売れてるか？」

「南！来たのか」

「ま、恭弥の手伝いも兼ねてな。そーだ、チョコバナナを…とりあえず3本」

「さ…いや、オマエなら少ない方だな。少し待ってろ」

オレならって、バカにしてんのか？

「あー、やっぱりオマエもいたんだ。沢田に山本」

「ど、どうも…」

「よっ♪」

「にしてもヒマだなー。屋台なんて。あ、早く5万集めとけよ？あのワガママ大魔王が回収するから」

やべー、オレ偉い。

こんなどーでもいい奴らに忠告するなんて。

「「ワガママ大魔王…？」」

「誰がワガママ大魔王だい？」

…何だろう。後ろから殺気が…。

「早かったな？ 恭弥」

「君が勝手に回収してたから、時間がかからなかったんだよ。

その両手に持っている物を買うために集めたの…？」

「ああ。おかげで大量だ！ あんがとな。これお釣」

渡したのは、1000円札が3枚と100円玉4つ。

回収したのは…一つにつき5万だから…計30万。

その内29万8600円は使った。

何に、かは言わないでおこう。

「……残りは？」

「これで全部！29万ちょいは使った」

オレの胃袋の中にあるものと、手に持っているものにな。

「…ハア…じゃあ集めといてね。同じ店でもう一度」

「は！？なら自分で行けよ！」

「南！出来たぜ」

隼人、ナイスタイミング！

「お、やり♪恭弥払っというて」

「嫌だよ」

「じゃあ金払えねーじゃん。あ、回収する金から減らせばいいか。

おい、回収金で…48500円。これで3本分減らしてあるから」

「あ、はい…」

オレが言った金額で沢田が用意していく。

…なんか恭弥から真っ黒なオーラが出てるけど、ここは敢えてシカトしよう。

そんで、48500円という微妙な金額を恭弥に渡してた。

「んじやなー」

「おう」

隼人と軽い挨拶をして、再び回収し始めた。

夕方。

神社の近くで寝てたんだけど…。

なんかウルサイんだよな。

眼が覚めちゃったじゃねーかよ。

「…ぶっ殺す」

神社の前に来ると、沢田と不良の奴ら。

沢田がひったくりにでも遭ったみたいだな。

「うれしくて身震いするよ。」

うまそうな群れをみつけたと思ったら、追跡中のひったくり集団を大量捕獲」

お、恭弥も来たのか。

「よ！恭弥！」

「君さ…知ってたなら僕に連絡してよね」

「オレは寝てて、今知ったんだよ！」

「…ハア」

それは何に対するため息だよ…。

「オレは面倒だから帰るわ。ま、がんばれー」

「見事な棒読みだね。仕事は上乗せしとくから」

「ふざけんなよ…ったく、じゃな」

オレは帰って知らなかったけど、この後隼人と山本、それとリボ^{チビ}ー^{ちゃん}が来て圧勝したらしい。

恭弥が…群れてたんだな…。

次に会った時に恭弥をからかったらトンファーで殴られそうになった。

相変わらず、危ない奴…。

Strordinarimente 4 登場人物! 2

風間 南

服装(制服) 学ラン、風紀委員の腕章、特別委員の腕章、Yシャツ、カラーTシャツ、靴はハイカットのスニーカーが多い(黒のローファー時也有)

服装(私服) 白・黒等のモノクロ、赤、青、緑等の男、靴はハイカットのスニーカー

必需品 ケータイ、リングペンダント、風とのペアリング、黒ポーチ(千本三種類+解毒剤、小型ノートパソコン、財布、iPod touch)、短剣×2

装備 右足の脛すねにポーチ(ONEPIECEのエースと同じ物の黒verで、同じように付けている)、腰裏に短剣(XANXUSが銃を付けている時と同じ)、アクセサリ類

所属 並盛中学校風紀特別委員、VARI A(仮)、VONGOLA(仮)、適応者

スード（南の変装姿）

髪の色 青

髪型 南と同じ

服装 黒の長ズボン、白いTシャツ、大きいフードが付いた黒のパーカー（目が隠れる）

その他服装 黒い手袋（骸が使っているようなもの）、黒いブーツ（ベルのブーツと同じだが白の部分を黒、紐を白にしたもの）、右足の脛脛にポーチ

装備 ポーチに入った千本、気分次第で短剣

S t r a o r d i n a r i a m e n t e 4 登場人物！ゝ2ゝ（後書き）

新キャラがないんで、追加情報だけですネ。

南のポーチは、書いたとおりにワンピースのエースが足につけている物の、黒バージョンです。

そして、付け方も同じです。

銃の持ち運び方はXANXUSと同じく腰の裏です。

『どうやって座ってるの？』とかの疑問は…。

ま、南が頑張っているということとで。

スードの姿もこんな感じですよ。

では次から本編となります♪

それでは。

S t r a o r d i n a r i a m e n t e 5 メリークリスマス！

中学一年の12月24日。

「さー、なぜオレはこんな時間にこんな場所にいるのかねえ…」

今南がいる場所。それは学校だ。

もはやお約束となった、恭弥からの呼び出し。

「やっぱ…風紀委員ってマメな奴らなんだな、うん。恭弥がそーゆーのやるわけ無いからな、うん」

そう決めつけ、今いる屋上から空を見上げる。

星は雲に隠され、月の光だけが暗闇を照らす。

町からは多くの光が出されていて、イルミネーションをしている家が多くあるので少し眩しい。

「今、サンタを信じている者達はぐっすり寝てるんだろーな…。夢見ていいのは小学生までだぜ？」

そう言っている南は、小学生どころか、ずっと夢なんて見ていない。

ビュッ、と強い風が吹く。

今は12月。そして夜中11時45分頃で、場所は屋上。

寒さはハンパない。

「…て、アイツらはいつまで待たせるんだよ！屋上とかイジメ！？」

寒いつつのー!!」

「うるさいよ」

「…あいつかわらずオマエは悪魔のようだなあ…ハア」

南は隣にいる恭弥に向かってため息をはく。

「君の読み通り、今回のことは僕は何にも関係ないよ」

「あーあー、そうですか! そんなのはどうでもいいけど。って、アレ…? なら何で恭弥は学校にいった?」

「仕事だよ」

「…聖なる真っ赤な夜に、お勤め御苦労」

「真っ赤な夜…?」

南は恭弥の疑問をバカにするように笑って、問に答えた。

「クリスマス、つーのは…ま、ある偉大な人が亡くなったからできたものだろう？」

つまり、死Ⅱ血。だから真っ赤♪」

「…君は相変わらず意味不明な発言をするね。もう慣れたけど」

「ハア…これだから恭弥の相手は疲れる」

「その言葉、そっくりそのまま君に返すよ」

恭弥はどこからかホットドリンクを取り出して、ゆっくりと飲んだ。

「あ！ズリィ！！オレにもあったかいのくれよ！な！」

「うるさい。欲しいんなら自分で買ってこれば？」

「クソ…こうなったら、今応接室で準備してる奴に命令して…」

「そういうのは頼むのが普通だよ」

「いーんだよ。オレの方が偉いんだから」

ふん、と南は言い切った。

「そういうのを横暴っていうんだよ」

「…その言葉、恭弥にだけは言われたくない……」

「仮に僕がそうだったとしても、君の方が横暴だからね」

「はああ！？どこがだよ！オレは風紀委員に入る条件で許可されたこと以外は校則通りにしてるぜ？」

「その条件がぶっ飛んだ内容だからね」

南が言い返そうとした、その時。

屋上の扉が開いた。

「委員長！！風間さん！準備ができました！」

「お、ようやくか…寒かったー…」

「群れてたら咬み殺すからね」

「おいおい…それは無理だろ…アイツらはパーティーのつもりみたいだぜ？」

「僕の前で群れるのは、許さないから」

「…やっぱりオマエは横暴だ…」

こんな言い合いをしながら、二人は応接室の前まで足を運んだ。

「さて…ここは委員長！どうぞお開けください！」

「…君に敬語で言われると気持ち悪いんだけど」

「失礼だな！ 全く…オレ軽くイラッときたよ？」

「へえ…咬み殺してあげようか？」

「いい度胸じゃねーかゴルァ！」

「いい加減にしてください！ 委員長！ 風間さん！！！」

南が短剣を構え、恭弥がトンファアを構えたところで草壁が止めた。

だが…。

「うるさい。いつからオマエ（君）はオレ（僕）より偉くなった
の（の）？」

この言葉で草壁は止められなくなり、聞いていた者全員は思った。

『二人共、横暴です』と。

「と、オレは眠いんだ。恭弥と遊ばないでさっさと終わらせて、帰って寝る」

「逃げるんだ？」

「そー思ってくれても構わん。ほら、早く終わらせろよー」

開始の言葉としては最悪な言葉を吐きながら、南は応接室のドアを開けた。

そして……。

ドカッ。

「群れすぎ」

「オマエなあゝハア」

案の定、群れを許せず恭弥が咬み殺した。

「んじゃ、パーティの中止になったことだし、オレは帰る」

「うん。またね」

「おう」

結局恭弥とは戦わず、そのまま家に帰った。

「ふぁー…あ…眠い…」

欠伸をしながら、南はマンションの入り口を通る。

「ん？何だ…ありや」

視線の先には、一つの白い紙包み。

受付の中に置かれている。

そして、受付には『風間さん、帰宅されましたらお声をかけてください』と書かれた張り紙が。

「おーい、何だ？」

何があったのだろうかと思い、受付に声をかける。

「風間さん。海外の方からお荷物が届いております…」

「荷物？」

「はい。こちらです」

渡されたのは、先ほど南が気になった白い紙包み。

「送り主は？」

「さあ：書かれていなかったため、分からないのですが：イタリアからのお荷物だとのことですよ」

イタリアにいる知人。

南は一つの集団しか思い当たらなかった。

「検討はついたわ。んじゃ、受け取る」

「はい、こちらになります。少々重たいのでお気をつけください」

「ん」

言われた通り、荷物は少しだけ重かった。

そして部屋の鍵を開け、ダイニングに行って荷物を開ける。

「さーて、荷物は何か…な……」

開けながら、後悔した。

なぜ、開けてしまったのだろうか。

なぜ、少し楽しみにしていたのだろうか。

「…いくらなんでも、隊服はプレゼントじゃなくてイジメだあ——
——！！！」

そう、送り主とはV A R I A。

そして中身は、V A R I A 隊服。

「知らない…こんな物知らない…! あ、手紙…?’

もう期待なんてしていない。

読まない方がいいのも分かる。

だけど、読まなきゃ隊服を送ってきた理由が分からないため、仕方なく読む。

「あ…スクアールからだ」

手紙を書いたのは、スクアール。

「んーと…イタリア語じゃなくて日本語で書いてくれればよかったのになー…。」

『この隊服は、これからV A R I Aに来る時に着て来い。

今はV A R I Aのボスがいらないから仮としてだが、戻ってきたら正式に隊員になるだろうからなあ。』。

…手紙でも濁点つけるのかよ…しかもオレ、隊員になる気無いんだけど…」

もうイタリアに行きたくない、と思ってしまったが、それは無理だ。

なぜなら、南が暇つぶしで行きたい国が他に無いから。

「うん、サイズもピッタリ…ルッス、気持ち悪…。

あ、気持ち悪いといえばレヴィに会ったことないなあ。ま、いいけど」

一応隊服を洋服ダンスに入れ、布団に入って爆睡した。

…今届いたこの荷物が、夢であると祈って…。

S t r a o r d i n a r i a m e n t e 5 メリークリスマス！ (後書き)

メリークリスマスです！

今回は、風紀委員とVARI Aのみ。

お正月はボンゴレで過ごそうと思います。

あ、でもリング争奪戦だったら無理かも…。

ともかく、みなさんメリークリスマスです♪

Episode 27 もう一人の霧に会う!

「あー、今日もめんどくせー」

今日は、黒曜に行く予定の日。

近々、何か合同でやろうとしているらしい。

こういう行事は全て校長同士で決めているので、南は知らない。

だが、『面倒事が無くてよかった』とむしろ喜んでいた。

「確か…今日の放課後だったな」

今は、昼の12時過ぎ。

約束の時間は一応17時。

まだ5時間ほどある。

「応接室行って…ずっとサボって黒曜行くか」

そう決め、家を出て学校に向かう。

…そう、今までずっと家にいたのだ。

そして、のーんびりとテレビを見ていた。

「あ、そーいえば…」

南はふと、疑問に思った。

「黒曜編っていつからだっけ……?」

日常編の話をほとんど知らないため、どこまで進んだら黒曜編にな

るのか分からないでいる。

「ま、今日黒曜行って、骸達がいるかどうかだな」

そう呟いて、バイクに乗った。

「…ヤバイ、寝過ぎた！」

今の時刻は16時45分。

あと15分で約束の時間だ。

「あ、でも正式には決まっていんだから大丈夫だ、うん」

そう思ったら、のんびりと支度をする。

バイクに乗り、黒曜に向かった。

キキー、という音を立て、黒曜中の前にバイクを止めた。

「なんだ、時間余裕じゃん」

只今の時刻、16時55分。

余裕…では無い。

「クフフ…お待ちしていましたよ。並盛中学校風紀特別委員、風間南さん？」

「あゝ？誰だデメエ」

南の前に現れたのは、大柄で顔にいくつか傷跡がある学生服の男。

「僕の名前は六道骸です。この前の日辻真人は体調不良のため、休んでいるんです」

「六道骸？ウソだろ。アイツはナッポーヘアだぜ？」

言った瞬間、六道骸と名乗る者がピクリと反応し、南は後悔した。

「…あ、今のは聞かなかったことにしてくれ、偽骸」

「…そう言っているということは、否定はしていない、ということですね？」

「あ？そりゃーそうだ。骸はナツポーヘアだからな」

骸と名乗る者は聞かなかったことにして、と言ったのに再び言っているのに呆れ、ため息をはいた。

「…君は何者ですか？」

「オレは一般人」

当然だろう？、と言いたそうな表情で言い切った。

「なぜ、僕が偽者だと思いで？」

「だーかーらー、骸はナツポ「ナツポーでは無いです」：ほら！

今のは自分で認めたようなもんだ！」

「：確かに、この姿の僕は本当の姿では無いです。では、なぜ僕の本当の姿を知っていたんですか？」

「！」

ヤバイ、と内心で連呼する。

『この世界は漫画で、オレが死んだから漫画の世界に転生された』
など言っただけ信じてもらえるはず無いし、南はそんなアホ発言はしたくない。

そして、一つの解決策^{いいわけ}を思いついた。

「オレには未来を予知できる知り合いがいてな。それで教えてもらった」

未来を予知できる知り合い…それは、ユニとアリアのことだ。

「ほう…予知。それは面白い方ですねえ」

「バカにすんなよ？ 予知したことはオレが知る中では100%^バ当たってるんだからよ」

「バカになどしてないですよ。ただ、少し……興味^バが沸いた」

「…あっそ。」

それより、羊？ アイツはどうした？ 体調不良なんてウソだろ」

「！なぜ…それを？」

南は偽骸の言っていることが嘘だと確信があったわけではない。

だが、並中に何の連絡も無かったので試しに聞いてみたのだ。

「つーことは、やっぱそうか…大方骸が黒曜を手に入れるためにアイツをハメたんだろ？」

「クフフ…まさかここまで当てられるとは…君は面白い。さあ、校内でゆっくり話しませんか？」

偽骸の提案に、南は妖しく笑って答えた。

「断る」

「…なぜ？ 僕が危険だと？」

「ハッ。確かにオマエは危険だ。だが、そんなのオレには何の問題も無い。オレはな…」

偽骸の眼をまっすぐ見て、再び口を開く。

「本物のテメエと、直^{じか}に話しをしたい」

「!!…クフフ…クハハハ!!やはり君は面白い…。
いいでしょう、ついて来てください」

そう言い、偽骸は歩き出した。

「お?…つーことは本物のナツ「違います」…ナツポーヘアを拝めるな♪」

「…違います、と言ったハズですが?」

「クフフ「真似しないでください」…そんなものはオレに通用しない！」

完全に南に呆れた偽骸と、骸を馬鹿にして楽しんでいる南は、どこかへと消えた。

歩いて数分が経った。

目の前には、黒曜ヘルシーランド。

「ここに、本物のオマエがいんのか？」

「ええ。では、中でお待ちしますよ…」

偽骸はそう言い、ドサツと倒れた。

そしてすぐに立ち上がった。

「ん、本来のオマエとのご対面かな？」

「…さっきまでのオレが骸ではないと分かるのか…？」

「ああ。オマエの名は？」

「…ランチアだ」

『ランチア』…その名に南は聞き覚えがあった。

骸にマインドコントロールされて沢田達と戦う、あのランチアだ。

「（そーいえば姿似てるな…）ん、ランチアな。別になかよくなるうとは思わないから、じゃな」

「…一つ、忠告しておく」

建物の中に入ろうとしていた南をランチアが呼び止めた。

「何？オレはさっさと入りたいんだけど」

「六道骸に…あまり関わらない方がいい」

「そんなのはオマエに関係ない。第一さ…オマエは、骸の何を知って言っている？」

「！」

ランチアにとって南が言ったことは、予想だにしない言葉だった。

「つて、そー言ってるオレも何も知らないんだけど」

「…当たり前だろう。」

だが…オレは、アイツの過去に何かがあったとしても骸を許す気は無い」

「復讐…それとも別のことだろうとオレはその行為が間違っているとは言わないさ。ただ…。」

もしもオマエがオレの仲間に攻撃するようなことがあれば、オレはオマエを殺すのに躊躇はしないからな」

南は本気でそう言いきった。

ランチアはその眼に恐怖を感じ、何も言い返せなかった。

「じゃな」

南はそのまま建物の中へ入った。

「さーて、こんにちわー！本物のパイナップルさん♪」

「違いますよ」

「のわ！危ね…」

部屋のドアを開けると同時に言ってきた南に、骸から三叉槍が投げられた。

「おいおい…何て危ない物を携帯しているんだい？パイナップル君は」

「僕のどこがパイナップルですか！「髪型」…まず、君から殺した

方が良さそうですね…」

骸から本気の殺気が向けられるが、南はそんなことを気にせずソファに座った。

「ま、落ち着いて粗茶でも飲みな。あるのか知らないけど」

「ハア…まさか、世界トップの頭脳を持つ者がこんな人だとは夢にも思わないでしょうね…」

「ん？知ってんのか。オレのこと」

南がどこからかお茶を出し、骸に聞いた。

「クフフ…当然でしょう。何せ、『ミニミ・カザマ』です。知らない方がおかしい」

「ふーん…そうなんだ、どーでもいいけど。そんで…羊はどうしたんだ？」

「ああ、彼のことですか……。彼は生徒会長の座を降りていただきました。そして……」

彼には暴力、という言葉を再認識していただきましたよ」

骸のその言葉だけで南は何があったのか理解し、『あっそ』と流した。

「ん？じゃあ……誰が黒曜中の生徒会長になるんだよ！オレにとっちゃそっちが問題だ！」

「そうですね……では僕がなりましょうか？」

「お！それなら頼んだ！つか……元はといえば、オマエが羊を再起不能にするのがいけねーんだから当然だ！」

さっさと話し合いするぞ！」

「は……？」

骸の提案は冗談半分だったのだ。

そんな提案を、南が本気で相手にすると思っていなかったの、素
つとんきよう
つ頓狂な返事をしてしまった。

「だーかーらー、さっさと話死合はなしあい…じゃなくて話し合い…」

「…その件は必要ありませんよ」

「へー、何で？」

南は骸は何かを企んでいる、と思ってニヤリと笑いながら聞く。

「あなたは…いえ、並盛中は僕が支配する。ボンゴレ10代目の体
を乗っ取ってね…」

「アイツの！？あんなのを乗っ取ったって自分のダメダメさに嫌気
が差すだけだ！止めとけ！！」

「おや？どうやらボンゴレ10代目のことを知っているようですね」

「一応な。でもよ…知っていたら、何？」

南は妖しく笑いながら聞いた。

「…いいでしょう。あなたになら話してさしあげましょう。

僕は、彼を乗っ取る計画を企てているんです」

「…だから、止めとけよ…」

「いえ、これは僕の目的を果たすための一段階目。やらなければならぬことです」

「ふーん…なら別にいいけど。で、さっきオレを乗っ取る的なこと言ってたけど、それは？」

二人は少しずつ戦闘体制に入る。

「クフフフ…それは単純な答えです。あなたが強い、と判断したからです。」

使える駒は多い方がいい…」

骸は三叉槍を手に取り、南の前に立つ。

「あ、何？オレをマインドコントロールでもしようと思ってんの？」

「ええ…その通りです。どうですか？僕らの仲間に…なりませんか？」

骸が言い切ると同時に、ギイイ、と扉が開く音がる。

扉の方を向くと、帽子を被ったおとなしそうな男と、対照的に活発そうな男。

「（城島犬と…柿本千種、か…）」

「この二人は僕の仲間です。他にも何人かいますがね…」

戦力は十分ですが、多いに越したことは無い。さあ…どうですか？」

「デメエ…理解しろよ？オレらがこうして扉を封じているってことがどーゆーことらかよ！」

「犬…まだ何も言ってないよ」

「う、うつせ！どうせアイツが断ることは分かってるんらよ！」

「ああ…そうだ、オレは断る」

「「「！！」」」

犬の予想通り、南は断った。

「じゃあ…無理矢理でも仲間になっていただきましようか。あなたの戦闘力は、彼でもわからないようなので」

「彼…？」

カサ、という音を立て、カーテンの向こうから小さな男の子が現れた。

「オマエは…確か、ランキングフウ太、だっけ？」

「おや、彼のことも知っているんですか。そうです、彼はジャンルに関わらず正確なランキングを作る少年。」

ボンゴレ10代目とも関わりがあるようでしたが…心を閉ざし、ランキング能力を失ってしまいました」

骸の言う通り、もうフウ太にはランキング能力が無い。

心を骸にマインドコントロールされているため、目に光はない。

「で、オレは何位だった？何かしらランキングしたんだろ？」

「いえ、僕はランキングブックのコピーを見させていただけです。並盛中のケンカの強さランキング。それが僕が見たもの。」

しかし…あなたの強さは『測定不可能』。一体…どういうことで
しょうかねえ？」

「知らねーよ…ハア。もしかしたらランキングが低すぎて出なかつ
ただけじゃね？」

骸はランキングのコピーを持ち、答えた。

「一位、雲雀恭弥。二位、山本武。三位、獄寺隼人。この中にボン
ゴレ10代目と関わりがある者がいるはずです。

そして、一番下に書かれている言葉。『測定不能、風間南』」

「わー、ホントにオレは測定不能かー」

骸が持っている紙を覗き込み、ため息混じりに言った。

「ええ…だからこそ、興味深い。どうです？改めて考えてください
…僕の仲間になるか、どうか…」

「だから、今は断る！だけど…手を組むだけならいいぜ？」

南はニヤリ、と笑った。

「手を組む…？」

「ああ。なんか面白そうだから♪オレはボンゴレ10代目と骸との戦いに関与しない。

だから、部外者からの攻撃にだけ対処する。オーケー？」

南の提案に骸は考える。

「…それで、もしあなたの仲間が僕に攻撃されたら？」

「そうになったら、オレは仲間を守る。だけどオマエらのことも仲間だと思っているから反撃はしない。

つまり、戦いを消す…と言ったらいいか。ともかく、そうする」

南の意志が変わらないのに気づき、骸は『クフフフ』と笑う。

「いいでしゅう。そうさせていただきますしゅう。僕らにとっても都合がいい。

ですが……これだけは、させておいてください」

「は？」

南が言ったのと、同時だった。

南の腹に三叉槍が刺さるの。

「――――！！！！！！……？？……いっっっで――――！！！！！！」

「おや？殺すつもりだったんですがね」

「おや？じゃねーよ！！痛ってーつの！！このバカパイナップル！
！頭ん中も果汁になっちまったか！？あゝあゝ！！！」

そして、骸は南の腹から三叉槍を抜いた。

「大袈裟おおげさですねえ。刺した、と言っても1センチだけですよ？」

「1センチだぜ？ふざけんな。オレは一般人だ！！本気で殺す気だ
つたろ！手を組むくせに、随分と…」

南は思い出した。

骸がマインドコントロールするための条件…契約と呼ばれることを。

「しかし、これで契約は成されました」

「オマエ…ホントに性質タチ悪イ…最低だ…最低なパイナップルだ…
…」

「早く傷口を塞いだ方がいいですよ。血が服ににじんできています」

「…オマエのせいだけだな、これは……」

そう言いながら傷口を塞ぐ。

「で、そこにいる奴らは？」

南は知っているが、知らないフリをして聞く。

「そうですね…二人とも、名乗っておきなさい。これから仲間となる人ですの」

「仲間ではないけどな、今回の戦いでは」

骸に指示され、二人は近寄ってくる。

「オレは城島犬ら！」

「…柿本…千種」

「んー、よろしくな。犬に千種。知ってるかもしれないけど、オレは風間南」

南の名に千種は反応したが、骸が頷いたことで理解した。

「そんじゃー…黒曜中と並中の合同行事はナシで！オレは帰る」

くるっ、と後ろを回って歩き出した。

「…並中には、明日から攻撃を始めるつもりです。あなたは攻撃対象ではないので安心してください」

「ん、りょーかい。あ、でも手を組むつつつても仲間に変わりないか…まあいいや。じゃな」

そして、南は黒曜ヘルシーランドを後にした。

戦いが始まるのは、明日――。

Episode 28 異変!

「本当に今日からだな…」

南は屋上で呟いた。

昨日は黒曜で仲間になる…今は手を組む宣言をし、明日から襲撃すると言われた。

面倒なのは嫌いだが、今回もそう言うわけにはいかない。

仲間と仲間の戦いだから。

…しかし、今日になって南に問題が起き始めた。

「…黒曜編の決着って…どんなのだっけ？」

そう、原作知識が抜け始めているのだ。

昨日骸から聞いた並盛中のケンカの強さランキングのトップ3は覚えてい

るが、いつ、どんなことが、誰によって起こされるのかを覚えていない…。

いや、消えたのだ。

まるで、最初から知らなかったように。

わずかでも覚えていた日常編の知識も消え、この先の敵の知識も、全て消えた。

「ハア…ユニカアリアさんに予知してもらいたい」

そのアリアがマフィアだということも知らない。
もう、何も分からないのだ。

その時。

ギイイイ…、と音を出しながら扉が開いた。

「ん、どーかした？」

「…並中生が、何者かに襲撃された」

「！」

並中のことなら誰より早く情報を得ている、恭弥からの言葉。

「…で、オレに何か用？」

「別に…ただ、今襲撃されているのは風紀委員だけだからね。一応
伝えただけだよ」

「ふーん…じゃあ風紀委員にケンカ売ってるだけかもなっ！」

南は笑いながら言ったが、恭弥はピリピリとしている。

「もしそうだったとしても、犯人は必ず咬み殺す……」

「…オレは手伝わないから」

南がそう言うと、恭弥は意外そうな表情をした。

「君なら『こんなメンドクサイ事した奴ぶつ殺す』とか言うと思っ
てたよ」

「ま、今回は恭弥がいるんだ。だったらオレは他人任せにする主義
」

「ハア：君はやっぱり分からないよ」

「は？何それバカにしてる？」

「うん、そうだよ？」

南はさすがにイラッときて、短剣を構える。

「いつもは気にしないけど今はオレもピリピリしてんだ。いろいろ
考えなきゃいけないことあるからなあ！」

「へえ、奇遇だね。僕もだよ」

南に続き、恭弥もトンファーを構える。

「…でも、こんなことしてるヒマもないしな。オマエもだろ？」

「…：君と戦えるのなら後回しにするけど…もう君は戦闘意欲が消
えたみたいだね」

「ああ、きれいさっぱり消えた♪」

南が言うと、恭弥はハア、とため息をついた。

こうやって、いつものようにグチグチと棘のある言葉で会話していると忘れてしまう。

南は恭弥の味方であり、敵でもあることを。

「で、調査に行かなくていいのか？もしかしたら被害は拡大するかもしれないねーぜ？」

「…そうだね。君も行くよ」

恭弥は扉に向かって歩き出した。

「悪ィ、オレ今忙しいんだ」

だが、足を止めた。

南が断るのは、よくあることだ。

でも、今回のようにめんどくさくてもやらなければならない時は断ることが無かった。

恭弥は疑問に思ったが、聞いても南が言うわけがないのを知っているため、何も聞かずに歩き出す。

「そう。ならいいよ」

「ん、まー頑張ってくれたまえ」

少し罪悪感を感じながら、南は恭弥を見送った。

「…もし、恭弥や隼人が襲われたら…オレは守れるのかな…二人とも、意地でも戦いを止めなさそうだし…」。

あー、どうしてこんな時に原作知識消えるかなー。消えるとしても、もう少し後だったら：ハァ」

もう消えたことは仕方無いけど、時期を選んで欲しい、と南は思った。

足に付けているポーチに手を伸ばす。

そこには、スードとして使用するための武器・千本がある。変装用の服とカツラは家。

「：今のうちにやっという方がいいこともあるんだよねー：メンドクサ」

でも戦いが始まってからだとかタタタするなー、と呟いて南は家に帰った。

カッン、カッン…。

足音が聞こえる。

ギイイ…。

少し錆びた扉が開き、足音の主を映し出す。

「おや？あなたは…ああ、変装でもしたんですか」

「ああ…気づいたか」

その者は被ったフードを頭から外し、その顔を露にする。

髪色は青で、南の髪型とほぼ同じ。

全体的に黒い服装で、右足の脛には、これまた黒のポーチ。

「だー！！暑い！！まさかカツラがこんなに蒸れるとは…予想外だった…」

「クフフ。ならば着けるのを止めたらどうですか？先ほどの姿でも、顔が隠れているので十分変装になっていましたよ。それに髪色も違いますから」

「いや…念には念を、だ。仮にボンゴレ10代目が気づかなくても、オレの仲間に気づかれたら意味がねーから。で、他の仲間って来たのか？」

青い髪を手でかき上げながら、南…否、スードは聞いた。

「いえ…もう少し日が経てば来るでしょう。何せ、彼らも脱獄囚。追っ手から上手く逃げなければなりません」

「ふーん…そういや、オマエらが襲撃してピリピリしてるぜ？襲撃された奴が皆、風紀委員だからな」

「さすが…と言うべきでしょうね。上位はほぼ、風紀委員が占めている」

まあな、と笑いながらスードは返事をした。

「あ、一応忠告しといてやるよ」

「？なんででしょう」

スードは妖しく笑いながら、言った。

「一位の雲雀恭弥。アイツは舐めない方がいいぜ？ピリピリしてるって奴もアイツだしな」

「ほう…覚えておきましょう。ですが、いいのですか？僕の方にだけ情報を与えて」

「ん？別にいいさ。それに言ってもアイツは聞き耳を立てないからな…。」

ま、他の仲間が来たらオレのことは『風間南』じゃなくて『スード』として伝えておいてくれ。

昨日の犬と千種にもな」

スードは再びフードを被る。

「ええ…わかりました、スード」

「…んじゃ、とりあえず帰る。騒ぎが大きくなった頃にまた来るよ」

こうしてスードは黒曜ヘルシーランドを後にした。

「クフフ…彼女も甘いですね…確かに僕はあなたの仲間ですが、敵でもある…。」

仲間と戦いを強いられた時、あなたはどちらかを選ぶことができますか？それとも……………」

本気でどちらも守る気なのですかねえ…」

骸は誰もいない部屋でそう呟く。

「骸さん、誰か来てたんれすか？」

「おや、帰りましたか。今来てたのは、昨日の彼女です。千種はいますか？話があるのですが」

「はい、骸様」

犬の後ろから千種が姿を現し、二人は骸のいる部屋に入る。骸の前まで来て、骸の話を待つ。

「彼女の名は二人とも知っていますね？」

「え、えっと……………なんれしたっけ？」

「風間南、ですよ」

千種の言を聞いて犬は『そう、それら！』と誤魔化す。だが、そこは骸にとって問題ではない。

「彼女のことを呼ぶ時は、変装している時はスード、と言って欲しいようです。変装の姿は全身的に黒い服装で青い髪。他はいつもと同じのようでした」

「スード、ですね。分かりました」

「ス、スードれすね！」

もう同じミスはしない、と思って必死に覚える犬。
たかが一人の名を覚えるのはそこまで大変ではないと思うが、仕方無い。

「それでは、今日は終わりにしてまた明日から再開しましょう」

「りょーかいれす！」

「分かりました」

三人はそれぞれの場所に行き、明日も続く“狩り”に備えた。

Episodio 28 異変！（後書き）

南の記憶はもう消えました。

その『異変』です。

さー、南は黒曜でどうするでしょうか！

あまり期待はせずにお待ちください。

あ、あと書き方を変えました。

文と文の間を短くしたんです。

前のままだと、個人的に読みにくかったんで…。

間の基準は一応決めてあります。

なので『気分次第』ということは免れると思いますが…。

時間が出来れば、今まで投稿してきたものも変えようと思っています。
す。

あ、この小説ですけど。

いつ変えるかはまだ未定。

予告なしに変えると思います。

あー…早く黒曜編を終わらせてオリ話書きたい…。

後々大事になるオリ話です。

今年中にオリ話に入るのが目標ですね。

それでは！

Episode 29 開戦!

ガゴン、という音を立てて自販機のペットボトルが落ちる。

「いつも思っただけど…炭酸飲料でこの振動嫌だよな…炭酸抜けるし」

文句を言いながら、南はペットボトルを取る。

炭酸ならではのプシュツという音が立ち、泡が浮上する。

そして一口、飲み込む。

「んー、やっぱり飲み物と言ったらコーラか午後の紅茶だな! うん、ウマイ」

自分の考えを呟き、いつもの様に学校に向かう。

…片手にコーラを持ちながら…。

校門の前まで来たが、何かがおかしい。

いや、南にとって見慣れている光景だが、一般生徒にとっては見慣れていない光景。

学校の前に風紀委員がたくさんいるのだ。

南はこの光景をととても見慣れている。

登校する時は待っていたかのように風紀委員が立ち並び、帰る時は見送りなのか何なのか、またもや風紀委員。

だが一般生徒はこの光景をなかなか見ない。

そして、南でもあまり見慣れていない光景が。

「……なんでオマエがここにいの…？」

「遅い。電話で今日は早く登校してって伝えただけど」

「あ、電池切れ中」

そう、恭弥までいるのだ。

しかも校門の前というのは大勢の生徒が通る場所……つまり、群れている場所だ。

そんな場所にいて、少しピリピリしていて、一体誰が被害を受けるだろうか。

「……今、ピリピリしてる？」

「当然だよ。ただでさえ問題が起きて、君が来るのが遅くて、いつ来るか確認するためにここまで来たら、この群れだ。

…全部、君のせいだよね…」

「ちよい待ち！！万が一、億が一オレのせいだとしても後ろ二つのだけだろ！！何で全部！！？」

「どうせ君、犯人知ってるんでしょ？」

「！！」

咄嗟とつとのことだったので、動揺が顔に出してしまった。

「…何で、そう思う…？」

「…改めて考えてもおかしかったんだよ。君がこの騒ぎについて何も調べないことは。

だから、考えられる答えは二つ。この騒ぎを君が起こしたもののか、犯人を知っているか。

…どちらにせよ、『君が犯人を知っている』ということは変わら

ないけど」

「…オマエはどうしてこう…推理力っつーかなんっつーか…それが高いんだろ…ハア」

もう隠しても無駄だな、と思って南が少しだけでも話そうと口を開いた時。

「でも、話さなくていいから」

「…うん、じゃあ話す…って、へ？話さなくていいの？」

「別にいいよ。君が犯人だろうがなんだろうが、犯人は咬み殺す」

ああナルホド、と納得し、南は再びため息をついた。

「…少しでも、話しておく。聞きたくなければ聞き流せ。

オレは犯人ではない。だけど、犯人を知っている。ま、オマエの推測通りだ」

「…いくら君でも並中の風紀を乱すとは本気で思ってたけど」

「つまり、オマエは初めっからオレが犯人を知っているだけだと思ってた、っつーことか…ったく…めんどくさい奴」

そう言って、南は手に持ったコーラを一口飲んだ。

「…被害状況は？」

「犯人知ってるくせに、それは知らないの？」

「悪かったな！！オレは犯人知ってるだけだったの！！」

「今は…ついさっき連絡が入った笹川了平も合わせて20人。風紀委員は8人。もしかしたら増えているかもしれないけど」

「そう。ま、オレは手伝わないけどがんばれー、恭弥よ」

恭弥が不機嫌なのを気にもせず、南はコーラを飲み干した。

「登校しながら飲み物飲まないでくれる？」

「うっせ。そんなことは校則に書いてないからいいんだよ」

「ハア…常識だけど」

「んじゃ、オレは常識離れしたっつーことで」

恭弥は呆れ、もう何も言っでこなかった。

「そうだ、被害者に共通してることってない？」

「…何で？」

「なんとなく」

南は被害者がボコられる以外で何かされているのだろうか、と思っ
て聞いてみた。

無ければ無いでいい。

ただ、一位と三位：恭弥と隼人は仲間だ。
仲間にはなるべく傷ついて欲しくなかった。

「僕は被害者なんてどうでもいいから。草壁にでも聞いたら？」

「ん、りょーかい」

南はそう言って電話を取り出した。

今近くに草壁を見つけられなかったため、電話して聞いてみることにしたのだ。

「ん、あーもしもし草壁ー？」

『風間さん！どうかされましたか？』

「いやー、今回の事件で被害者に共通してることってある？」

『：はい。被害者が皆、歯を抜かれています：被害が大きくなるにつれて本数は減っているようですが：』

「：被害者を、ボコられた順に言ってくれ」

『？はい：』

草壁から最初の被害者から、20人目の笹川までの名を聞き、南はため息をついた。

「：めんどくせーことになってんな：ま、いいや。んじゃ、頑張つて捜査を続けてくれ」

『はい。お気をつけて』

ブツツ、と電話が切れる。

「さーで、オレはどうしよっかなー…」

ゴミとなったペットボトルを近くの自販機の隣に置いてあるゴミ箱に捨て、伸びをする。

「（でもな…今から黒曜行っても暇だし…そーだ、家に帰って「授業には出なよ」）…心、読めんの？」

「君の考えは単純だからね」

「…そーっすか」

校門の前を塞がれ、南は仕方なく教室に向かった。

教室に着いても、いる生徒数が少ない。

「んゝ…大体の奴は親に外出禁止にでもされたか、殺^やられた奴の見舞いだな」

オレは見舞いする奴なんかいねーし、親もないから楽だなー、とか呟きながら席に座る。

そして、特にやることもなかった南は――

「zzz」

――寝た。

もちろん、南を起こす者はいない。
…遅れて来た、一人を除けば。

コンコンコンッ。

誰かが机を叩き、南は起きた。

「…なぜ、起こした…？」

「なあ、なんでこんなに欠席が多いのか知ってるか？」

現状を知らない、隼人だ。

「ん？今並中生が襲撃されてんだ。特に強い奴がな」

んー、と伸びをしながら答えた。

「そうだったのか…」

！まさか…10代目も…！？」

「あ、それは大丈夫だろ。沢田弱いから」

すぐに言い返した南に、隼人はため息をついた。

「…オマエはまだ気づかないのか…10代目の素晴らしさに」

「だから、別に何も素晴らしくないからな？」

南の言葉を見せしめ、隼人は沢田の素晴らしさを語り始めた。

しかし当然のことながら、南は二度寝をすることにした。

「オレはな…10代目のそんな所に…って、最後まで聞け！！」

爆睡した南からの返事は無かった。
そして南が起きることが無いのを知っている隼人は、携帯の電池が切れたので帰った。

「んー、よく寝た!！」

今は何時かなー、と思い顔を上げ、南は驚いた。
教室に誰もいないのだから。

「w h y . . . ?」

目覚めたばかりの脳をフル回転させる。

「今日は、黒曜襲撃のせいで大半の生徒が休んでる…空いてる席の方が多い位に。そうだったら、学校はどうする？」

…休みにする!？」

答えに辿り着き、南は急いで教室を出る。

昇降口に行くために階段を駆け下りながら、再び考える。

次に狙われるのは、誰かと。

「オレが守る奴は、恭弥と隼人だ。もし恭弥が狙われてて…いや、アイツは黒曜に乗り込んでるんだろうな…。」

つまり、今行かなきゃいけねーのは、隼人!!」

急いで隼人の携帯に電話を掛けるが、『只今、電話に出ることができません』。

そう、電池が切れているのだ。

「あのバカ!なんでこんな時に限って電池切れ!？」

電話という手段が無くなったため、勘で捜すしか無い。

…否、もう一つ手段があった。

ドォン…、という小さな爆発音。

「もう交戦中か！でも、おかげで大方の方角と交戦中距離は掴めた
！」

今の音が隼人のダイナマイトだと思って計算する。

「どうか…互いに重傷を負う前に着けよ！」

学校に置きっぱなしになっていたバイクに乗り、爆発がしたと思った場所…商店街に急いだ。

Episode 30 霧の仲間に出会おう!

南が商店街の中に入った時、遠くに三つの人影が見えた。

「あれか!」

その人影が誰なのか分かり、南はバイクを更に加速させる。もう、100キロは出ている。

なのに更に加速させたため、120〜130キロ出た。

そのエンジン音に気づき、三人がこちらを見る。

隼人は少し怪我しているが、千種はかなりボロボロ。

沢田は無傷。おそらく今来たばかりなんだろう。

「南!？」

「…3位は仲間か。でも、攻撃を止めろとは言われていない」

「風間さん!？」

たしかに、そうだ。

『南は仲間を守る』と言っただけで、『攻撃を止めろ』とは言っていない。

そして千種は武器のヘッジホッグを沢田に向けた。

千種の目的は、ボンゴレ10代目…沢田綱吉だから。

「あ、なんだ。沢田ならいいや」

沢田は南を守る、守りたい人じゃない。

だけど、恐怖で動けなくなった沢田の前に隼人が立った。

このことは南にとって予想外だったが、『隼人ならやりかねないな』
と思ってバイクから飛び降りる。

もう随分近くにいるのでバイクに乗って武器を持って守った方がいいのだ。

キキイイイン…。

短剣で防ぐが、針を短剣で防いでも完全には無理だ。
その結果…………。

「ぐっ!!」

「隼人！」

「ご…獄寺君!!」

防げなかった針が後ろにいた隼人に刺さった。

南にも少し当たったが、皮膚までは届いていない。
つまり、結果的に食らったのは隼人のみだ。

隼人はそのまま力なく倒れる。

「…始末する…」

次に千種が狙うのは、沢田。

南は沢田のことなんてどうでもいい。

だから沢田を無視して隼人の治療に取り掛かる。

「んー、なかなかいい毒使ってんなー。ま、千本^{アレ}には敵わないけど。
あの解毒剤は使っちゃダメだし…」

そう、南が持っている解毒剤は使えない。使ってはならない。解毒剤、というものは全ての毒を解毒できるわけではなく、それぞれの毒を解毒できるのだ。

だから、下手に千本の解毒剤をヘッジホッグの解毒剤として使用すると逆に更に毒を強くしてしまうかもしれない。

南がイロイロ考えている間に山本が現れ、沢田は山本によって助けられた。

その山本は2位。

犬の獲物だ。

他人の獲物に手を出す訳にはいかないのか、千種は帰った。

「風間さん、獄寺君は…獄寺君は大丈夫なんですか!？」

「ウルサイ。今考えてんだ…って、そんな暇ないからな…とりあえず布当てて、血と一緒に毒が抜けるのを祈るか」

そう言い、南はYシャツを脱いで隼人の傷口に当てた。

Yシャツの内側に赤いTシャツを着ていたので問題無い。

Yシャツに、血が染み込んでいく。

「あ、腕章外さなきゃ」

今更腕章の存在に気づき、二つの腕章を取る。

まだ血は付いていなくて、少し安心する。

「ん……」

「お、もう意識取り戻したか」

「獄寺君！！よかった…」

隼人が意識を取り戻したのを見て、南は立ち上がった。

そんな南を、『何があったのか』という目で見える沢田と山本。

「んじゃ、あとは頑張れ。どこか安全で治療できる場所…んー、思いつかないから自力で探して、そこでちゃんと解毒しろよー」

「なっ！？風間はいかねーのか？」

「だってオレ、暇じゃないし。それに、オレができる事はもう無い。じゃ、死ぬなよ、隼人」

そう言って、南は再びバイクに乗って姿を消した。

「さて…そろそろ行くか」

ここは、南の家。

室内にるのは、黒い服に、青い髪。ズボンにこれまた黒いポーチを付けた者。

スードだ。

首に二つのリングを通したチェーンをかけ、大きなフードを被って外に出る。

「さーて…もう骸の仲間は来てるのかね…」

そう言い、これから戦場となる黒曜ヘルシーランドに足を向けた。

黒曜ランド。

ここはかつて複合娯楽施設だったのだが、おととしの台風で壊れ、そのまま閉鎖した。

正面入り口の鍵は錆びていて、開かない状態。

だがスードは普段骸達が出入りしている場所を知っているため、そちらに向かう。

「♪♪♪♪」

なぜか上機嫌なまま、骸達のいる建物内へと入る。

行く途中には、ボコられた大量の黒曜生。

それを見し、踏み潰しながら進む。

「やーやーどうもー！早速オレの仲間と戦ってたね♪」

「んあ！スード！オマエ今頃来たのかよ！」

「ん？まーな。だって早く来る必要もないし。だろ？骸」

「クフフ…ええ、そうですよ」

もはや定位置となったソファーに座りながら、骸は答えた。
スードは窓側に行き、割れた窓ガラスを外して座る。

「勝手に壊さないでください」

「別にもう壊れてるんだからいいじゃん」

そう、もはや壊れていない窓ガラスを数えた方が早いほど、窓ガラスは壊れていた。

そんなテキトーな根拠を言うスードに骸はため息をつき、犬に声をかけた。

「そろそろボンゴレ達が来るでしょう…迎えに行つてあげなさい」

「やり！じゃーいつてくるびょん♪」

「おい、負けてもめげるなよ」

「うっせ！なんれオマエはオレが負ける前提で話してんらよ！」

「ん？……勘」

「ムツキー！」

「プッ！やっぱ単純…ま、がんばってこいよ」

スードは犬の反応で楽しんだのか、普通に見送った。

「あ、そーいえば千種は？さっき見た時ボッロボロだったけど」

「ああ、千種ならそこで横になっていますよ」

「ホントだ。ナームー」

「死んでません」

手を合わせてふざけるスードに、骸がすぐに言った。
スードは『分かってるって』と言い、窓の外を見た。

「…どーやら来たみたいだぜ？」

「おや、予想してたより早かったですねえ」

「おい、隼人も復活してるじゃないか！誰に治療してもらったんだろ？変態という名のシャルかな？」

「彼と戦うことになったら、どうしますか？」

骸は試すようにスードに問い、スードは笑って答えた。

「別にー？オレは戦わないから。もし隼人の方から戦いにきたら…ま、遊ぶかな♪」

「…そうですか…」

スードの言っている遊ぶがただ単に腕を試すだけだと分かり、骸は納得の意味も混じった返事をした。

「んー、骸の仲間がまだ来ないなら、オレ少し遊んでくる」

「ほう…どこへ？」

スードは窓枠に両足を外向けに乗せ、言った。

「犬達のいる場所だよ！」

そのまま窓から降り、姿を消した。

「あちゃー、もう戦い終わってた？」

「!!! 誰だ!!!」

スードが声を発すると、ようやく隼人達が気づいて声をかけてくる。リボーンは誰かが来ていたことに気づいていたようだが、黒曜中の制服ではないの知って警戒心を強めている。

スードはもちろんのこと、パソコンの『沢田の超直感が効かなくなる』機能を働かせてある。

スードが南だと、ばれないように。

「新たな刺客か!？」

「まだそう決め付けんのははえーぞ、獄寺。コイツは黒曜中の制服を着てねーからな」

確かに、と返事をする隼人。

「おめーは誰だ？どっかの脱獄囚ではないだろ」

「お、さすが虹の赤ん坊、アルコバレーノというべきかな？そのとおり」

『虹の赤ん坊、アルコバレーノという言葉にリボーンは警戒心をより一層強くした。

「てめえ…何モンだ」

「相手の名を知りたいのなら、まず自分から名乗れ…と言いたいところだが、オレはオマエらのこと知ってるからな」。

オレはスード。そうだな…オマエらと好んで敵になる気は無い。骸と、そこにいるボンゴレ10代目…沢田綱吉との一騎打ちが誰にも邪魔されずにできたらな」

沢田をまっすぐ見ながら、話した。

目も隠れているので、ただ沢田の方を向いているだけにしか思われないだろうが。

「へー、なら良かった…って、オレと六道骸の一騎打ち…!!?無理無理!無理だって!」

「オマエに拒否権はない。何せ、骸達に襲われている身だからな。襲われる側は、指名された者が戦わなければ他の誰かが傷つく。オマエはそれでいいのか?沢田綱吉」

「!!オレじゃなきゃ…他の誰か…?」

やっと自分が逃げられないということが分かったようだ。スードは内心ため息をついた。

「騙されないでください、10代目!」

「ご、獄寺君…?」

突然隼人が叫び、沢田を守るように前に立つ。

「コイツはまだオレらの敵ではない、なんて言ってますが、どうせ骸の仲間です! こうやって隙について攻撃するか、骸に10代目の情報を流す気なんです!」

「いやいや…その気だったらとくに流してるから。例えば…ボンゴレ10代目の家、とか。あ、名前も知らなかったみたいだから名前も知らせるし」

隼人をバカにするように笑う。

念のため、言っておく。

スードは全身真っ黒な服装に身を包んでいて、フードを被っているせいで鼻から下しか見えていない。

これは、リボン目線ではのことで、隼人や沢田ほどの目の高さから見ると、口しか見えていない。

こんな状況で笑っているのだ。
心底恐ろしい光景だろう。

「ひいひい!! この人もヤバイよ!」

「おめえ、骸の仲間じゃないなら、どこのファミリーの人間だ?」

唯一スードの姿に恐怖を感じていないリボンが、スードに聞いた。

「ざーんねん♪オレは無所属さ。あー…一応所属あるけど…今は活

動停止だとか何とか言ってたな…」

スードが言っているのは、V A R I Aのことだ。
隊服が送られてきた時に同封されていた手紙で『仮V A R I A隊員』
にさせられてしまったから。

「活動停止…？名を言ってみろ」

「何でオレがオマエに全てを話さなきゃなんねーんだよ。気づいて
んの？今はオレの気分でオマエらと敵対してないけど、また気分次
第で敵対するんだぜ？」

若干殺気が混じったまま言われ、何人かの額に冷や汗が流れる。
リボーンは帽子を深く被って『そうだな』と言った。

「んー、もう話すのも飽きたなー。そろそろかーえろっと♪まあ頑
張れよー」

そう言ってスードは来た道に戻っていった。

「…アイツ、何者なんだ…？」

リボーンが移動しながら呟いた。

「リボーン？確かにあの人もヤバそうな雰囲気だったけど…まだオレらに敵対心は無さそうだから平気じゃないの？」

「ツナ、だからお前はあめーんだ。アイツは好んで敵になる気はない、と言ったが骸の仲間じゃないとは言っていない。いや…十中八九骸の仲間だ」

「え…え——！！！！？じゃ、じゃああの敵い！！？」

「…お前は話を聞いていなかったのか？オレらの敵でもない。つまり、今は敵でも味方でもないんだ」

「あ…そういうことか…」

ようやく理解し、スードのことを思い出す沢田。

そんな時。

沢田の携帯が鳴った。

「あ、電話…咲ちゃんからだ！」

急いで電話に出る。

「咲ちゃん！？今どこにいるの？」

なぜそんなにも気になっているのかというと、朝からずっと姿が見えないからだ。

沢田は朝から電話を掛けていたのだが、一度も電話に出てくれなかった。

『うん…ごめん、携帯どこやったのか忘れちゃって…ツナ達は今どこ？』

「え、えっと…黒曜ヘルシーランドっていう場所なんだけど…」

『…！！黒曜！？それって…あの並中生襲撃事件の犯人じゃ…』

「うん…そうなんだよね」

沢田は真っ青の顔で返事をした。

こんな場所に来たかったわけじゃない。

でも、仲間が傷つけられているのを黙って見過ごすわけにはいい。

『…私も、行くね』

「な！？何言ってるの！ダメだよ！こんな危ない場所に…」

『大丈夫。じゃあ出来るだけ早く行くから』

沢田が言い返そうとしたが、電話が切れたことによってそれは叶わなかった。

「どうしよう…」

「どうしたんだ？ツナ」

沢田の真っ青な顔を見て、リボーンは聞く。

「咲ちゃんが…来る、って…オレが場所言ったから…」

「…なるほどな。でもそれなら、アイツが来る前にカタをつけちまえばいいんだ。さっさと行くぞ」

沢田を落ち着かせる為なのか、それともさっさと先に進みたかっただけなのか。

リボーンの言葉で沢田は落ち着き、先に進んだ。

スードは頭からフードを外し、骸がいる部屋へ入った。
すると、先ほどまではいなかった者が5名。
寝ていた千種も起きている。

「おや…もう戻ってきたのですか」

「ああ、なんか飽きたから。で…コイツらは？」

「僕らの仲間ですよ」

「え…こんな奴らが骸の仲間…？」

スードは少し引いていた。

ランチアのこと知っているからいい。

だが、クラリネットを武器にしている女や、もうオッサンという言葉が相応しい程なのに学生服を着ているオッサン、そのオッサンに仕えるようにしている発狂した二人の変人を見過ごせなかった。

「ええ、そうです」

「骸…！絶対にアイツらは足を引っ張るだけだ…！ランチアとかいう男はこの前も会って、中々強そうだから納得いくが、クラリネットを武器にする女とオッサンなのに学生服着たオッサン、それに発狂した変人を仲間にしない方がいい…！これは絶対だ…！」

「失礼ね…！このクラリネットはただの楽器じゃないわよ！」

「ウジュジュジュ、全くだす。それにオッサンなのに学生服着たオッサン、というのは結局はオッサンじゃないですか！」

バーズ、というオッサンが言い切った後、この場に沈黙が流れた。

「…何？もしかして自分がオッサンじゃないと思ってるの？」

「…そうだったら、もう最低で最悪な変態オッサンだよな…」

「ああ、僕は彼が制服を着るのを強制させていませんよ？彼が勝手に着たのですから」

「あーよかったよ、骸。もしオマエが強制的に着させてたんならオマエもおかしくなってるのかと心配するところだった」

「ええ、この男の言う通りだわ」

知らない内にバースを貶^{けな}すことでM・Mと仲良くなっていた。

「あ、オレは一応女だぜ？ま、変装してる時は男として名乗るつもりだけど。でも普段からこんな感じだからな…ま、気にすんな」

「「え……？」」

今度はM・Mの声とバースの声が重なった。

「ちょ、本気で言ってるの！？（骸ちゃんの次にカッコイイと思ってたのに！）」

「ん？本気でそうだけど…まあ気にしないでくれていいぜ？面倒だから」

「…あんたが来る前に骸ちゃんから話は聞いてたけど、本当に面倒臭がり屋なのね…呆れてもまだ足りないくらいに」

「おい。呆れてもまだ足りないくらい、ってどんくらいだ」

スードにとっては日常となった軽い口喧嘩をしていると、骸が声をかけた。

「そろそろ行かないと、ボンゴレ10代目達がヒマになってしまいますよ？さて…次は誰が行きますか？」

そういえば結構時間経ったな、と思ってスードは窓の外を見る。すると、先ほどまでは見えていた沢田達が見えなくなっていた。

「それなら、私がいくわ」

名乗り出たのは、M・M。

「おー、ただのクラリネットで戦うのか…じっくり見といてやるよ」

「ただのクラリネットじゃないってさっきから言ってるでしょ！まあいいわ…じゃ、後でちゃんと報酬は払ってね、骸ちゃん」

「わかってますよ」

「じゃーオレもヒマ潰しで見に行こつと♪」

こうして、スードとM・Mは部屋から姿を消した。

Strordinamente 6 跳ね馬に会う!

夏祭りが過ぎ、もう少しでお盆になる頃。

南は最近よくやらされている見回りに行っていた。

「めーんどくさー：つか、こんな暑い日に見回りとか：恭弥がやれよ…」

そう言いながらバイクに乗っているので、温度は高いが風のおかげで涼しい。

ちなみに、仕事は見回りだけなので楽だ。

南が暑いのに耐えられなくなり、近くのコンビニに寄った時。

駐車場に場違いな車があるのに気がついた。

「…いや、おかしいよね：？なんでここにフェラーリが？」

そう、フェラーリがあるのだ。

コンビニの中を見ようと思ったのだが、今は昼。

コンビニ内よりも外の方が明るいので見る事ができない。

「…ま、コンビニでアイス買うつもりだったし：ちようどいいか」

バイクを降り、コンビニの中に入る。

「っしやいま：いらっしやいませ！：！！風間さん！」

店員が南に気づくと少しだらけ気味に言っていたのを言いなおした。だが、南はそんな店員をガンスルー。

ここは、南のマンションの近くにあるコンビニだったのだ。
だから、店員全員が南のことを知っている。
あまり南が行くことも無い深夜の人も知っているのだ。

「（さーて、フェラーリ乗る奴は絶対場違いなオーラしてるはず。
誰かなー）」

平均より少し広いコンビニをウロウロすると、すぐに見つけた。

「…ハア…変な奴だろうとは思ってたけど、まさかコイツだとは…」

南はその者を見て言った。

金髪で、腕にはタトゥー。

その者の隣には眼鏡をかけた、黒髪の人。

金髪の人よりは年上そうだ。

「おっ、オマエは正月に会った…」

「人違いです、サヨウナラ」

くるっと回れ右をして歩き出す。

「まー待てって。今回はツナ達に会いに来たわけじゃねーんだしよ」

「…別に、沢田に会いに来たかどうかなんて関係ないんだけど。オレはオマエと関わりを持ちたくないだけ」

「ハハハ、本当にリボーンの言う通りの奴だな！おもしれえ」

「……人のことを面白がるなよ…ハア」

肩を掴まれた手をどかし、南は向き合った。

「で、沢田に会う訳じゃねーのにどうして日本なんか来たんだ？ 跳ね馬」

「！まさかオマエがその名を知っているとはな…こっちの人間ってわけでは無いと思ってたんだが」

「別にー？ま、一応そーゆー知り合いもいるけど」

「なるほどな…」

ディーノは顎あごに手を当て、考える素振りをする。

「いやー、オマエのことをリボンが誘ってなかったらオレがスカウトしたいくらいだよ。オマエからは覇気も感じるし、常にスキが無い」

「スキが無いのはきつと、あのバカのせいだろーな。アイツはいつ、どこに現れるかわかんねーから」

南が言っている者は、恭弥のことだ。

いつ『戦おう』や『咬み殺す』と言ってくるかわからない…というのは、南がしょっちゅう仕事をサボっていることが原因だが…。

「へえ…そんな奴がいんのか…と、こんな場所で長話するのはよくないな。場所を移そう」

「いや、オレ仕事の途中だし。つーかオマエと話す気なんてアリン

コほどもないし」

「アリンコってオマエ……じゃー何か奢ってやるから」

「それもいい。金には困ってない」

しつこいディーノをことごとく断っていく南。

周りの者の顔は真っ青だ。

それは皆、南と対等に話しているディーノに驚いているだけだが。

「んー、じゃあ……あ、オレの方からリボーンにオマエをファミリーにするのをやめた方がいいって言うておくからよ」

「！」

南は商品を選んでいる手を止めた。

ディーノは予想外だったらしく、かなり驚いた表情だ。

だが、南はすぐにため息をついて元の表情に戻った。

「…でもオマエがチビちゃんに言っても、諦めないだろーな…しつこいから」

「あ…確かにそうだな…でもいいじゃねーか、話くらい」

しつこい、と言ってアイスを取った。

このコンビニへはアイスを買うために入ったのだから。

「…ま、見回りすんのめんどくせーからいいぜ？時間つぶしには」

「お？それならよかった。場所は…そうだな。どこか希望の場所は

あるか？」

「ない」

右手に4つのアイスを持ち、南はレジへ行った。

レジは少し混んでいたのだが、皆が南を優先してすぐに買った。

ちなみに、南のレジをやっていた人は冷や汗ダラダラで、他の店員も見守っていた。

「…ところでオマエ：なんでそんなに怖がられてるんだ？」

「さあね。知らねーよ。ま、考えられるとしたら並中の風紀委員になったことが原因だろーな」

「？風紀委員？」

「知りたかったら今度沢田に聞け。オレは話すのメンドクサイから嫌だ」

ここまで面倒臭がりだとはねー…、とディーノが言っているが、南はそれを見殺し。

ディーノはロマーリオの隣に座り、南にも乗るように促す。

「いい。バイクあるし」

「…は？」

二人の声が重なった。

「だから、バイクあるから」

「…ボス、いつから日本は中学生がバイク乗れるようになったんだ？」

「知らねーよ…なあ、免許は？」

「ないけど？」

当然もように言う南に『やっぱりか…でもオマエならあり得そうだと返事をしたディーノ。もう南を常識の範囲内で考えてはいけなことが分かったようだ。』

「じゃ、場所はロマーリオの運転次第でいいか？」

「ん、行き当たりばったりか。いいぜ、オレそーゆーのよくするから」

「…ボス、オレは一応考えて進んでいいか？」

「…オマエに任せる」

こうして、フェラーリの後ろから漆黒のバイクに乗った風紀委員が付いてくる、という怪奇現象が起こり、それは並盛全土に響き渡った。

「で、どこ行くんだよ！」

南はバイクから少し叫ぶようにして聞いた。

「前にこの町に来た時に見つけたコーヒー屋だってよ！ロマーリオ

がウマイっつーんだから間違いないはずだ!」

「わかった!」

南は場所を聞くと、先ほど買ったアイスを手にとった。ちなみに、スピードは変わっていない。

「おまっ…何運転中にアイス食おうとしてるんだよ!」

様子見として後ろを見たディーノが南に叫んだ。

「だって暑いじゃん?」

それ以外に何か理由でも?と言う南。

でも、確かに南の場所は暑い。

フェラーリの後ろ…つまりは車の後ろで漆黒のバイクを走らせているんだ。

制限速度を無視して早く走っていた先ほどとは違い、今度は制限速度を守るロマーリオの後ろで。

風も弱い。

だから少し南はイライラモードに入っていたのだが、『そうだ、アイスがあったからそれ食お』と思い、解決した。

「んー、やっぱり何種類か買っというてよかった。もしスプーンとか使わなくちゃいけないのしか買わなかったら今食えないもんな。あー、クーリッシュ最高!」

「オマエなあ…危ないだろ」

「あ、大丈夫。もし急ブレーキとかされても前の車に突っ込むだけ

だから」

「ああ、それなら良かった…って前の車ってこれだろ！！ダメだつて！」

「うるっせーなー。マフィアが車一台でぎゃあぎゃあ言うな」

「…マフィアって分かっててその口利くのもすごいけどな…ハア」

南は今、右手で携帯をいじり、左手で運転し、アイスは銜^{くわ}えている状況だ。

そんな状況でマフィアに『ぎゃあぎゃあ言うな』と言うのだ。
デイーノは呆れ、ため息をついた。

「着きましたぜ、ボス」

ロマーリオが車を駐車場に入れる。

「おっと、危ない」

南は左手だけでハンドルを切り、ブレーキをかける。

ロマーリオが徐々にスピードを落として、南もそれに合わせていたため、そこまでスピードが出ていなかった。

そのため、南は無事にバイクを止められた。

「あ、ちなみにオレ金払う気ねーかな？さっき『奢る』って言われたから」

「なっ！それはオマエが断っただろ！」

「だけど、男に二言は無いだろ？」

「オマエもおと…じゃねーんだよな…外見だけじゃ絶対男にしか見えなけれど」

南はクククッ、と笑って『んじゃ、よろしくな』と言った。
店内に入ろうとした、その時。

「あ、電話」

南の携帯が鳴った。

電話の着信音だったので、急いで携帯を取る。
ディスプレイには『恭弥』の文字。

「もしー？」

『面倒だからって、それまで省略しないでくれる？』

「いちいちウルサイなあ。で、何？」

『別に。君はいつも見回り1時間で終わらせるのに今日は30分も多くやってるからね。どこかで昼寝してるのかと思ったただだよ』

「おお！！オレ偉くね！！？見回り1時間半もやってんの！？うん、じゃあ終わりだ！今回も異常ナシ！」

『じゃあ今から応接室来て「んじゃまたな！」』

ブチッ。

恭弥の返事も聞かずに電話を切った。

「よし、電話をかけられないように電源切らなきゃ」

電源ボタンを長押しして、電源を落とした。

「あ、跳ね馬。オレもう時間潰し終わったから帰るわ。まあ時間潰しには丁度良い話し相手だったぜ」

「…オマエなあ…まあ来るまでで大分オマエのこと分かったから、今オレが頼んだって無駄なのはわかるけどよ…」

「まーどんまい！じゃな」

南はそのままバイクに乗って消えた。

「…これで、今回の任務は完了…でいいのか？」

「きっと大丈夫だと思うぜ、ボス。依頼の『風間南』という人物を観察する』というのは達成したんだからよ。

…一応」

「そうなんだよなー！一応、なんだよ…あー、九代目はこれで満足してくれんのかなー」

「さあな。ま、早くイタリアに帰ろうぜ」

「ああ」

そう、ディーノ達は九代目からの頼みで日本に来ていた。
なんでも『リボン』からよく聞く“風間南”の観察をしてきてほし

い。リボーンがファミリーとファミリー候補者の中では一番強い、
と言うのでね』^{おこな}と言われたのだ。

これは、リボーンが行っても意味の無いこと。

だから九代目はディーノに依頼という形で頼み、南が気づきそうな
フェラーリというド派手な車を用意したのだ。

本当はこれからゆっくり話を聞いて『なぜファミリーに入りたくな
いのか』や『ツナをどう思うか』などを聞こうと思っていたのだが、
南が帰ってしまった。

無理矢理止める理由を言うことができないし、南の性格からして何
で釣ってもダメそうだったので、諦めた。

「ま…かなり変わった奴だったな。アイツは…」

ディーノは南のことを思い出してため息をつき、車に乗った。

その表情は明るかった。

…イタリアに帰って九代目に話すのを考えると、少し憂鬱だったよ
うだが。

S t r a o r d i n a r i a m e n t e 6 跳ね馬に会う! (後書き)

デイナーとの接点を作っておきました。

とは言っても、結構前の話です。

夏祭り後のことなので。

でも特にこれ以上の接点は無い：予定です。

もしかしたら作るかもしれませんが。

では。

Episode 31 更なる刺客!

「こんな連中に柿ピーや犬は何を手こずったのかしら」

M・Mが話す。

スードはM・Mの言葉に合わせるように『ククッ。確かに♪』と笑いながら言った。

「それがただのクラリネットじゃないのは本当だったみたいだな」

「だからずっとそう言ってたじゃない! まったくアンタは…」

「ああ!! さっきの…スード!」

スードが物陰からM・Mの隣に現れ、沢田が気づいて声をあげた。リボーンは『やはり、アイツは敵なのか…?』などと呟いて昼寝に入った。

スードからは殺気を感じず、唯一感じるM・Mはそこまで強くないと察したのだろう。

「あ! あの子黒曜の制服だ!!」

「ってことは」

「しかし敵は3人組だったはず…いや、もうスード…アイツがいましたね」

隼人の言葉に『そーそー♪その銀髪の不良の言う通り♪』とスードは反応を示した。

そして、M・Mの方を見る。
見て、スードは確信する。

『M・Mは勝てない』、と。

何が確信させるのかは分からない。
だが、確実にそう思った。

もしM・Mが油断しなければ少しの勝機はあるかもしれないが、スードは忠告をしない。

自分が望むのは『沢田と骸の一騎打ち』。

ここでM・Mが負けようと関係無いのだ。

：少し薄情に感じるかもしれないが、スードは元からこんな性格だ。
M・Mは、仲間の仲間。

他の者に例えるなら、仲間である隼人の仲間：沢田のような存在。
仲間には悲しんで欲しくないが、何せスード：南が守りたい者は所属がバラバラ。

そこまで気を配ってられないのが現実だ。

：正確には、もう一つ理由があるが…。

「バッグと洋服買い漁るだけ」

M・Mの声と共に、ヴヴン、という音が聞こえた。
ようやく本格的な戦いに入るつもりのようなようだ。

「で、アンタは戦わないの？」

M・Mがクラリネットを吹くのを一時的に止め、スードに問う。

「んー：なんかそーゆー気分になんないからな：気分が向いたら？」

「ハア：じゃあ私が貰っちゃうわよ」

「どーぞ」

座って観戦したくなったので、どこか座れそうな場所を探す。
破壊されて丁度良い高さになっている、元は壁だった場所に座って
沢田達を見た。

「さ…誰が行く？」

品定めするような目で4人を見る。

ちなみに、リボーンは昼寝中なので対象外だ。

「私がいくわ」

スードの呟きに答えるようなタイミングで、ビアンキが名乗り出た。

「あんたまちがってるもの。大事なのはお金ではなく、愛よ」

「いや、そーゆー問題じゃないと思うけど…」

遠くからビアンキに軽いツツコミを入れた。

そして、ビアンキ達の会話を聞く。

どうやらビアンキがM・Mのクラリネットの仕組みを話しているよ
うだ。

だが、大したことも無い仕組みだったのでスードは肩を落とす。

『ガックリ』という言葉がよく似合う状況だ。

「ちょっと！何ガツカリしてんのよ！アンタが私と戦う？」

スードのことを見ながらM・Mが叫ぶ。

「はあ？オマエごときがオレと同等に戦えると思ってんの？別に戦いたいなら……………」

いつでもかかってこい」

「「「「！！！」」」」」

殺気の混じった言葉に、皆が冷や汗を流す。

「ムカつく…でも、悔しいけど…確かにアンタの方が強いだろうか…遠慮するわ」

「ククッ♪あっそ♪」

スードの言葉を聞き、沢田は顔を真っ青にする。

別に殺気が混じっていた訳では無い。

ただ単にスードから無意識に発される『ヤバイ何か』に気づいて、だ。

「あの、スードって人…本当にヤバイ…もし…もしあの子が戦ったら…殺されてたかも、しれない…」

「10代目？」

「あ、いや…何でもない…き、気にしないでいいよ。今は、ピアノの戦いに集中しよう」

「は、はい…」

沢田が言わないなら無理に聞くことも無いので、隼人も戦いに集中した。

そしてスードは沢田が思った通りに、もしM・Mが自分との戦いを望んだら殺す気でいた。

わずかだが、一瞬だけM・Mに殺気をとばしてもいた。

「…所詮アイツは…骸にとって捨て駒だろう。そこまで強いと思えないし」

M・Mには聞こえないよう、小さな声で呟いた。

「ポイズンクッキング大型料理!! 食べ放題!!!!」

ビアンキが両手に大量のポイズンクッキングが乗った皿を持つ。

「おっえ…つか料理がブショアア、ってなってんのはマジでヤバいだろ…」

これを完食する為には何人が犠牲になるんだろ、としようもないことを考えながら観戦する。

「バーニングビブラート!!!!」

ヴウン、とクラリネットから発せられた音が響く。

だが、ビアンキは怯^{ひる}まない。

料理を盾にしているので攻撃は上手く防御している。

「そこまでよ! ラストショートケーキ!!」

「キャアアア!!」

「いや…どこから出したんだよ…さっきも思ったけど」

どちらの味方でもないスードは、のんびりと、どーでもいいことを言っていた。

「なんて言うと思って？」

接近戦も、得意なの!!」

クラリネットをヌンチャクのように分解して、ビアンキの頭を叩く。ビアンキはその勢いに流され、背中を地面で擦る。

「なにが愛よ! 金に勝るものがありわけないじゃない!

さあ、とどめのひと吹きよ」

「とどめのひと吹き、つーのも締まんねーなー…」

またどうでもいい締めを気にしている。

ぶっちゃけ…いや、もう気づいているだろうが、スードはこの戦いをただの遊びのように見ている。

だから戦いに関しては無関心。

ただの暇潰しに見ているだけだ。

なので、どうでもいいことを気にしている。

「ひぎゃアアア!」

何事?、と思って叫んだ主のM・Mを見る。

見れば、口には紫色の謎の物体。

鼻からはミミズのようなモノが出てきている。

「そうっす。アネキが結婚式の時に修得した、触れたもんをポイズンクッキングにする究極奥義…」

センシドクバンコウ
「千紫毒万紅！！」

隼人の言葉の続きを言うように、ビアンキが言った。

「そんなバキヤなああつ」

色々なショックが重なったのか、M・Mは後ろに倒れて気絶した。

「おーおー、やっぱ負けたか♪ぶっざまー」

顔を真っ青にしているM・Mを笑い、物陰に隠れている者を警戒する。

いくら気配に気づけても、誰かまでは分からないから。

「ウジュジュ。そんなにピリピリしないでくださいよ、スードさん。私は次の敵：最後の敵として来ただけなのですから」

「テメエか：気持ち悪い。さっさと敵に返り討ちに遭えばいいものを」

「なかなか面白い冗談で」

冗談じゃなくてガチだし、と言いながらバースに向けていた目を沢田に移す。

沢田もスードを見ていたようで、目が合った。

最も、沢田からはスードの目が見えないのでスードにしか分からないことだが。

「あの強欲娘のM・Mがやられたのは実にいい気分だ。勝利の余韻

に浸っているとところ悪いのですが…。

お友達が狙われてますよ」

そう言うバーズが持つパソコンに映るのは、笹川了平の妹である笹川京子と、三浦ハル…それと、走っている山下咲の三人の姿。

京子とハルの後ろに、僅かだが黒曜わずの制服が見える。

咲の後ろには、特に何も無い。

「京子ちゃん!! ハル!! 咲ちゃん!!」

「あれ? さっきこのオッサンと一緒にいた変人1号、2号に似た影が…」

スードは先ほど付けた名、変人1号と変人2号に似た影を見つけた。その不審な影には、沢田達は誰も気づいていない…眠っているようにしているリボーンを除けば。

バーズは京子とハルの姿を特に大きく、咲の姿は二人の半分ほどの大きさにして壁に映し出す。

これだけを見ると、女子中学生をカメラで撮影し、それを拡大する変態にしか見えない。

「キモイ趣味…」

「…何か誤解してませんか? スードさん…」

「オマエごときがオレの名を気安く呼ぶな」

「ウジュジュ…それは失礼」

スードには適わないのを悟ったのか、バーズは反論して来なかった。

逆にその様子を見て、沢田達はより一層スードに恐怖を抱いた。だが、それは次にモニターに映された姿によって吹き飛んだ。

「うわあ!!」

映ったのは、先ほどのスードが気づいた、変人1号と2号。

あんな覇気の無い奴でも、一応は囚人だったのでスードは驚いた。

「見てください。もうあなた達のお友達で遊びたくてしょうがないって様子だ……ウジュ」

「うわー、さすが変態の僕の変人1号&2号!趣味も最悪っ!」

手をパチパチ叩いて、完全にバカにしているスード。

対照的に、沢田達は慌てている。

「ふざけんな!! あいつらはカンケーねーだろが!! 殺し屋を戻さねーとぶっ殺すぞ!!」

隼人がジジイの胸ぐらを掴みながら叫ぶ。

「おっと、私には触れない方がいい。ほらお友達が……。」
バラされちゃいますよ」

「…このジジイの趣味が悪すぎて同意もしたくないけど、マフィアなんだからカンケーある、ないは、それこそカンケーねーよ。

逆にオマエがこのジジイの友人…ま、いたらだけど殺そうとして、ソイツがマフィアに関係無くても、オマエにはどーだっていいようにな」

スードの言葉の通りなので、隼人は何も言うことができなかった。

「離れていても私は彼らに指示できる。お友達の命は私がにぎっているんだ。おまえらにガタガタぬかす権利はないんだよ。二度と触れるなボケ」

これを聞き、隼人はバースを離す。

だが、スードはイラついていた。

今はスードの姿だから行動できないが、隼人は南にとって大切な仲間だからだ。

そんな人を、どーでもいいオッサンに『ボケ』と言われたのだから。……だが、そんな悩みは……思いは、もう通り越した。

今、自分がやっていることは……そんな大切な人を裏切っているのと同じだから。

「（そうだ……今のオレには、隼人を貶^{けな}したオッサン一人、怒っている権利は無い。ただ……耐えるしか、我慢するしか無い……。裏切りは、一番最低なことだからな……）」

少し、悔しかった。

だが、スードは少し勘違いしていた。

今までやったことで、何一つ裏切りに値することはしていない。

もしあるとしたら、スードという存在^{存在}。

常に沢田達に恐怖を与えている存在だからだ。

「それでははじめましょー。うーん、そ・お・だ・なー」

「キモイ」

「……決まらないじゃないですか、スードさん」

「オマエが決められよーがどーだろうーが、そんなモン関係無い」

寝っ転がりながら欠伸をし、完全にリラックスモードでバーズにギリギリ暴言にならない言葉を吐く。

「では、お仲間でボンゴレ10代目をボコなぐりにして下さい」

「…また、キモイ趣味……」

「…スードさんは静かにしててもらえますか？」

このバーズの言葉に、スードの眉間みけんがピクツと動いた。

「デメエ…なんかさっきからムカつくなあ…オレと殺し合いでもしたい？」

「い、いいいいいやですねぇっ!!今っ、今のは本気で言った訳無いじゃないですかあっ!!」

冷や汗をダラダラと流しながら、必死に否定するバーズ。

端から見れば、学生服を着たオッサンが全身真っ黒な服装を着た中学生に必死になっている訳なので、かなりシュールだ。

「…あの人はなんなんだろうね…」

「さあ…敵なのかどうかも分かりません…」

「ハハッ。もしかしたらオレ達の味方してくれてんじゃねーか？」

「…でも、油断はしない方がいいわよ…きっと、今まで現れたどの敵よりも強いのは確実」

沢田達がスードに対する謎が更に深くなった。

スードは先ほど隼人がバカにされたのもあり、不機嫌だ。

「……………」

スードが飽きて何も言わなくなったのに安心し、バーズは話を続ける。

「彼女達を無事お家に帰したいんでしょう？ だったら出血するまで殴ってくださいよ」

「あれ？ それって結構沢田綱吉の得意分野じゃね？ 骨が折れるまでかと思ってた」

「ウジュジュ。そこまでやる必要は無いですよ。私は驚いた顔が見ればいいのですから」

「またでたー、最悪な趣味。いや…何で骸がオマエも仲間にしたのか分からん」

手を頭の後ろで組み、本格的に寝る体制になる。

沢田達にとってはかなり緊迫した状況なのだが、そんなものはスードに関係無い。

その沢田達は、バーズの言っている意味が分かっていない様子。だが、スードが沢田の情報を持っている、ということで警戒はしている。

最も、その情報の真偽は置いて、だ。

「例えば彼女の髪が突然燃えあがったら、どんなステキな顔をするだろう」

この言葉でようやく理解し始める。

「ウジュ。言ってたらずりたくなってきちゃいました」

バーズがそう言うと、ヂヂとジジが手に持ったライターの火を灯す。

「さあ決定的瞬間ですぞー。スードさんもよく見ていてください
ね？」

バーズの言葉に返事をせず、スードは立ち上がった。

そして手に着けている黒い革手袋を、キュツと強く引っ張る。

「ああ、そうだな……よく見てやるよ」

バーズの前まで歩き、右手を強く握る。

「今日の前で…オマエの少ない髪を焼いてなあ!!」

ボゴツ、と低い音を鳴らし、スードはバーズを殴った。

「ぼぶうっ!!」

バーズは勢いに逆らえず、そのまま吹っ飛んだ。

その距離、およそ5メートル。

もちろん、気絶。

骨は何本か折れているが、首の骨は折れていない。

「ふー…手袋してると少し殴りにくい。でも首の骨も折れればよかったのになー」

「なっ…何してるんですか!!?」

スードの行動に誰もが驚き、沢田が聞いた。
そのまま後ろに振り返り、沢田を見る。

「何って…このジジイをぶっ飛ばしただけ」

「そっ、そんなことしたら…京子ちゃん達が…!」

慌てて沢田はモニターを見る…が、ヂヂとジジはは何もしていなかった。

何で?といったげな表情を皆がする。

「オレはこのジジイより強いからな。で、コイツは常にオレに敬語で話していた。それにオレは、あの変人1号2号の仲間の仲間だし」

「…へ?」

どうやら理解できていない様子。

「しっかり説明すんのダルいな…ま、オレがコイツより強くて、あの変人共は強者の言うこと聞くようにしてあるんじゃない?」

コイツがそーやって育てた、とか?」

倒れたバーズの頭を右足で踏みながら話す。

「…テメエは、ソイツの仲間じゃねーのかよ！」

隼人がスードに問う。

「ああ…仲間では無い。コイツは、仲間の仲間だからな」

「…でも…そんなことをして、オマエの仲間が傷つく姿を見て…オマエは何も感じねーのか!？」

「獄寺、落ち着けて…」

隼人は、スードを南と重ねていた。

仲間を大事にする、南。

仲間の仲間を、自らの手で倒した、スード。

この二人が同一人物だということには、もちろん気づかない。

「オレはな…仲間は信じるし、守る。だけど…」

仲間の仲間、なんてどうでもいい。オマエにもいないか？仲間の仲間だけど、どうでもいい奴」

「!！」

隼人には、この場にいる者で当てはまる者がいた。

自分が尊敬し、忠誠を誓っている沢田の友である、山本武。

もしも山本が死ぬようなことがあったら、沢田は悲しみ、傷つくだろう。

だが、自分自身にはどうなのか？

…きつと、沢田が傷つくのに傷つくだけだろう。

「…その様子だと、いるな…？」

「…だったら、どうした…それにオレは、仲間の仲間を自らの手で倒したりはしない」

「……そうだな…」

スードの声は、少しだけ寂しそうだった。
そのことに沢田は気づいた。

「…ま、いいや…あーでも一応気をつけとけよ？」

「え？な、何にですか…？」

スードが立ち上がり、建物の方に歩きながら沢田の問に答える。

「そのモニターに映っている奴らだよ。もしかしたら、主が殺^やられたって気づいて発狂して、殺すかもしれないから★」

「なっ……それって結果的にオマエのせいだろうが!!」

隼人が叫ぶが、そこにスードの姿は無かった。

「あれ…骸もない…」

スードが先ほど骸達のいた場所に戻るが、誰もいない。

「笹川の妹達、生きてるのかなー」

実際、スードはそんなことどうでもいい。

彼女達は、仲間の仲間…。

もし隼人が『仲間』と認識していないのなら、仲間の仲間の仲間。

どうでもいいと思える存在だ。

だから、彼女達がシャルや10年後イーピン…それと一応10年後ランボに助けられたことなど知らない。

「ふう……疲れたし、しばらく寝よ……」

ソファーには座らず、そこらへんの壁に寄りかかるように座って、眠りについた。

Episode 31 更なる刺客! (後書き)

長かったですね…。

6000字は超えていました。

読者の皆様、お疲れ様です。

うーん：M・Mとバーズの戦いだけなのに、どうしてこんなに長くなっただろう…。

今回は少し、南の過去に触れるフラグ立ててみました。

仲間の仲間がどうでもいい理由には、正確にはもう一つある、の場所ですね。

大方予想はつくと思います。

明日は大晦日…。

私はまっつっつたたく実感がありません!!

きっと新年になっても『もう2012年か…』という実感がわからないと思います。

：去年がそうだったんで、絶対にそうですね、ハイ…。

皆さんは大晦日に何を見るか決めてますか？

カウントダウンの時とか、いろいろありますよね。

私の家では、もう決まっています！

番組予約もしてありますし。

楽しみです♪

そして、年を越す時はリボーンのマングア片手に越したいと思います。

：去年もそうだった：ちなみに、去年は最新刊を持っていましたね。長くなりましたが、ではまた！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6945y/>

家庭教師ヒットマンREBORN! 自由な風、来る！～改～

2011年12月30日22時48分発行